

宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 14

1995・1996

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

目 次

○はじめに	1
○資料館の活動（平成6年度）	
1. 入館者数	2
2. 年度別予算一覧	4
3. 資料収集	5
4. 調査研究等	7
5. 展示普及等	7
6. 施設の整備等	8
7. 歴史民俗資料館協議会	8
8. 購入図書・受贈交換図書	9
○資料館の活動（平成7年度）	
1. 入館者数	18
2. 年度別予算一覧	20
3. 資料収集	20
4. 調査研究等	22
5. 展示普及等	22
6. 施設の整備等	23
7. 歴史民俗資料館協議会	23
8. 購入図書・受贈交換図書	24
○資料紹介 明治期の厳島案内記	高橋修三 31

はじめに

前号をお届けしました平成8年3月から今日まで、日本社会はそれまで以上にあらゆる面で激浪にさらされ、今なお「日本丸よどこへ行く」の感を拂拭できない状態が続いております。就中、神戸の連続児童殺傷事件に代表される、相次ぐ少年による凶悪な犯罪に、すさまじい心の荒れを感じます。次代を担う子どもたちの健全な育成こそ、わたしたち大人が真剣に取り組む緊急の課題であり、この解決なくして日本の将来はないという危機感を覚えるこの頃です。

こうした続発する暗いニュースの中で、一昨年12月、厳島神社がユネスコの世界遺産に登録されるというビッグニュースが飛び込んで参りました。このことは、全人類共有の遺産として万国に認められたわけで、たいへん名誉なことではありますが、同時にこの遺産をいっさい傷つけることなく守り続け、後世に伝えるという重大な責務を課せられたことにもなります。わたしたち宮島につながる者一人一人が、その自覚をもって世界遺産の保存と伝承に意を深く用いているところです。

さて「宮島の歴史と民俗」No.14をお届けします。明治期の宮島について、活字にされたものが比較的少い中で「明治期の案内記」をご紹介します。このことにより当時の宮島の概況や変遷などが、ある程度明らかになるのではないかと考えております。

各位の御指導をよろしくお願いいたします。

平成10年3月

宮島歴史民俗資料館
館長 吉 本 操

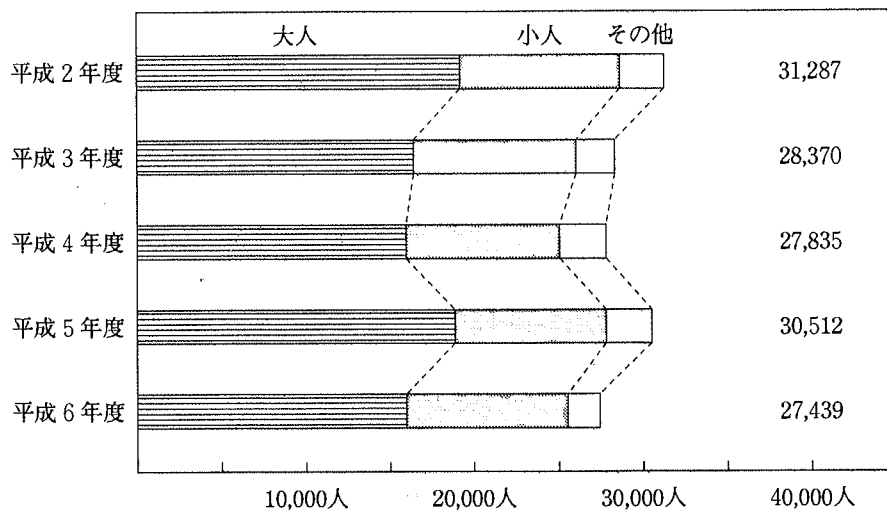
資料館の活動（平成6年度）

1. 入館者数（平成6年度）

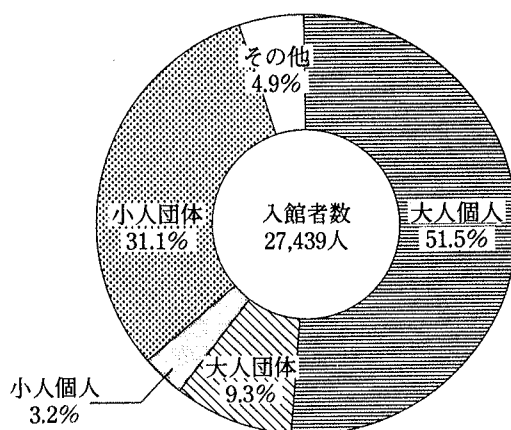
開館以来の累計 613,158

月	大人			計	小人		計	その他		計	合計
	個人	団体	老人		個人	団体		身障者	一般		
4	1,380	100	6	1,486	81	1,916	1,997	9	112	121	3,604
5	1,937	102	7	2,046	116	2,349	2,465	15	176	191	4,702
6	883	142	3	1,028	12	1,410	1,422	1	175	176	2,626
7	910	228	0	1,138	67	62	129	2	116	118	1,385
8	1,856	14	4	1,874	357	1	358	3	91	94	2,326
9	1,015	126	136	1,277	12	85	97	6	18	24	1,398
10	1,406	494	84	1,984	25	1,109	1,134	8	217	225	3,343
11	1,900	206	68	2,174	59	1,280	1,339	15	150	165	3,678
12	579	179	0	758	11	14	25	0	38	38	821
1	787	236	2	1,025	51	9	60	7	64	71	1,156
2	424	167	5	596	11	6	17	0	19	19	632
3	738	549	11	1,298	85	282	367	3	100	103	1,768
計	13,815	2,543	326	16,684	887	8,523	9,410	69	1,276	1,345	27,439

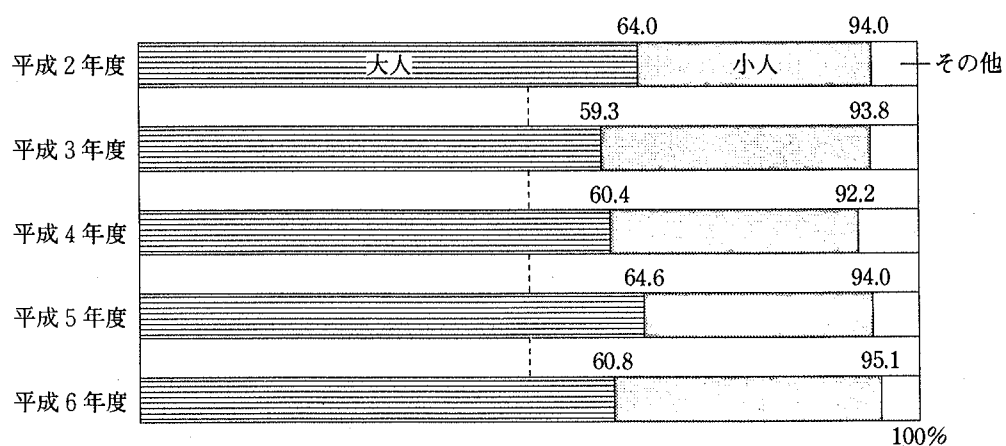
入館者数の推移（平成2年度から平成6年度まで）



入館者の構成（平成6年度）



入館者構成の推移（平成2年度から平成6年度まで）



2. 年度別予算一覧

年度 節	平成 2年度	平成 3年度	平成 4年度	平成 5年度	平成 6年度	備 考
	千	千	千	千	千	
報酬	1,743	1,743	1,752	1,704	1,782	資料館協議会委員、館長報酬
賃金	1,404	1,888	1,259	1,536	1,577	
報償費	10	10	10	10	10	展示資料借上謝礼など
旅費	290	221	400	258	173	
需用費	6,805	6,048	8,584	12,692	12,258	消耗品費、光熱水費、印刷製本費など
役務費	647	686	857	892	872	通信運搬費
委託料	16,122	7,816	3,483	7,564	8,189	事務補助、管理保守、庭園手入れ委託料など
使用料・賃借料	434	399	408	734	770	複写機使用料など
工事請負費	390,000	423,000	680	56,717		補修工事費など
備品購入費	2,455	3,007	2,714	6,519	1,800	図書・展示資料等購入費
負担金補助・交付金	432	432	427	74	69	学会協会負担金、補助金など
公課費		9		9		
計	420,342	445,259	20,574	88,707	27,500	

(平成2年度工事請負費は、平成3年度へ繰越)

3. 資料収集

(1)寄贈資料

資 料 名	寄贈者名	数量
宮島彫角盆 (雲雀)	星 出 篤 美	1
宮島彫壁掛け (猿鹿)	〃	1
宮島彫壁掛け (樹上小鳥)	〃	1
宮島彫角盆 (菊)	〃	1
宮島彫角盆 (小鳥)	〃	1
人物画譜	〃	1
彫刻下絵	〃	45
彫刻刀	〃	45
宮島彫硯箱 (社景)	〃	1
宮島彫硯箱 (鶴)	〃	1
宮島彫硯箱 (象)	〃	1
宮島彫菓子器 (鳥)	〃	1
宮島彫菓子器 (菊)	〃	1
宮島彫菓子器 (鳥)	〃	1
宮島彫菓子器 (牡丹)	〃	1
宮島彫菓子器 (鳥)	〃	1
宮島彫煙草入れ (猿)	〃	1
宮島彫煙草入れ (婦人)	〃	1
宮島彫煙草入れ (鳥)	〃	1
宮島彫煙草入れ (寒山拾得)	〃	1
宮島彫煙草入れ (五重塔)	〃	1
宮島彫煙草入れ (犬)	〃	1
宮島彫丸盆 (葡萄)	〃	1
宮島彫角盆 (牡丹)	〃	1
宮島彫角盆 (蝶)	〃	1
宮島彫茶入れ (椿)	〃	1
宮島彫茶入れ (菊)	〃	1
宮島彫茶入れ (紅葉)	〃	1

資 料 名	寄贈者名	数量
宮島彫小物入れ (菊)	〃	1
宮島彫菓子器 (梟)	〃	1
宮島彫茶入れ (鳥)	〃	1
小物入れ	〃	2
角盆	〃	2
「貝」	〃	1
「茄子」	〃	1
「キュウリ」	〃	1
「桃」	〃	1
「ほおずき」	〃	1
茶釜	加 茂 一 郎	1
鼓	〃	1
風炉	〃	1
雛祭用掛け軸	瀬 田 律 義	1
社景入り盆	〃	1
天秤棒	〃	1
絵はがき	〃	10
浄瑠璃台本	岩 村 益 文	10
巖島を中心とした文学	〃	1
旧陸軍軍服	奥 原 保 男	1
くさらし	吉 村 嘉 宏	3
箱枕	〃	1
ろうけつ染	〃	9
かめ	山 中 慶 亮	1
神棚	岩 村 龍 男	1
箱枕	〃	5
看板	〃	2
帳簿	〃	4

(2)寄託資料

資 料 名	寄託者名	数量
丸盆	吉 村 嘉 宏	1

(3)購入資料

資 料 名	数量	備 考
厳島写真帖	1	大正8年、春錦堂刊
厳島神社絵葉書	1	大正7年、第3輯、5枚
厳島絵はがき	1	昭和15年、19枚
厳島神社絵葉書	1	8枚
厳島名所絵葉書	1	杓子型、8枚
厳島神社絵葉書	1	8枚
日本名勝廿四景 宮じま	1	江戸後期、木版色刷
西国名所之内 安芸宮島	1	江戸後期、木版色刷
芸州広島ヨリ道中記	1	江戸後期、木版墨刷
安芸厳島御神社之図	1	文化14年、木版墨刷
安芸厳島八景図	1	江戸後期、木版墨刷
安芸厳島御神社図	1	万延元年、木版墨刷
安芸厳島御社之図	1	文政11年、木版墨刷
厳島実地真景之図	1	明治30年、色刷
厳島案内地図	1	昭和3年
宮島絵はがき帖	1	80枚
聖地史蹟名勝23 安芸宮島	1	徳力富吉郎筆
日本三景 厳島之図	1	歌川小国政筆、明治25年、木版色刷
広島県案内	1	広島県協賛会、明治43年
厳島案内記	1	明治45年、児玉周平編
厳島写真帖	1	明治41年、瀬田格一編
日本三景 厳島風景	1	大正5年、絵はがき
厳島風光	1	絵はがき
厳島神社宝物絵葉書	1	
日本三景 厳島絵はがき	1	
カメラの宮島	1	絵はがき
安芸宮島	1	絵はがき
安芸厳島	1	絵はがき
安芸厳島	1	絵はがき
安芸厳島名所	1	絵はがき
修正 厳島宮路之枝折	1	明治17年、村田良穂編
奠都祭博覧会遊覧之葉	1	
厳島社頭之図	1	安政5年
芸藩伊都岐島神社	1	江戸後期
大日本安芸国厳島神社之三景	1	明治13年
最新広島市街図及宮島案内地図	1	昭和3年
代表的日本	1	明治43年
ニコニコ風景図鑑	1	昭和6年
平家物語図会	1	嘉永2年、12冊
日本写真帖	1	明治45年、田山宗堯編
瀬戸内海航路案内	1	大正2年、大阪商船刊
厳島名所写真絶勝	1	昭和38年、沢田綿玉堂刊
大日本三景安芸国厳島	1	明治23年、多色刷
改良教育図絵	1	明治22年、多色刷

4. 調査研究等

平成 6 年 4 月 21 日	資料調査（東京都、東京国立文化財研究所）
6 月 3 日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会理事会（三次市、県立歴史民俗資料館）
7 月 12 日～13 日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会第 27 回研究会（佐伯郡吉和村）
7 月 28 日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
8 月 4 日	同上
8 月 19 日	同上
8 月 24 日	資料調査（広島市、遠藤尚也氏）
9 月 7 日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
9 月 9 日	同上
9 月 21 日	同上
10 月 5 日	同上
10 月 14 日	同上
10 月 19 日	同上
10 月 26 日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会理事会（広島市、広島市郷土資料館）
10 月 27 日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
11 月 30 日～12 月 1 日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会第 28 回研究会（安芸郡熊野町）
平成 7 年 2 月 9 日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会理事会（福山市、県立歴史博物館） （収蔵庫新設に伴い、平成 6 年 2 月より資料の移送を開始、平成 6 年 12 月にほぼその作業を終了する。）

5. 展示普及等

平成 6 年 4 月 18 日	「誓真杓子」・「飯びつ」の撮影（サライ編集部）
5 月 20 日	「諸国芝居繁盛数望」・「芝居口上絵」の撮影（NHK）
6 月 16 日	宮島町中央公民館郷土学習講座「宮島能楽史点描」
6 月 28 日	「誓真像」・「誓真自作杓子」の撮影（テレビ新広島）
7 月 8 日	「滑稽道中宮島みやげ」・「芸州厳島図会」・「安芸厳島神社之図」・ 「富札」の貸出（広島市郷土資料館）
7 月 22 日	「芸州厳島図会」・「芝居番付」・「芝居口上絵」の撮影（京都映画）

8月25日	「誓真像」・「誓真自作杓子」の撮影（テレビ新広島）
9月1日	見学案内（京都府田辺町議会議員）
9月6日	「誓真像」・「誓真自作杓子」・展示館撮影（RCC）
9月25日	能楽関係資料調査（広島女学院大学生）
10月6日	「管絃祭御座船」の貸出（広島青年会議所）
10月12日	展示館等撮影（昭文社）
10月28日	能楽関係資料調査（東京都立大学、小林氏）
11月10日	「厳島三保松原図」・「弁財天と清盛」・「安芸厳島御神社之図」（写真）の貸出（交通公社）
平成7年1月11日	歌舞伎関係資料調査（読売新聞）
1月18日	「絵はがき」・「厳島案内地図」（写真）の貸出（広島県立歴史博物館）
2月21日	「福助・恵比須像」の撮影（中ノ子勝美氏）
2月23日	「厳島三保松原図」・「狂言装束」・「管絃祭御座船」・「平清盛像」・「宮島彫」・「弁当箱」・「つまようじ」の撮影（テレビ新広島）
3月1日	「厳島合戦図」の撮影（中国新聞）
3月2日	「宮島ホテル」関係資料調査（中国新聞）
3月6日	平家関係資料調査（NHK）
・『宮島の歴史と民俗』No.12の刊行（B5版、177p）	

6. 施設の整備等

平成6年6月～	収蔵庫内の空気汚染・温湿度等に関する環境調査（東京国立文化財研究所に依頼）を行う。
平成7年3月17日～19日	収蔵庫に搬入した資料と合わせて、B1一般収蔵庫、1F書庫、2F一般収蔵庫・特別収蔵庫（容積1,418m ³ ）の燻蒸を行う。

7. 歴史民俗資料館協議会

平成6年度資料館協議会委員（◎は委員長、○は副委員長）

後藤陽一	広島大学名誉教授	瀬田律義
定宗一宏	広島文化女子短大教授	小西延穂
野坂元良	厳島神社宮司	◎平野 勝

◎岩村益文

木村 力

宮郷安輝

宮郷 武

平成6年度資料館協議会

開催せず、平成7年3月、書面をもって以下のような経過等の報告を行う。

1. 平成5年度協議会とその後の経過
2. 平成7年度予算編成
3. 平成7年度予算（案）の決定

8. 購入図書・受贈交換図書

購入図書

編著者名	書名	出版
山折哲雄他	日本民俗論集 9～10	吉川弘文館
朝尾直弘他	岩波講座 日本通史 第3巻～第4巻、 第9巻～第10巻、第12巻～第14巻、 第17巻～第19巻、別巻2	岩波書店
歴史学研究会	世界史年表	岩波書店
市古貞次他	国書人名辞典 第1巻	岩波書店
古川彰・大西行雄	環境イメージ論 日本史大事典 7 国宝 1～20、解説書	弘文堂 平凡社 学研
川北稔他	歴史学事典 第1巻～第2巻	弘文堂
石井良助・服藤弘司	幕末御触書集成 第5巻 江戸博物学集成	岩波書店 平凡社
中国新聞社	ひろしま空紀行	中国新聞社
國學院大學日本文化研究所	神道事典	弘文堂
東城町	東城町史 古代中世近世資料編	東城町
戸河内町	戸河内町史 資料編（下）	戸河内町
中野栄夫	コンピュータ歴史学のすすめ	名著出版
文化庁	建物の見方・しらべ方	ぎょうせい
文化庁	国宝・重要文化財建造物目録	第一法規

文化庁	文化財保護提要 法規編、判例・資料編	第一法規
松下正司	よみがえる中世 8	平凡社
広島県神社誌編纂委員会	広島県神社誌	広島県神社庁
東京大学史料編纂所	小早川家文書 1～2	東京大学出版会
網野善彦他	大系日本歴史と芸能 第1巻～第14巻	平凡社

逐次刊行物

歴史学研究	647～658
日本歴史	551～562
地方史研究	221～224
月刊文化財	367～378
広島県文化財ニュース	140～143
博物館研究	第29巻第4号～第30巻第3号
文化財の虫菌害	第27号～第28号

受贈図書

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより No.29～No.30

〔秋田県立博物館〕

秋田県立博物館研究報告 第19号

秋田県立博物館館報 平成5年度

博物館ニュース No.96～No.98

〔赤穂市立歴史博物館〕

坂越廻船と奥藤家

早水家文書(1)

知られざる夭折の画家 平井正年

〔石川県立歴史博物館〕

石川県立歴史博物館年報 第4号

石川れきはく No.31～No.34

〔出雲玉作資料館〕

資料館ニュース 第20号～第21号

〔茨城県立歴史館〕

茨城県立歴史館報 21

茨城県立歴史館だより No.62～No.63

〔岩国徴古館〕

現代中国の絵画と書

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより No.56～No.57

〔宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1991

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1992

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1993

豊後国香々地荘 1

USA SITE MUSEUM NEWS No.29～No.34

〔江戸東京博物館〕

江戸東京博物館要覧 1994

江戸東京博物館ニュース 5～8

江戸東京たてもの園だより 3～4

〔大阪市立博物館〕

大阪市立博物館報 No.33

〔大田区立郷土博物館〕

大田区立郷土博物館紀要 第4号

大田区立郷土博物館紀要 第5号

工場まちの探検ガイド

てぬぐい展 図録

重要有形民俗文化財 大森及び周辺地域の海
苔生産用具

郷土博物館だより 第29号～第31号

博物館ノート No.73～No.84

〔大津市歴史博物館〕

大津市歴史博物館研究紀要 2

大津市歴史博物館年報 平成5年度

博物館だより 第18号～第21号

〔お茶の水女子大学学芸員課程〕

お茶の水女子大学博物館実習報告 10

〔岡山県立博物館〕

岡山県立博物館研究報告 第15号

平安から鎌倉へ

岡山県立博物館だより 42号～43号

〔尾道市教育委員会〕

尾道遺跡 1992

〔家具の博物館〕

博物館だより No.26～No.27

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

要覧 1994

歴史と民俗 11

民具マンスリー 第27巻第1号～第27巻第12号

〔菅茶山記念館〕

菅茶山の師と弟子たち

〔神辺町教育委員会〕

茶山詩話 第3集

〔北九州市立歴史博物館〕

研究紀要 2

北九州市立歴史博物館 収藏品図録 1

北九州市立歴史博物館年報 16

北九州市立歴史博物館年報 17

北九州市立歴史博物館年報 18

彩

北九州の金工品

広寿山の文化財展

館蔵名品展

下村薫村の世界

〔岐阜市歴史博物館〕

岐阜市歴史博物館年報 No.8

博物館だより No.27～No.29

〔九州陶磁文化館〕

九州陶磁文化館年報 No.12

九州陶磁文化館年報 No.13

セラミック九州 No.28～No.30

〔京都国立博物館〕

京都国立博物館概要 平成6年度

平成4年度京都国立博物館年報

〔京都市考古資料館〕

京都市考古資料館年報 平成元・2年度

京都市考古資料館年報 平成3・4年度

〔京都市歴史資料館〕

京都市歴史資料館紀要 第11号

京都市歴史資料館年報 No.12

京都市の文化財 第6回

1200年を探った人々

京都市史編さん通信 No.254～No.259

〔京都府立丹後郷土資料館〕

与謝蕪村と丹後

丹後郷土資料館だより 第28号

〔京都府立山城郷土資料館〕

山城郷土資料館報 第11号

長池宿と玉水宿

発掘成果速報 平成5年度

山背から山城へ

山城郷土資料館だより 第20号～第22号

〔久賀町〕

写真でみる久賀町

〔群馬県立歴史博物館〕

博物館だより No.55～No.57

〔耕三寺博物館〕

耕三寺博物館収蔵品図録 茶道具

〔高知県立歴史民俗資料館〕

高知県立歴史民俗資料館研究紀要 第3号

高知県立歴史民俗資料館年報 平成5年度

四国の戦国群像

高知県立歴史民俗資料館だより 第12号～第13号

〔国立能楽堂〕

厳島神社の奉納芸能

〔国立民族学博物館〕

国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告集 15

〔国立歴史民俗博物館〕

漆文化

近世の武家社会

描かれた祭礼

近世きもの万華鏡

〔埼玉県立さきたま資料館〕

調査研究報告 第7号

資料館報 No.25

〔埼玉県立博物館〕

埼玉県立博物館紀要 19

埼玉県立博物館有資料目録 X

埼玉県指定史跡 神庭洞窟

埼玉県立博物館だより 84号～87号

〔埼玉県立歴史資料館〕

研究紀要 第16号

埼玉の武者絵馬

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館ニュース 第139号～第145号

〔庄原市教育委員会〕

則清1・2号遺跡

堂迫尻遺跡 守屋谷遺跡

〔世田谷区立郷土資料館〕

世田谷区史料叢書 第9巻

柳田国男と世田谷

ちょっと昔のせたがや

館蔵 近世の絵画

資料館だより No.20～No.22

〔園田学園女子大学近松研究所〕

近松研究所紀要 第5号

〔大聖院〕

霊峰 第359号～第369号

〔竹中大工道具館〕

竹中大工道具館研究紀要 第6号

竹中大工道具館収蔵品目録

〔丹青研究所〕

ミュージアム・データ No.25～No.27

〔千葉県立安房博物館〕

維新前夜の房総

千葉県立安房博物館 20年のあゆみ

安房博物館報 第60号

〔千葉県立総南博物館〕

千葉県立総南博物館年報 1

民衆と信仰

総南博物館報 第54号～第56号

〔通信総合博物館〕

袋井郵便御用取扱所史料（その2）

全国実施時の郵便御用取扱所

資料図録 No.45～No.48

通信総合博物館年報 平成5年度のあゆみ

〔天理参考館〕

天理参考館報 第4号

天理参考館報 第5号

天理参考館報 第6号

天理参考館報 第7号

絵馬集（Ⅰ）

絵馬集（Ⅱ）

アイヌの晴れ着（上）

修羅と伝統染織布

大和もめん

古代ベルシャの土器

イスラム陶器

漢代の黄河文明

東インドネシア王族秘蔵の染織

失われゆく文化

幕末明治乗物づくし

漢代の青銅器

アンデスの染織

吹ガラス前史

祈りと願いの人形

インドの民具

明治鉄道ものがたり

オルドス青銅器

刺繍

初期ベルシャ陶器

古墳時代の石製品

変貌の道具 仮面

天理参考館英文案内

天理参考館選

〔東城町教育委員会〕

川東大仙山古墳群

〔東北歴史資料館〕

東北歴史資料館年報 平成5年度

〔鳥取県立博物館〕

鳥取県立博物館研究報告 第31号

郷土と博物館 77号～78号

〔豊田市郷土資料館〕

豊田史料叢書 挙母藩史、挙母藩譜

豊田史料叢書 内藤家文書

豊田市文化財叢書 24

夢 富くじ 宝くじ

豊田市郷土資料館だより No.8～No.11

〔名古屋市博物館〕

名古屋市博物館だより 97～102

〔ナック映像センター〕

ふるさとの匠と技 第1部

ふるさとの匠と技 第2部

〔奈良県立民俗博物館〕

奈良県立民俗博物館・大和民俗公園 平成元年～平成5年度

民俗博物館だより 65号～66号

〔日本浮世絵博物館〕

広重 図録

〔日本のあかり博物館〕

あかり その変遷

博物館ニュース 第7号

解説シリーズ No.2

博物館ノート No.35～No.38

〔日本民家集落博物館〕

民家集落ふるさとだより No.13

〔日本民俗資料館〕

あかり展

〔沼津市歴史民俗資料館〕

沼津市博物館紀要 18

掘り出された沼津の原始・古代

旅と宿場

資料館だより 114号～119号

〔根室市博物館開設準備室〕

根室市博物館開設準備室紀要 第8号

〔東広島市教育委員会〕

西条第一地区区画整理事業地内埋蔵文化財発

掘調査報告書 Ⅱ

原1号遺跡発掘調査報告書

阿岐のまほろば 1～4

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館研究報告 No.17

平塚市博物館年報 No.17

相模川事典

中田コレクション

〔広島県教育委員会〕

いぶき No.8

〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕

草戸千軒町遺跡発掘調査報告 Ⅱ

〔広島県民生活部〕

土地分類基本調査 八重

〔広島県民文化センター〕

けんみん文化 平成6年4月号～平成7年3月号

〔広島県立生涯学習センター〕

まなびねっとひろしま No.58～No.60

〔広島県立図書館〕

瀬戸内海地方の鉄に関する所蔵図書目録

瀬戸内海関係資料所蔵図書目録 水産業・塩業の部

瀬戸内海を知るために

広島県内公共図書館郷土資料目録 第39号

〔広島県立美術館〕

広島県立美術館研究紀要 第1号

広島県立美術館年報 平成3～5年度

探美 No.64

〔財〕広島県埋蔵文化財調査センター〕

ひろしまの遺跡 第56号～第60号

〔広島県立文書館〕

広島県立文書館紀要 第3号

広島県立文書館事業年報 第5号

江戸の旅人たち

広島県立文書館 第4号

〔広島県立歴史博物館〕

福山藩の教育と文化

日本琴始め

広島県立歴史博物館 新収蔵資料展

暮らしの考古学展

日本の中のアジア文化

広島県立歴史博物館ニュース 第19号～第21号

〔広島県立歴史民俗資料館〕

ひろしまの縄文土器

年報 平成5年度

古墳と大陸文化

歴風 第7号～第10号

〔広島市郷土資料館〕

広島市における木造船の建造と民俗

〔広島市現代美術館〕

THE ARCH 第9号～第10号

〔広島市公文書館〕

広島市公文書館紀要 第17号

図書目録 VII

受贈資料目録 I

〔広島城〕

広島ゆかりの武具甲冑展

広島城の堀

えがかれた広島藩内の滝

〔広島民俗学会〕

広島民俗 第41号～第42号

〔福井県立博物館〕

ふくいミュージアム No.25～No.26

〔福井県立若狭歴史民俗資料館〕

福井県立若狭歴史民俗資料館年報 平成元・
2年度

福井県立若狭歴史民俗資料館年報 平成3・
4年度

〔福岡市博物館〕

福岡市博物館紀要 第4号

福岡市博物館年報 第2号

平成3年度収集収蔵品目録 9

FACTA No.12～No.15

〔福島県歴史資料館〕

福島県歴史資料館研究紀要 第16号

歴史資料館収蔵資料目録 第23集

歴史資料館収蔵資料目録 第24集

〔福山市立鞆の浦歴史民俗資料館〕

資料だより 第13号～第14号

〔福山市立福山城博物館〕

桃山・江戸の美

〔ふくやま美術館〕

ふくやま美術館年報 5年のあゆみ

日本と東洋の美

〔府中町歴史民俗資料館〕

府中町歴史民俗資料館年報 平成4年度

〔筆の里工房〕

北京故宫博物院文房四宝展

〔増岡組〕

厳島神社復旧工事録

〔松本市立博物館〕

あなたと博物館 No.78～No.81

〔松山市立子規記念博物館〕

松山市立子規記念博物館年報 12

正岡子規の世界

子規博だより Vol.13-4～Vol.14-3

〔御木本真珠博物館〕

御木本幸吉記念館

〔宮島町〕

宮島町史 資料編・地誌紀行 I

宮島町史 資料編・石造物

〔宮島町教育委員会〕

厳島神社本殿不明門ほか26棟保存修理工事報
告書

広島県埋蔵文化財包蔵地図

赤堀跡発掘調査概報

徳政遺跡発掘調査報告書

広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報
告書

西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告 (I)

薄古第一号・第二号古墳発掘調査報告

西ヶ迫古墳群

天高第一号古墳

古江西第一号貝塚発掘調査報告

溝下遺跡発掘調査報告

境ヶ谷遺跡群

榎ヶ峠第2号古墳発掘調査報告

滑谷遺跡

奥田大池遺跡都市計画公園事業に伴う発掘調査報告書

鳥ヶ尾第1号古墳発掘調査報告

緑岩古墳

亀山遺跡

備後国府跡

広島県立埋蔵文化財センター年報 1

三良坂町の原始・古代と岡田山第3号古墳発掘調査の記録

(財)広島県埋蔵文化財調査センター年報 II～VII、IX

(財)広島県埋蔵文化財調査センター研究輯録 I～II

賀茂学園都市開発整備事業地内遺跡群 II～VII

高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書

佐田山墳墓群

戸の丸山製鉄遺跡発掘調査報告書

皇渡古墳発掘調査報告書

敷名番所跡伝承地発掘調査報告書

銭神第2・4・5古墳発掘調査報告書

植松遺跡群

大判・上定・殿山

名広遺跡

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 IV～IX

月見城遺跡

小奴可城跡発掘調査報告書

榎ヶ坪3号遺跡

宮本古墳

大和遺跡

宮風呂遺跡発掘調査報告書

和田原遺跡

糸井馬場第2号古墳

大宮遺跡発掘調査報告書

大成遺跡

奥田・是石・鷺田・藤田

冠遺跡群・D地点の調査

長後林古墳群発掘調査報告書

上大縄古墳・下の割遺跡

郷古墓発掘調査報告書

井手山古墳

壬生西谷遺跡

東広島ニュータウン遺跡群 I～III

本郷遺跡

福正寺北遺跡群

三段畑遺跡

浅谷山東A地点遺跡

明官地廃寺跡

備後国府跡

山居遺跡

手島山墳墓群

中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 I

石井ヶ原遺跡群

広島県埋蔵文化財保護行政資料—平成元年度—

来源遺跡発掘調査報告

高山1・2号遺跡

河原田2号遺跡

浅谷山東B地点遺跡

内長見遺跡

金平山遺跡 貞付谷遺跡

万徳院跡—第2次発掘調査概要—

岡山A地点遺跡

川東大仙大10・11号古墳

明官地東遺跡

山崎遺跡

竜王堂遺跡

日向遺跡

宮風呂遺跡

入野中山遺跡

大蔵遺跡

金壳・陣開

広島県中世城館遺跡総合調査報告書

〔毛利博物館〕

由緒と伝来

〔山口県立山口博物館〕

山口県立山口博物館研究報告 第20号

館報 17

山口県の自然 第54号

〔湯来町〕

湯来町誌 資料編Ⅰ

湯来町誌 資料編Ⅱ

〔横浜開港資料館〕

横浜開港資料館紀要 第12号

横浜中華街

〔吉田町歴史民俗資料館〕

近世吉田の絵画

〔読谷村立歴史民俗資料館〕

読谷村立歴史民俗資料館紀要 第18号

読谷村立歴史民俗資料館年報 第19号

棒交流会（第4回）

資料館だより No.28

〔早稲田大学演劇博物館〕

演劇博物館 71～72

資料館の活動（平成7年度）

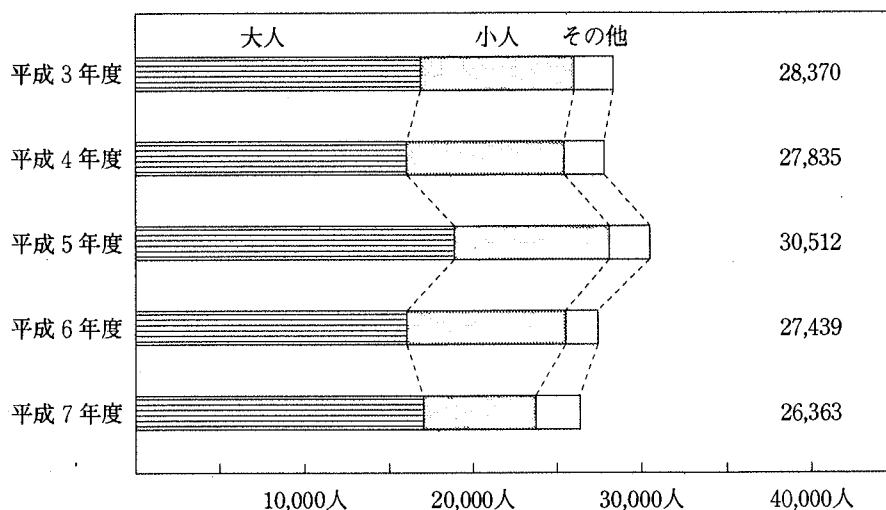
1. 入館者数（平成7年度）

開館以来の累計 639,521

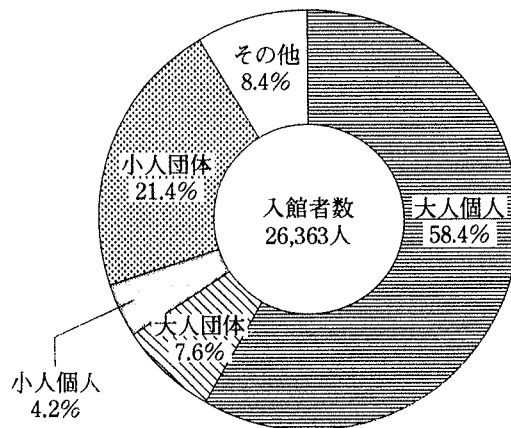
月	大 人			計	小 人		計	その他		計	合 計
	個 人	団 体	老 人		個 人	団 体		身障者	一 般		
4	968	88	11	1,067	71	311	382	1	82	83	1,532
5	1,674	65	4	1,743	88	1,418	1,506	19	75	94	3,343
6	495	179	5	679	12	864	876	4	561	565	2,120
7	719	27	24	770	66	65	131	5	643	648	1,549
8	2,164	19	3	2,186	496	13	509	18	103	121	2,816
9	1,253	470	7	1,730	34	124	158	14	59	73	1,961
10	1,605	531	64	2,200	17	1,739	1,756	11	169	180	4,136
11	1,906	270	19	2,195	44	998	1,042	17	127	144	3,381
12	648	6	5	659	10	6	16	8	52	60	735
1	1,152	142	1	1,295	83	6	89	16	47	63	1,447
2	981	34	6	1,021	18	0	18	2	87	89	1,128
3	1,669	168	9	1,846	164	111	275	4	90	94	2,215
計	15,234	1,999	158	17,391	1,103	5,655	6,758	119	967	2,214	26,363

※平成7年6月～7月の工事期間中（一部開館）は無料とする。

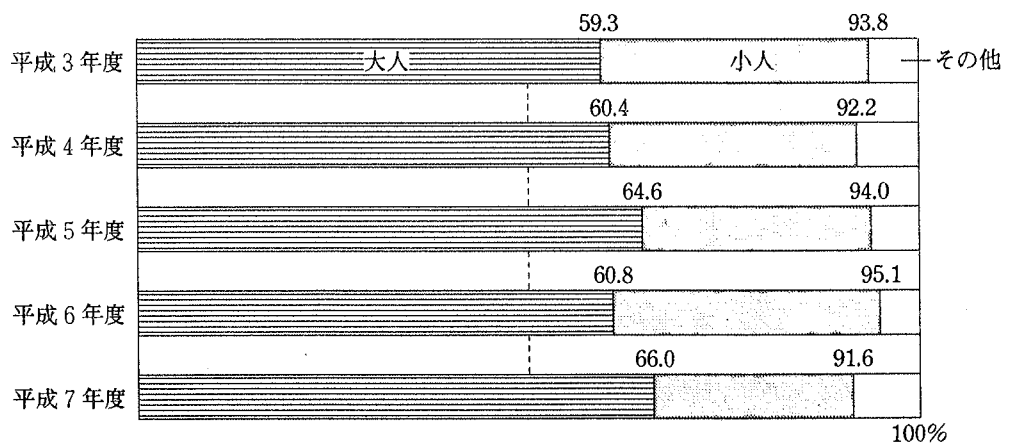
入館者数の推移（平成3年度から平成7年度まで）



入館者の構成（平成7年度）



入館者構成の推移（平成3年度から平成7年度まで）



2. 年度別予算一覧

節	年度	平成 3年度	平成 4年度	平成 5年度	平成 6年度	平成 7年度	備 考
		千	千	千	千	千	
報酬	金	1,743	1,752	1,704	1,782	1,719	資料館協議会委員、館長報酬
賃	金	1,888	1,259	1,536	1,577	1,415	
報償費		10	10	10	10	10	展示資料借上謝礼など
旅費		221	400	258	173	170	
需用費		6,048	8,584	12,692	12,258	12,545	消耗品費、光熱水費、印刷製本費など
役務費		686	857	892	872	904	通信運搬費
委託料		7,816	3,483	7,564	8,189	7,539	事務補助、管理保守、庭園手入れ委託料など
使用料・賃借料		399	408	734	770	665	複写機使用料など
工事請負費		423,000	680	56,717		18,492	補修工事費など
備品購入費		3,007	2,714	6,519	1,800	1,447	図書・展示資料等購入費
負担金補助・交付金		432	427	74	69	64	学会協会負担金、補助金など
公課費		9		9		9	
計		445,259	20,574	88,707	27,500	44,979	

3. 資料収集

(1)寄贈資料

資 料 名	寄贈者名	数量
くさらし	岩 村 益 文	6
弁当箱	瀬 田 律 義	1
乾板	〃	21
古写真	〃	14
絵はがき	〃	200
宝珠用版木	〃	1
千畳閣修繕落成祝祭協賛会規則	〃	1

資 料 名	寄贈者名	数量
千畳閣修繕落成大祝祭記念品	瀬 田 律 義	1
千畳閣修繕翼賛に関する謝状	〃	1
教育勅語（少年倶楽部付録）	〃	1
ろうけつ染め	吉 村 嘉 穂	1
格子	稲 田 秀 粹	
大戸	吉 田 宏 喜	1

(2)購入資料

資 料 名	数量	備 考
全国汽車発着時刻及乗車賃金表	1	明治33年、官報附録
大日本鉄道線并各国旅行便覧	1	明治38年、銅版、岡田重正刊
大日本鉄道旅行便覧	1	明治42年、菊花堂著刊
日本名所旧跡数望	1	江戸後期、木版墨刷
平和記念東京博覧会全景	1	大正11年、彩色砂目石版
平和記念東京博覧会会場夜之美観	1	大正11年、彩色砂目石版
厳島社頭之図	1	江戸後期、木版色刷
源平盛衰記	1	落合（一恵齋）芳幾画、木版色刷
安芸厳島御神社図	1	元治2年、木版色刷
厳島社頭之図	1	明治初期、木版色刷
参詣みやげ 厳嶋名所図絵	1	明治38年、多色刷
実地踏測 広島市街全図	1	大正3年
宮島古写真 (Stereoscopic Photograph)	1	明治後期～大正初期
大日本鉄道独名所案内	1	明治40年、銅版色刷
大日本三景之図	1	銅版刷
日本周遊双六	1	明治29年
安芸厳島御神社図	1	明治初年、木版色刷
芸州厳島御島廻図記	1	文政3年、木版墨刷
頼家書状巻	1	春水、春風、杏坪、山陽他
大広島市街地図	1	昭和8年、山本弥助著
安芸の宮島案内	1	昭和10年、宮島観光協会編
宮島名所	1	絵はがき、49枚
風光明媚なる厳島の壮観	1	絵はがき、6枚
宮島絵はがき	1	9枚

4. 調査研究等

平成7年5月12日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
5月17日	同上
5月18日	同上
5月24日	同上
5月26日	同上
6月2日	同上
6月7日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会理事会（三次市、県立歴史民俗資料館）
6月14日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
6月7日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会第29回研究会（庄原市田園文化センター）
8月3日～4日	資料調査（東京都、東京国立文化財研究所）
9月14日	『ひろしまのミュージアム』編集会議（三次市、県立歴史民俗資料館）
11月15日～16日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会第30回研究会（宮島町）
平成8年3月24日	博物館等視察（大阪市）

5. 展示普及等

平成7年4月5日	「宮島ホテル」関係資料撮影（テレビ新広島）
4月17日	同上
4月21日	能楽関係資料調査（広島女学院大学生）
6月1日	「厳島絵図」（写真）の貸出（宮島観光協会）
6月16日	「誓真像」・「誓真自作杓子」の撮影（NHK）
6月28日	「芝居番付」・「芝居口上絵」・「芸州厳島図会」・「厳島絵図」の撮影（テレビ新広島）
7月1日	「厳島三保松原図」・「厳島勝景図」の撮影（RCC）
8月1日	見学案内（THE GURDIAN 紙）
8月11日	「玉取祭福神像」・「宝珠」の撮影（リアルタイム社）
9月18日	「厳島三保松原図」（写真）の貸出（静岡県立美術館）
9月20日	「宮島ホテル」関係資料の撮影（読売新聞）

- 9月22日 「厳島縁起」関係資料調査（山陽女子短大、浅野氏）
- 12月8日 「厳島道芝記」・「芸州厳島図会」・「厳島八景」・「厳島縁起」・
「芝居絵」の撮影、「平清盛像」・「御鳥喰奉る図」・「弁財天と清盛」・
「厳島七浦図」（写真）の貸出（中国新聞）
- 平成8年1月8日 「芝居絵」・「富札」（写真）の貸出（RCC）
- 2月15日 「厳島合戦図」（写真）の貸出（学習研究社）
- 3月14日 「厳島図」（写真）の貸出（宮島競艇施行組合）
- ・『宮島の歴史と民俗』No.13の刊行（B5版、126p）

6. 施設の整備等

- 平成7年6月～7月 歴史民俗資料館D館空調機改修工事
歴史民俗資料館C館床、D館外壁、代表民家、渡り廊下等補修工事
歴史民俗資料館代表民家白蟻駆除
- 7月18日～29日 燻蒸庫による燻蒸を行う。
- 平成8年1月10日～11日 同上
- 3月5日～6日 同上

7. 歴史民俗資料館協議会

平成7年度資料館協議会委員（◎は委員長、○は副委員長）

- | | |
|-----------------|-------|
| 後藤陽一 広島大学名誉教授 | 瀬田律義 |
| 定宗一宏 広島文化女子短大教授 | 小西延穂 |
| 野坂元良 厳島神社宮司 | ○平野 勝 |
| ◎岩村益文 | 宮郷安輝 |
| 木村 力 | 宮郷 武 |

平成7年度資料館協議会

平成7年12月7日

協議内容

1. 「資料館改修計画」（平成3年度協議会にて協議）に対する措置について
2. 平成7年度資料館の維持管理状況について

3. 平成8年度新規主要事業計画について

8. 購入図書・受贈交換図書

購入図書

編著者名	書名	出版
朝尾直弘他	岩波講座 日本通史 第6巻、第15巻、 第19巻～第21巻、別巻1、別巻3	岩波書店
豊町教育委員会	豊町史 資料編	豊町教育委員会
東城町史編纂委員会	東城町史 自然環境考古民俗資料編	東城町
呉市史編纂委員会	呉市史 第5巻～第8巻	呉市役所
呉市入船山記念館	広島藩朝鮮通信使来聘記	呉市役所
石井良助・服藤弘司	幕末御触書集成 第6巻	岩波書店
市古貞次郎他	国書人名辞典 第2巻	岩波書店
頼 祺一	瀬戸内海地域史研究 第5輯	文献出版
表 章	喜多流の成立と展開	平凡社
黒田日出男	歴史学事典 第3巻	弘文堂
増川宏一	賭博の日本史	平凡社
藤井尚夫	中世の城と合戦	朝日新聞社
オルガ・ストルスコバ	レツルの黙示録	日本放送出版協会
ジョン・アーリ	観光のまなざし	法政大学出版局
青木暢之・畑矢健治	ふるさとの戦争	農山漁村文化協会
鈴木敬三	有職故実大辞典	吉川弘文館
久保田淳他	岩波講座 日本文学史 第1巻、第4巻、 第5巻、第7巻、第12巻	岩波書店
藤井 昭	芸備地方のまつり	第一法規
TIMOSHY AMBROSE CRISPIN PAINE	博物館の基本	日本博物館協会

逐次刊行物

歴史学研究	649～660
日本歴史	563～574
地方史研究	225～228

月刊文化財	379～390
広島県文化財ニュース	144～147
博物館研究	第30巻第4号～第31巻第3号
文化財の虫菌害	第29号～第30号

受贈図書

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより No.31～No.32

〔秋田県立博物館〕

秋田県立博物館研究報告 第20号

秋田県立博物館報 平成6年度

博物館ニュース No.99～No.103

〔赤穂市立歴史博物館〕

山崎昭二郎の世界

第2回収蔵資料展

〔足立美術館〕

横山大観展

〔石川県立歴史博物館〕

石川県立歴史博物館紀要 7

石川れきはく No.35～No.38

〔出雲玉作資料館〕

資料館ニュース 第23号

〔伊万里市歴史民俗資料館〕

信仰と旅

歴史民俗資料館だより 第6号

〔岩国徴古館〕

岩邑年代記(6)

岩国徴古館資料目録

絵図で見る岩国

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより No.58～No.59

〔宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1994

豊後国都甲荘の調査(本編)

豊後国香々地荘 2

USA SITE MUSEUM NEWS No.35～No.37

〔宇治市歴史資料館〕

宇治市歴史資料館年報 平成5年度

宇治市歴史資料館年報 平成6年度

〔江戸東京博物館〕

江戸東京博物館要覧 1995

江戸東京博物館ニュース 9～12

江戸東京たてもの園だより 5

〔愛媛県歴史文化博物館〕

愛媛県歴史文化博物館 常設展示図録

伊予の水軍

愛媛県歴史文化博物館だより 創刊号～第4号

〔大阪市立博物館〕

大阪市立博物館報 No.34

〔大田区立郷土博物館〕

明治時代の水産絵図

火炎土器

考古学トイレ考

郷土博物館だより 第32号～第33号

〔大津市歴史博物館〕

大津市歴史博物館年報 平成6年度

大津歴博だより 第22号～第24号

〔お茶の水女子大学学芸員課程〕

お茶の水女子大学博物館実習報告 11

〔岡山県立博物館〕

岡山県立博物館だより 第44号～第45号

〔尾道市教育委員会〕

尾道遺跡 1993

〔家具の博物館〕

博物館だより No.28～No.29

〔神奈川大学大学院歴史民俗資料研究科〕

歴史民俗資料学研究 創刊号

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

要覧 1995

漁民の活動とその習俗 II

歴史と民俗 12

民具マンスリー 第28巻第1号～第28巻第12号

〔菅茶山記念館〕

北條霞亭の生涯と恒心社友

〔神辺町教育委員会〕

茶山詩話 第4集

〔北九州市立歴史博物館〕

北九州市立歴史博物館年報 19

弥生の鉄文化とその世界

江戸時代の文化

北九州・戦時下の市民のくらし

博物館だより 16

〔岐阜市歴史博物館〕

博物館だより No.30～No.32

〔九州陶磁文化館〕

セラミック九州 No.31～No.30

〔九州歴史資料館〕

九歴だより No.1～No.2

〔京都国立博物館〕

京都国立博物館概要 平成7年度

平成5年度京都国立博物館年報

〔京都市歴史資料館〕

京都市歴史資料館紀要 第12号

京都市歴史資料館年報 13

京都市の文化財 新指定・登録美術工芸品

八坂神社の古文書

京都市史編さん通信 No.260

〔京都府立丹後郷土資料館〕

新宮涼庭と丹後の医の流れ

〔京都府立山城郷土資料館〕

山城郷土資料館報 第12号

村をくぎるもの

やましろのお茶

発掘成果速報～平成6年の調査から～

山城郷土資料館だより 第23号

〔呉市入船山記念館〕

館報入船山 第6号

館報入船山 第7号

〔群馬県立歴史博物館〕

群馬県立歴史博物館調査報告書 第6号

博物館だより No.58～No.61

〔高知県立歴史民俗資料館〕

高知県立歴史民俗資料館研究紀要 第4号

収蔵資料目録 郷土玩具

死と再生の文化

土佐藩主山内家の名宝

高知県立歴史民俗資料館だより 第14号～第18号

〔埼玉県立さきたま資料館〕

調査研究報告 第8号

〔埼玉県立博物館〕

埼玉県立博物館紀要 20

埼玉県立博物館だより 88号

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館ニュース 第146号～第152号

〔下関市立長府博物館〕

関の町誌の世界

〔庄原市教育委員会〕

境谷鍛冶跡

〔世田谷区立郷土資料館〕

世田谷区史料叢書 第10巻

農村と教育

ジャの道は蛇

喜多見の遺跡

資料館だより No.23～No.24

〔センチュリーミュージアム〕

センチュリーミュージアム年報 1979年～
1993年

〔園田学園女子大学近松研究所〕

近松研究所紀要 第6号

〔大聖院〕

霊峰 第370号～第381号

〔竹中大工道具館〕

竹中大工道具館研究紀要 第7号

竹中大工道具館10年史

〔丹青総合研究所〕

ミュージアム・データ No.28～No.31

〔千葉県立安房博物館〕

魚と生きる

安房博物館報 第62号～第63号

〔千葉県立大利根博物館〕

水郷の原風景

〔千葉県立総南博物館〕

千葉県立総南博物館年報 2

鉄砲

総南博物館報 第57号～第58号

〔通信総合博物館〕

資料図録 No.49

通信総合博物館年報 平成6年度のあゆみ

〔天理参考館〕

天理参考館報 第8号

大和名所絵図巡り

〔東北歴史資料館〕

東北歴史資料館年報 平成6年度

〔鳥取県立博物館〕

鳥取県立博物館研究報告 第32号

裸子・単子葉植物目録

郷土と博物館 79号～80号

〔豊田市郷土資料館〕

豊田史料叢書 渡辺半兵衛家分限帳(中)

豊田史料叢書 内藤家文書(編著1)

豊田の文化財

1937-1945:人々の暮らし

ふるさとの語り部集 近代の暮らしと食(Ⅱ)

豊田市郷土資料館だより No.12～No.15

〔名古屋市博物館〕

名古屋市博物館だより 103～109

〔奈良県立民俗博物館〕

奈良県立民俗博物館紀要 第14号

奈良県立民俗博物館・大和民俗公園 平成6年度

民俗博物館だより 67号～68号

〔日本のあかり博物館〕

博物館ニュース 第8号

解説シリーズ No.4

博物館ノート No.39～No.40

〔日本民家集落博物館〕

民家集落ふるさとだより No.14

〔日本ユネスコ協会〕

ユネスコ世界遺産 1995

〔沼津市歴史民俗資料館〕

駿河湾の漁船

沼津の漁業

資料館だより 120号～125号

〔根室市博物館開設準備室〕

根室市博物館開設準備室紀要 第9号

根室市博物館開設準備室だより No.10

〔東広島市教育文化振興事業団〕

高屋東1号遺跡発掘調査報告書

田中遺跡発掘調査報告書

五反田遺跡発掘調査報告書

諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館研究報告 No.18

平塚市博物館年報 No.18

〔広島県教育委員会〕

小倉山城跡

いぶき No.10

〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕

草戸千軒町遺跡発掘調査報告 III

草戸千軒町遺跡発掘調査報告 IV

〔広島県農林事務所〕

広島県の自然と野生生物

〔広島県民生活部〕

土地分類基本調査 赤名・上布野

〔広島県民文化センター〕

けんみん文化 平成7年4月号～平成8年3月号

〔広島県立生涯学習センター〕

まなびねっと No.61～No.63

〔広島県立図書館〕

広島県内公共図書館郷土資料目録 第40号

〔広島県立美術館〕

広島県立美術館開館準備室ニュース No.1

〔財)広島県埋蔵文化財調査センター〕

研究輯録 V

年報 X

ひろしまの遺跡 第61号～第64号

〔広島県立文書館〕

広島県立文書館事業年報 第6号

宮本愚翁日記抜粋

広島県立文書館だより 第5号～第6号

〔広島県立歴史博物館〕

菅茶山とその世界

茶・花・香

広島県立歴史博物館ニュース 第24号～第25号

〔広島県立歴史民俗資料館〕

年報 平成6年度

弥生のかたち

古墳誕生の謎をさぐる

川に生きる

歴風 第11号～第13号

〔広島市現代美術館〕

THE ARCH 第11号～第12号

〔広島市公文書館〕

広島市公文書館紀要 第18号

図書目録 VIII

〔広島城〕

近世の甲冑

〔広島民俗学会〕

広島民俗 第43号～第44号

〔福井県立博物館〕

福井県立博物館年報 第5号

〔福岡市博物館〕

福岡市博物館研究紀要 第5号

収蔵品目録 10

FACATA No.16～No.19

〔福島県歴史資料館〕

福島県歴史資料館研究紀要 第17号

歴史資料館収蔵資料目録 第25集

歴史資料館収蔵資料目録 第26集

〔福山市立鞆の浦歴史民俗資料館〕

資料だより 第15号～第16号

〔福山市立福山城博物館〕

阿部氏十代展

俳画のながれ

〔府中町歴史民俗資料館〕

府中町歴史民俗資料館報 平成5年度

府中町歴史民俗資料館報 平成6年度

〔松本市立博物館〕

百竹亭コレクション

河越虎之進の世界

農具のうつりかわり

あなたと博物館 No.82～No.85

〔松山市立子規記念博物館〕

松山市立子規記念博物館年報 13

子規博だより Vol. 14-4～Vol. 15-3

〔三菱重工広島製作所〕

三菱重工広島製作所50年史

〔宮島町教育委員会〕

大竹の手漉き和紙

廿日市の仏像

広島県綿糸紡績会社小深川工場跡調査報告

ルース台風の足跡

沖美町史

沼田城跡発掘調査報告書

東広島の文化財 第1集

ひがしひろしまの文化財

史跡吉川氏城館跡保存管理計画策定報告書

史跡毛利氏城跡保存管理計画策定報告書

よしだの文化財

因島市指定文化財

広島県文化財解説目録

広島県文化財調査報告 第14集

広島県文化財調査報告 第18集

広島県遺跡地図（呉市・東広島市・安芸郡・賀茂郡）

大山祇神社

五日市町教育委員会30年誌

佐伯万葉史の研究

広島県の野鳥

昭和58年7月豪雨災害誌

1991年台風災害による強風災害の研究

中国地方建設局30年のあゆみ

広島国道のあゆみ

日本の文化財 I

日本の文化財 II

天然物記念事典

〔山口県立山口博物館〕

山口県立山口博物館研究報告 第21号

館報 18

山口県の自然 第55号

〔横浜開港資料館〕

横浜開港資料館紀要 第13号

横浜と上海

横浜関係新聞記事年表稿（1895年～1899年）

五味亀太郎文庫目録

〔読谷村立歴史民俗資料館〕

読谷村立歴史民俗資料館紀要 第19号

読谷村立歴史民俗資料館年報 第20号

上地・親志・都屋の民話

読谷山花織展

棒交流会（第5回）

資料館だより No.28

〔早稲田大学演劇博物館〕

演劇博物館 73～74

* 17
〈削除〉

* 18
〈削除〉

* 19
餘り急坂を降れば路傍に富士岩と稱する名岩あり形の似たるを以てこの稱あるなり

* 20
かゝる仙實を賦して吾人を慰安せんとつとめ

* 21
數多の小汽船を

* 22
〈削除〉

* 23
〈削除〉

* 24
郵便局 棧橋より二町餘。海岸通三丁目にあり

* 25
〈削除〉

* 26
長濱公園にあり立坪五百拾坪總坪數二千四百坪

* 27
〈削除〉

* 28
嚴島案内記寫眞帳、繪圖宮島扇、神能繪はがき、名所繪はがき、寫眞等の各種は宮島春錦堂にて發行せり

* 29
〈削除〉

* 30
〈削除〉

* 31
定めなり

明治四十二年八月十一日印刷

明治四十二年八月十五日發行

不 許 複 製

著 作 者 兒 玉 周 平

廣島縣佐伯郡嚴島町五百七十五番邸

廣島縣佐伯郡嚴島町三百五番邸

印刷者兼 發行者 瀬 田 律 三

廣島縣佐伯郡嚴島町三百五番邸

發行所 嚴島寫眞帖嚴島 繪はがき發行所 春 錦 堂

嚴島案内記

* 1 九百四十五戸

* 2 三千六百八十三人

* 3 郵便局周防山陽中國三銀行支店國有林保護官舎及棧橋待合所宮島驛間に連絡汽船の便あり

* 4 七月十八日にして干潮を待て寶索を行ふ

* 5 みかどホテル

* 6 (本院の住職明尾僧都は故 小松宮殿下の御遺旨を奉じ本院の再建に就て經營の途にあり)

* 7 〈削除〉

* 8 〈削除〉

* 9 〈削除〉

* 10 〈削除〉

* 11 〈削除〉

* 12 伊藤公爵韓國統監として赴任せらるゝや内國に往還の途次屢當地に駕を扛げ當山の名勝舊跡をして永く險路の中に陰没せしむるに忍びずとし躬ら巨額の金を投じ當山の道路に大改修を加へしめられたり茲に於て面目一新麗より山頂まで總て二十四町殆ど安全なる石段道に改修しあるを以て老幼婦女と雖も足駄のまゝ、苦もなく登山することを得るに至れり

* 13 一千百〇四

* 14 〈削除〉

* 15 故に俗に里見の茶屋といふ

* 16 休憩所の設けあり

明治三十七年九月廿八日印刷
明治三十七年十月三日發行

不許複製

著作兼
發行者

廣島縣廣島市細工町八番邸
高坂德市

印刷者

廣島縣廣島市細工町八番邸
高坂德市

印刷所

廣島縣廣島市細工町九番邸
高坂印刷部

在籍者〈尋常科二百七十人高等科八十五人〉
一生徒數

出席者〈尋常科二百十五人高等科七十三人〉

嚴島警察分署。海岸通一丁目西波止場の口にあり

國有林保護官舎。字大町光明院の下にあり

嚴島町役場。字大町にあり

演劇場。字北の町にあり。明神座と稱す

勤工場。²⁷字久保町にあり

航路標識。龜石燈竿と稱す。鵜踏潟沖にあり

嚴島の物産

當町の物産は所謂木竹細工にして。轆轤物杓子類竹細工彫刻物等を主とす。而して轆轤細工には茶盆、菓子器、筆立、會席盆、煙草盆、燭臺、菓子鉢、茶入、茶壺、茶臺、茶卓、煙草入、行厨入、楊枝立、針指、砵入、盛物臺、時計臺、寫眞掛、体操器械、杯、コップ、パイプ及小兒玩弄具等あり。又匙類には圓形、卵形、茄子形、貝形、葉形及西洋匙等ありて大小一ならず。竹細工には花瓶、菓子入、熨斗盆、竹箸、及柄杓等の如きあり。其他楊枝類、齒朶籠細工、肥松細工、蓑入等枚舉に遑あらざるなり

又食用品としては蠣、アサリ、ミル貝、魚類、薯蕷、岩茸、蕨、蕈類、雪花漬、惣太郎漬、宮島饅頭、裏櫻餅等の如きありて賞味すべく。其他盆栽植物としては石蘭、²⁸片葉蘭、²⁹鸞蘭、孔雀蘭、岩千鳥蘭等ありて愛玩するに足れり

町民職業別の大要 ²⁹ 三十五年九月調

竹木細工百九十人○轆轤師百人○杓子削〈匙類を含む〉六十人

産物店五十四戸○旅人宿四十二戸○大工職六十五人

渡船業者三十八人○飲食店三十戸○案内者二十人

穀物商十八戸○彫刻職十八人○樵夫十七人

藝妓〈藝妓は月々増減一ならず三十五年度に於ては二十五名以上四十名以下

³⁰の間を上下せり〉其他略之

宿屋組合規約に依りて定めたる旅籠料及飯膳料

旅籠料（一泊二飯）

一等(甲)金壹圓五拾錢(乙)金壹圓 (丙)金七拾錢

二等(甲)金五拾八錢 (乙)金四拾八錢(丙)金參拾八錢(丁)金參拾四錢

飯膳料金（一食）

一等(甲)金五拾錢 (乙)金四拾錢(丙)金參拾錢

二等(甲)金貳拾五錢(乙)金貳拾錢(丙)金拾五錢(丁)金拾參錢

産物店の組合規約

産物店に於ても組合規約の設けあり。殊に其賣品價額の如き一切正札を附し。其直段に依りて物品を販賣するの定めなれば。³¹購入者に於ては便利なりとす。

嚴島案内記終

雜 錄

を極めんか。其絶美絶景。豈よく筆舌の及ぶ所ならんや。蓋し嚴島全島海岸四圍の風光は御山各地の諸景と調和して二大絶勝を作爲せるもの。而して吾人は世の識者が。其眞個の價値を認識せしものあるや否やを發見するに苦しむものなり

へ嗚呼世の都ての勤勞者よ。自然はかくも吾人に慰安の仙實をめぐみ賜へり。誠に一兩日の行を緩ふして斯世界無比の樂園に歩を枉け。以て活力の休養をはかるも人生の要務にあらずとせんや。蓋しボートにまれヨットにまれ又和船にまれ。將來に於ける本島の四周は。方に權を採つて起つて自由に勝遊を試むべき好適地にあらずや

みつしほはたゞ大海のいづみかな

なみや月かげあらひけりいづくしま

こぎいづる秋の夜舟のかちとりて

松の雪うみも彩色やいつくしま

江山頗係念。行樂賞春晴。俯看魚龍躍。

仰聞猿鶴鳴。月昇燈影淡。風靜磬聲清。

要永別雲水。留詩記姓名。

舟路無風晴晚風。奇觀須向此間探。

神姫早已垂靈跡。古史何曾載妄談。

積水遠連天下山。層巒高峙地東南

未輕着句君休怪。海内名區指屈三

川田剛

嚴島港。全島の要津にして東部市街の海岸に當れり。港の東西に二個の波止場あり。この両波止場の両側に於て更に二個の大雁木（西の雁

木は神地なり）あり。皆與に船舶の繫留に便なり。棧橋は東大雁木の東方に位し。其東隣に小浦あり。又船舶の繫留所たり。當港は純然たる港灣の形を爲さざるも。内海にして波穩かなるを以て優に數百艘の船を泊し。又拾餘艘の漁船を碇泊せしむるに足れり

宮島渡航株式會社。棧橋の上り口字小浦にあり

憲兵休憩所。棧橋附近字濱の町にあり

郵便電信局。棧橋より二町餘。海岸通三町目にあり。明治三十五年一月より同十二月まで一ヶ年間に於ける當局電報及郵便取扱件數左の如し

一電報（發信數五千八百十二件 着信數四千二百三十四件）

一郵便（發信數十八萬三千六百五十三通 着信數十五萬四千三百三十六通）

一小包郵便（引受數一千六百三十三個 配達數一千八百十六個）

八田貯蓄銀行支店。郵便電信局の隣にあり

嚴島尋常高等小學校。字中の町にあり。明治三十五年十二月末現在に於ける教員及生徒數左の如し（當校には嚴島の特産とせる手工科の設けあり）

一教員數（校長一人。訓導四人。準教員一人）計六人

浦はる、すやの朝なぎ夕なぎに

みる眼はさこそたぐひなからめ

中納言持豊

仰見^{キルミ}層山^{シヤウザン}幾萬^{キマン}松。波間^{ハミ}燈映^{テウエイ}蘸^{セン}高峯^{カウホウ}。

此勝^{シキョウ}若比^{ニヒ}松洲^{シヤウシュウ}景^{ケイ}。水色^{スイシキ}山光^{サンカウ}又々濃^{ナカ}。

小西皆雲

御床浦。山光水色相掩映して一區の佳境を作成せり

御床浦神社。島廻第七の拜所にして市杵島姫命を祭れり。この地は大

古市杵島姫命が最初御降臨ましまして時の眞床にして。杜前に大磐石あり。岩面龜裂して自ら龜甲の如き紋章をなせり。嚴島神社の御紋章に龜甲を用ふるは茲に起因せりと云ふ

あふげなほ天降りまし、その神の

御床のいはほ動きなきかげ

中納言持豊

内侍岩。治承の昔徳大寺太納言實定卿嚴島へ參詣(參詣の時)は中納言たり。の時。内侍の中に有子と稱ふるものあり。年紀十六七。希代の琵琶の名手たるの故を以て實定卿に愛せられけるが。實定卿の歸京に際し。この處の岩上に來たりて別れを悲歡せしに依り。内侍岩の稱は起れりといふ

鰯踏湯。洲濱二町半。平原廣くして溪深く入り。溪流一道御山の奥の院より來たる。此溪流に添ふて奥の院に達する道路あり。川は平原の西端に添ふて流れ川口に石橋を架す。殊にこの邊一體は頗る喬樹に富み。枝幹交錯して林を爲せるもの幾千株なるを知らず。此地は治承の昔平宗盛御山寄附の梵鐘を鑄造せし所なりといふ

是より江の浦に到るまで數町の間沿岸相連りて屏風の如く。蟠松低く梢をたれて一種の清錦を畫き。加ふるに鬼石、大黒石、飛石及び梶石等の名石ありて趣を添へ。海波蒼然風光滴らんとするばかりなり

網の浦。大元浦の隣に當り公園地に屬せり。海面遠く開けて眺望に富み。園内に淺黄櫻相生松等の名木あり

七浦に於ける風景上の概観

全島の中央御山山脈の四面に分岐して環海に窮する處。無數の小支脈となり。此小支脈末端の海に接するところ或は屏風の如き絶壁となり。或は落々たる磯礁快岩となり。而して其小支脈各末端の相對時せるの中間に幾多の平地川流入江を作り。又其平地の海面に接する所に於て松原となり。洲濱となり。洲渚斷續。灣涇屈曲。斷岸出入。磯岩凹凸點羅して種々の變態を演出せるところ。古松雜樹。森森鬱々として到る處に生ひ茂り。此間を貫流せる幾多の清流は絶へず海に朝して海藻の髪を梳り。以て億兆の鱗屬を育せしむ。加ふるに周圍遠近の蒼溟に纏繞星羅せる無數の諸山島嶼は御山群峯の落々翠色と相映帶して景を添へ。七浦の風煙海に連りて雅趣あり。延長七里三拾餘町八拾有餘の各浦。一浦一觀の妙味を有するのみならず。岸邊の一樹一石も自ら天真の風趣を存し。千姿萬狀殆んど端倪すべからざるなり。若し夫れ朝暉夕陽海面を彩り。或は月光金波を漲らし。金龍躍り。銀鱗の蹙するを視。或は滿目白皚々たる蓬萊全島の大觀

朽ぬるときを君に見んとは

伊香賀民部大輔隆正

此時供奉の士外四人同じく自盡す。後元就晴賢の首を實驗し。廿日市の洞雲寺に葬りて石塔を建て。慇懃に供養せられたりといふ

養父崎

養父崎神社。祭神靈鳥にして七浦七社の外とす。鳥廻の船此沖合に達すれば神官桑を海上に浮べ。鳥向樂を奏すれば一雙の靈鳥御山の方面より飛び降り。交互波に浮べる桑を啄へて御山に運ぶ。此時船中より拍手して禮拜す。是を鳥喰式とは稱するなり。もし船中に於て穢れある時は靈鳥の出向なしといふ。養父崎山の半腹に石の小屋と稱する名石あり。岩石疊みて家屋の如き形を爲し。頗る奇觀たり。

山靈高占碧崔嵬。千歲祐民最異哉。

設供舟中吹玉笛。一雙玄羽出雲來。

僧獨麟

一拳螺髻渺茫中。老樹周遭天女宮。

又有神鵜能報吉。舟行長去來風。

伊藤東涯

この邊一帶浦もなく洲もなく。磯岩快石森々たる山脚を没して海中に散点せるところ。一小古祠を安鎮し。頗る雅趣あるのみならず。前は海面遠く開けて遠近の諸島を望み。風光甚明媚なり

七浦の島めぐりする舟のうちの

もゝの音あかす神やきくらん

中納言持豊

いつまでもみるめはうれしいつくしま

めぐる浦回を面かげにして

似雲

山白濱。此地七浦の中央に當り。濱邊のかゝり頗る青海苔浦に類し。

洲濱三町餘。川流あり入江あり神社ありて又一佳境たり

山白濱神社。同濱にあり。鳥廻第五の拜所にして表津少童命を祭れり。

かしこしな名さへ動かぬ山しろの

濱邊にしめし神の宮居は

中納言持豊

革籠崎。本島南端の一岬角にして。御床山脈のはしりて南海に窮するところ絶壁たゝみて海中に入り。頗る奇觀を爲せり。岡上に有名な早咲の櫻あり。是より桃の木浦棟の木浦下り松浦長の浦等の浦浦を越へて須屋浦に到るの間三十餘町。山海の風光頓に一段の趣を改む。白帆弛るく風を朶みてこの間をよぎる。身は山水畫幅中の人たるを覺へざるなり

須屋浦

須屋浦は嚴島西端の一角に當れる地にして。三角形を劃したる一條の洲嘴蒼々たる海中に斗出せるところ。青松一面に叢生し。天光松影倒まに海に落ちて空中に一道の翠虹を現す。當園の松原は面積四千六百七十坪を有し。其洲濱の延長五町十七間餘に達せり。此浦に名水あり。干潮の際磯ぎはより湧出す。其水甚だ清冷。漁人これを汲んで須屋の清水と稱す

須屋浦神社。同園に接し境内八十七坪を有せり。鳥廻第六の拜所にして表筒男命を祀れり。鳥廻の際此神社の拜殿に於て餡餅の饗あること古例なりとす

金剛水。同浦東端の海邊より入ること二町餘。小丘の麓にあり。其水清冽混々湧出して晝夜を分たず。傳へいふ當郡廿日市洞雲寺の金剛和尚此處に座禪せしとき始めて湧出せるものにして。同寺の金剛水と其水脈相通せりと

包ヶ浦。此浦は毛利元就陶晴賢の陣を襲ひたるとき。草津より船を此處に寄せて上陸せられたる地点に當れりといふ

包ヶ浦神社。同浦の東端なる裏岩の上に建設せられたり。祭神は壘土翁にして七浦七社の外なり。壘土翁は神武天皇西偏より起りて天下を平定し玉ひし時帷幕に參じて功勞尠なからざりし人なり。元就この浦より上陸して遂に勝を奏するや。社壇を改め社領若干を寄附せられたりといふ

七浦風煙隨棹移。神鴉飛處羽差池。

快巖奇石麗如畫。畫裏秋光盡上詩。

寺田臨川

鷹の巢神社。島廻第二の拜所にして底筒男命を祭れり

腰細浦神社。島廻第三の拜所にして中津少童命を祭れり是より海面漸く開き遠景又一入の觀あり

汐みてば浪もいはほをこし細の

浦吹く風やはげしかるらん

中納言持豐

大砂利浦。御山本堂の眞浦に當り。平原廣くして濱開け優に一部落を爲すに足れり。又一佳境と爲す。是より檜の木浦、藤ヶ浦、蝶崎、青海苔浦、養父崎、山白浦等の各地を經。革籠崎まで殆んど二里半

に渉るの間沿海一帯特に磯岩に富み。海面廣く東南に開きて陽氣を帶び。松樹雜木の類磯際まで生ひ茂りて梢を波にひたし。風景概して壯麗なり

青海苔浦

青海苔浦は棧橋より海上三里半弱の程にあり。中央に清流あり。平地あり。又入江あり。青海苔神社あり。地南海に面するを以て。氣候温和。眺望快濶にして又一勝區たるを失はず

青海苔浦神社。同濱の中央にあり。島廻第四の參拜所にして中筒男命を祀れり。島廻の船この浦に着するや。祭事の後拜殿に於て午飯を饗し。配膳に於て青海苔を用ふること古例なりとす

高安ヶ原。青海苔川の溪流に添ふて廻ること十三町許にして。高安ヶ原と稱する地あり。弘治の昔陶晴賢戰ひ利を失ふや。親臣數人と與に此處に通れ來り。主從環座。慨歌劍舞して最後の名殘を留め以て自盡したるの舊跡たり。左に辭世の歌を録せん

何を、しみなにをうらみんもとよりも

此ありさまの定れる身に

陶晴賢

莫論勝敗跡。人我暫時情。

一物不生地。山寒海水清。

柿並佐渡守房精

ありとき、なしと思ふも迷ひなり

まよひなければ悟りさへなき

山崎勘解由隆方

おもひきや千年をかけし山松の

てたるをくぐりて祓を爲す。(以下各浦に於ける儀式の次第は、これに準するなり)これより順次に各神社の参拜を了へ。御床浦にて茅の輪を納め。網の浦にて上陸し。大元神社に参拜の後酒宴の饗あり。終りて後嚴島神社に報賽の神樂を奉り。以て其式を終了するなり

浦廻及浦遊。浦廻とは以上の如き慣行上の儀式を用ひずして。希望者が隨意に浦々に船を漕ぎ寄せ。適宜各神社に参拜するものをいひ。浦遊とは拜神上の意味を有せず。又必ずしも全島を周廻するまでもなく。望むところの浦々勝地に船を寄せて遊覽するものをいふ

しまぐもよせ来る霧のまかきかな 紹巴

なみに雁なく月のあけほの 良政

龜のうへの山か、すめるおきつ舟 玄仍

硝子のくにやわか葉のいつくしま 露川

長濱より聖崎に到る沿岸。この沿海に小なきり浦、大なきり浦、清水ヶ浦、米ヶ浦、屏風ヶ浦等の浦々あり。山低く水碧にして海波常に風光を醸し。風光頗る清麗なり

聖崎

聖崎は棧橋より拾餘町の程にあり。全島の最北端にして。この邊一帶山勢最も低く。屏風ヶ浦牛ヶ濱蓬萊岩等の勝地相共に接近して特殊の奇勝を賦す。前には廣島灣浩渺として一大磨鏡を開き。後には御山繪馬ヶ岳の諸峯翠鬱として天漢に朝するあり。岸邊の蟠松低く梢をたれて清艶なる水波に映ずるの邊。二個の蓬萊岩雙々相擁して

突兀海中に聳へ。灑洒頗る風韻を極めたり

神山縹渺小蓬萊。七浦風烟與海開。

今古精禪無廢馳。閨宮時進紫霞杯

寺田臨川

蓬萊の出現。嚴島圖會に曰く。「この沖合蓬萊と稱するものあり。三四月の頃風恬かに波穩かなる時。此處より浮き出づ。その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし。其上松柏生茂り。或は宮殿樓閣の象ありて其壯麗たぐへん物なし。光明海上に彩きわたりて次第に消滅す。今も往々これを見る人あり」云々

〔聖崎近海に於ける蓬萊の出現に就ては。西遊記輪池叢書等の古書にも見へ。又漁夫古老の口碑にも傳稱せらるゝ所。蓋し稀に見るところの物理的現象に外ならざるべし〕

海連嚴島勝區多。蜃氣浮來映曉霞。

樓閣遙傳天樂響。方知天女弄琵琶。

小竹老人

杉の浦。は聖崎より海上四五町の程にあり。陸上よりすれば棧橋より十五六町にして達することを得べし。洲濱二町四十間餘。平原と海面との間に横たはり。松樹叢生して北海の渺茫に臨み。遙に佐伯安藝沿海の諸山と相對し。眺望快濶。恰も水彩畫中の景に髣髴たり

杉の浦神社。同浦の西端にあり。島廻第一の参拜所にして。底津少童の命を祀れり

いく世をか杉の浦風吹く音も

神さびにけるこの宮居かな

中納言持豊

朝日觀音堂。駒ケ林より數町の處にあり

夕日觀音堂。朝日觀音堂より一町餘の下にあり

右両堂共に駒ケ林より山背に添ふて降るなり。降路急なれども山海の眺望に富み。沿道の風色又一種の生面を開けり

登御山率記所見古詩三十韻 石川丈山

嚴島蒼浪上。御山素雲邊。廟貌壓垠塹。霞鬪溢穹天。
伊昔蓬瀛地。縹渺棲神仙。應眞飛錫翫。安期賣藥還。
谿窅坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗憩樹蔭。袒裼盟飛泉。
旁磚無人境。登臨意惘然。芝草醉玄解。松子飽僊僊。
巨石競怪狀。遠客愕屯遣。浮景接崑閭。層陰延虞淵。
回顧踞疊磴。跼步凌絕巔。俛仰忘身世。騁懷獨踰躔。
魍魎時出沒。蝙蝠畫飄翩。歸墟千仞谷。弱水萬里船。
對西青壑聳。巨東翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。
双飛巢壽域。幾度見桑田。日靈尊如在。市杵姬所躔。
二聖三千載。小祠八九椽。空海据神區。遣求聞持傳。
蒲窠吼枸簾。華表峙術阡。猿呌煙霧裡。鹿臥殿前。
木客姑獲鳥。化鬼又變鳶。居僧曾被害。群民懼爲虔。
嗟非有道骨。曠能久稽旃。多病訪負局。修生問稚川。
高蹈嘯巖曲。薄言避塵緣。早洗許由耳。將拍洪涯肩。
茲游重難繼。卑懷聊欲宣。讀者可嗤咲。信筆記一篇。

第四編

七 浦

島廻に關する事

島廻。嚴島の周回七里三十二町餘。この周圍浦々の中に於て。約一里づつ、を隔てたる海岸樞要の地に於て七ヶ所の神社あり。この神社を以て俗に七胡子と稱し。又この神社を齋祀りたる七ヶ所の浦を以て七浦とは稱ふるなり。島廻とは此七浦へ七浦とは神社を鎮め祀りたる主要なる浦所を稱するまでにして實際周圍全体の浦の數は八十餘ありと知るべしを東より順次漕ぎ廻りて。各浦の神社に參拜するの謂にして。其起因は推古帝の朝へ一千三百十餘年前。嚴島神社御鎮座同時に始りたる事なりとす

島廻の順序及儀式。島廻を爲さんには前日先づ身軀を潔齋し。當日未明三笠濱より船を艤して出發するなり。先づ神官の船には四手を懸たる櫓を立て。両舷に幕を張り。之に祭主として神官一人樂人二人使丁一人水主數人與に乗組むなり。次に願主參拜者一同數名の船歌師へ船歌師とは七浦沖合を進航しつ、船中にて慶意を表したる一種の船歌を唱ふるなりと共に別船の裝飾せるものに乘組み。外に仕度船儀式に關する仕度飲食調理の具を準備し旅宿の主人これに乗組むなり一艘。合せて三艘舳舻相銜みて漕ぎ出し。大鳥居沖より嚴島神社を遙拜しつ、東方より進航を始むるなり。進みて杉の浦に着すれば拜殿に於て奏樂祝文あり。終りて朝飯の饗あり。退出の際拜殿の前に茅の輪を立

に祀れるは弘法大師の靈にして。是實に同大師護摩修法の舊跡なりといふ（是より大元公園に通ずる道路あり。下り路十八町にして大元神社に達す）

此邊附近一帶の地は巨岩落々として山骨を組織し。古松雜樹森々として其間を點綴し。岩上の蒼苔露深くして錦の如き斑紋を点し。徑路曲折昇降頗る急なり。仰で觀れば削れるが如き千尋の絶壁突如として頭上に落下し來らんとし。俯して眺むれば深谷遠く渡りて雲煙の鎖せるを見。四邊の風物轉た幽凄なるを覺ゆ

繪馬岩。岩屋大師の東西に聳ゆる絶壁中にあり。然れども近づいて之を認むるを得ず。富士岩附近よりこれを遠望する時は。絶壁の中央に當り駿馬後方を顧みつゝ、千尋の谷底に向ふて降下する黒色の印影を留め。頗る奇觀を爲せり

龍ヶ洞。岩屋大師石室を距る數十間の下大岩石のもとにある岩穴にして。其深さ測るべからず。古昔龍の脱け出でしといひ傳ふるものはなり（是より大元公園に達する途中八町餘にして富士岩と稱する名岩あり）

駒ヶ林（此地岩上に馬蹄の跡あるを以て一に龍ヶ馬場と稱す。駒ヶ

林は駒返しの誤傳なり）

駒ヶ林は御山と相對して聳ゆる繪馬ヶ岳の絶頂にして。海面より高さこと方に一千五百三十四尺餘。西方に面する部分最も峻峻を極め。數百尺の絶壁一面の巨巖にして。恰も刀もて削り立てたるか如く。有名なる繪馬岩の奇觀は此裡に点綴せらるゝなり。而して此山頂に

達するに兩道あり。一は鹿屋谷附近よりし一は二重塔の方面よりす。山頂に近づくに隨ひ昇路漸く急に岩石次第に多く左折右往して登るなり。然れども歩一步其風觀を新たにし。自ら心神の清爽を覺へしむ。頂上には巨鯨の如き二個の大磐石両面に分れて横たわり。百數十人を座せしむるに足れり。この邊一帶の地喬樹に乏しと雖も。風趣ある松樹檜樹の類岩間岩間の間を文どりて景を添へ。自ら一種の佳境を作成せり。眸を凝らして遠近山海の眺を縦にせば周圍の絶勝歴々指顧の間にあり。仰で大虚を望めば浩浩乎として羽化登仙するが如く。自ら胸宇を潤大にし覺へず洪遠の氣象を誘發せしむ

（此地誠に稀有の一大異境たるにも拘はらず。暗黒の裡に埋没せられたりしは頗る怪むべきなり）

此ところは弘治元年九月毛利元就陶晴賢を討滅せしとき。陶氏の部將弘中參河守隆包及中務の父子が市街の各地に轉戦して其大勢の去れるを見るに及び。百餘騎の部下を率ひて此險を扼し。以て毛利氏の大軍に當り。三晝夜の血戰を爲して花々敷最後を遂けたる古戰場にして。今を去ること三百四十九年前のことなりとす

（蓋し隆包父子のこと名分上より論ずる時は青史上の罪人たるに相違なきも。晴賢の部下落々たる二萬有餘の軍中にありて克く其終始を全ふし。戰國武士の先驅として其本分を盡したるの一段は陰德太平記の詳悉せる所にして。今この絶壁の形勢と參照して考ふる時は。自ら懷舊の情に堪へ得ざらしむるものあるなり）

りに依りて此名ありといふ。龍燈は通例舊曆正月元日より三日までの間。又は全月六日の夜大宮沖合または腰細浦沖邊の海上に現するなり。夜漸くふけて山の影も見え難くなり。腰細の浦の眞砂にうち寄する波の聲まさに睡らんとするや。最初一燈浮み出づると見るに二燈となり三燈となり。須臾にして六七燈となり。三十となり。五十となり。無數の幻火水上に浮走するかと思ふうち又混じて一燈となり。而して明滅定りなく。風波強きときは火光動搖して見定めがたく。火色普通の燈火に類し多くは曉に到りて消滅すといへり。然れども年に依りて現出せざることも多く。其現否の年豫め期し難しといふ

〈龍燈のこと夫の聖崎の蓬萊と共に嚴島海上に於ける二幻象に屬せり。これ素より物理的現象の表出たるに相違なきも。其眞理は未だ闡明せられざるなり。特に抄記して學者研鑽の資に供す

満干岩。丈餘の岩石にして側面の中央に穴あり。海水の満干につれて潮水或は留り或は流出すといふ

船岩。其形恰も船の如き大磐石にして。岩下に地藏尊を安置せり

大日堂。本尊大日如來〈建物四間四寸四方なり〉

弘法大師御山開基同時の建立にして。往古神護寺と稱したるもの是なり。これ大師修法の道場として建立せるところにかゝるといふ
目洗薬師。大日堂の傍にあり。眼を病めるもの本尊に賽するもの尠なからず

¹⁸ 三界萬靈水掛地藏。此處岩石の間より清冽なる泉水湧出せり

水晶石。丈餘の大石にして中央の穴より窺へば石中水晶を以て充たされたりといふ

奥の院

御山と先峠山との中間谷底に當り。自ら別區域を爲せり。茲には大師堂、(及び籠所) 彌勒堂、水手向地藏尊等安置せられたり。此邊最も喬木に富み老樹鬱々として晝もなほ暗く。所謂深山幽谷の境にして自ら天地の人間に非らざるを覺へしむ。先峠山の半腹には帆掛岩鏡岩屏風岩等の名石あり。又奥の院より谷底の溪流に添ふて海岸端踏渇に通ずる道路あり。二拾餘町にして達するを得べし

御山二王門より以西に於ける名勝舊跡

鹿屋谷。二王門より二町五十間餘の程にあり。路上に平面なる大岩石横たはり。山高み溪深くして頗る閑靜を極め。眺望殊に佳なり。藤原興風詠じて曰く。あらし吹く鹿屋の谷のたに深く月影清し雲のくれなみ

三劔岩。往古三段に折れし劔を納めたる所にして。岩下に觀音の小祠あり

岩屋大師

岩屋大師は一名龍ヶ窟と稱し。又護摩谷の窟と稱す。巨巖天を蓋ひ四面皆岩壁にして自ら石室を作し。僅に門口を有するのみ。而して窟の内疊拾數疊を敷きうべく又直立して歩行するに足れり。窟の奥

蘋藻巧^{ニム}脚斜^{ニム}日外。翻々時掠^{ニム}客船^{ニム}歸。

僧日峯

求聞持堂

一に本堂と稱す。本尊は虚空藏にして其他諸佛像を安置せり。本堂は大同元年十月弘法大師當山開基の際。求聞持滿座の靈跡にして。開持の火今に絶へざること正に一千九十餘年。而して修法の行者信徒の輩年に月に踵を絶たず。實に千古の靈場たり

へ本堂は大師の創立後平清盛公の營繕に次ぎ。降て長享元年將軍義尚公の再繕あり。其後慶長八年國主福島正則公の修繕ありしが。明治二十一年一月回祿し。全二十七年に至り町民義財を醸して現堂宇を建立したるなり

堂の前面に錫杖梅と稱ふる古木あり。大師登山の時携へたる錫杖を立て置き玉ひしに。生ひつきたりと云ひ傳ふるものはなり。又本堂の後に關伽水と稱ふる清泉あり。大師修法のとき加持明泉水として用ひ玉ひしところにして。水質頗る清冷にして甘美なり。又本堂の左側に曼陀羅石と稱ふるあり。數丈の磐石にして石面に梵字及び三世諸佛天照大神宮正八幡三千七百餘座等の文字を鐫刻せり。大師自ら刻し玉ひし所なりといふ

三鬼神社。追張鬼神、魔羅鬼神、時眉鬼神の三神を祭れり。社壇は近年の修繕にして本堂の上にある

鐘撞堂。堂内に梵鐘を懸く。これ治承元年右大將平宗盛公の寄附に、これり

毘沙門堂。本尊毘沙門天 〈建物三間五尺五寸四面なり〉

毎年陰曆正月六日の夜は其結願に當れるを以て。信者の諸方より參詣するもの尠なからず。現今なほ夜中提燈を携へて本山に登り。以て此堂に參拜するもの多きは古例を襲へるなり

石洞門。大岩石蓋ひかゝりて自ら門の如き形を成せり

岩屋不動。岩石自ら屋根の如き形を爲し。その内に不動尊を安置せり

此邊一帶の風景

鐘撞堂及毘沙門堂附近は老樹翳鬱としてたちこもり。岩石皆千歳の苔を封じて古色を帶び。地靈に境靜にして頗る雅趣を呈し。殊に毘沙門堂より頂上石に達するの間は大岩石疊々として天成の化工を極め。一步一觀生面を開かざるはなし

御山頂上

頂上は宮廻の中央に當り豁然として一境をなせり。伊豫周防の諸山は雲煙の間に縹渺とし。佐伯安藝阿郡の諸島は白銀盤上に黛を凝らし。漁舟白帆の点々この間に來往せるさまは水禽の波に漂ふかと疑はる。又先峠山は翠巒として南方に横たはり。繪馬ヶ岳は突兀として西方にそびへ。四邊の風物競ふて秀色を捧呈し。宛然たる名手の一大壺畫を展觀するが如し

この頂上の南端に峙てる巨岩を頂上石と稱す

龍燈杉。數百年を経たる杉樹なりしが。今や朽腐して僅かに其根幹を存するのみ。昔御山に登りて毘沙門堂に參籠せる信者はこの杉樹の元に到り。遙かに腰細浦沖合に浮み出でたる龍燈を拜するの慣例あり

面は苔鮮露滑かにして點々斑文を染め出せるが如く。其窮極するところの面積幾何なるを知らず。或は曰く此巖拾餘町の山谷に連なりと

十一町目より十五町目二王門に到る四町許の間は全く石道にして。

道の左右附近一帯殊に樹木喬くたちこもり。頗る幽邃の趣を極む

二王門。門の両側に金剛力士二軀を安置せり。元この處に二の鳥居建設せられたりしも現今替廢せり。是より上部を御山の本山と稱し名

勝舊跡各所に散在せり

是より御山神社を經本堂より宮廻りを一周すれば五町餘の道程あり

又此處より南方へ三王門の下方にあり降り道は奥の院に達する道路にして。五町餘あり

又此處より西方は駒ヶ林及護摩谷に達するの道路にして。駒ヶ林は登り三町にして達し得べく。護摩谷岩屋大師までは六町にして達することを得べし

御山神社

御山神社は市杵島姫命（中央）田心姫命（左側）湍津姫命（右側）の三柱女神を齋祀れる所にして。大磐石の上に安置せられ岩上の周圍瑞垣二十間を越へたり

このところは數百尋の絶壁にして深溪其底を没し。杜前にたゞずみて谷底を下瞰すれば。覺へず心膽を寒からしむるものあれども。前面に鬱葱たる青山を望み。南方に森漫たる海洋を望み。頗る心胸

をして爽然ならしむるものあるなり

登御山

雖愛雲光薄。尚知嵐氣遮。穿林觀瀑水。

度嶺遇巖巖。松偃堪爲棧。巖懸自作家。

樵童華表外。拍手喚神鴉。

賴春水

同賞月

非隨仙侶來。安覩仙山月。直自海心弁。

又於波面沒。

同春水

御山神鴉の由來

此山上に雌雄一雙の靈鳥あり。御山神鴉と稱す。推古帝の朝佐伯鞍職既に宣下を蒙り。嚴島大神の御鎮座所を定めんとて鳥の浦々を巡檢するに當り。島廻式の起因茲にあり。船養父崎沖合を過ぎる頃。桑を海上に浮べて其地點を下するに當り。一雙の靈鳥御山より飛び降り。桑を噛みて御山に運び去りたるを始めとし。爾後一千三百十餘年世々相傳して今日に至れるなり。養父崎鳥喰式の部を参照すべし。此靈鳥は凡鴉より少し小くして美麗なり。常に御山に棲息して凡鴉の畏敬する所となり。其氣格極めて高尚なり。

御山神鴉（嚴島八景の一）

この山の宮居をさらでいくとせか

すめる鳥のつがひはなれぬ

中納言輝光

崢嶸靈嶽瑞煙霏。遙見黑衣下翠微。

第三編

御山

御山の開基^{*12}

御山は本島中央の高山にして海面を抜くこと一千五百八十四尺餘。山上には求聞持堂を始めとして大小數十區の堂宇各處に散在し。蓊鬱たる樹林は是等の堂宇と共に巨岩絶壁の間を点綴して趣を添へ。山態頗る秀麗なり。これ今を去ること一千九十八年前大同元年丙戌の年十月。弘法大師唐より歸朝の際この山に登り。その山勢の秀靈非凡にして祥瑞の氣漠々としてたち上るを見。錫を茲に留めて梵閣を經營せしところの靈場にして。護摩の香煙今になほ薰じて千古靈蹤の面影を存し。信者遊客の登山せるもの四季絶ゆる間なく。實に千古に顯絶せし靈跡なりとす

^{*14} 古人としなみ草を著はし御山の佳景を寫す。語簡にして要を得たり。今左

に其一節を抄録す

あけは、て御山にのぼらんとて瀧の宮へたちより。白糸の瀧をながめ。こなたかなたへゆきめぐり。靈佛靈社を拜するにいくところといふ數をしらず。危樓たかくそびえて雲をおび。飛閣前はれて海にのぞめり。蘿をよぢては巖窟にいり。松が根をとりて澗底にくだる。石泉したゝり落ちて青苔道なめらかなり。猿は子をよんで木の實をあさり。鹿は人になれて寺門にいる。登りつくして絶頂に座せば。忽ちこゝろ登仙するが如し。浦回のくまぐま遠つくしまで眼下にうか

びて。蟹の小舟も松のこづゑにゆきかよへり。さて本堂虚空藏にまうで、佛舍利三光石など拜したてまつり。求聞持の行者に齋を供養し。御供物を頂戴し。奥の院弘法大師の前にぬかづき。それより舟にかへり侍りぬ

一の鳥居。字瀧町を距ること一町ばかりの處にあり。是より本堂まで登路十八町あり

懺悔地藏。經塔。大師堂。火消不動堂。これ皆一の鳥居より御幸橋に到るまでの間にあり

祈不動堂遺跡。豊臣秀吉公の護身佛なりといひ傳ふる不動尊を安んじたる處にして。公朝鮮征伐凱旋の、ち此處に納めたるなりと。されども現今荒廢して其影をとゞめず

御幸橋。一枚の大石を以て架したる石橋にして。高倉天皇白糸の瀧觀覽ありし際架設したる所なりといふ

瀧宮神社。白糸の瀧。瀧見岩 ^{*15} へみなこの附近にあり瀧の宮公園の部に
出づ

五町目。御山の半腹に當り頗る眺望に富めり。市街及周圍の公園を眼下に望み。又海を隔て、遙かに本郡沿海の諸山及安藝安佐両郡の遠山を眺め得べし ^{*16}

中堂。登路七町目にあり。元休所の設けありしも現今半荒廢せり

岩屋薬師。九丁目窟の下にあり

幕岩。十町目十一町目前面の山腹にありて其形幕を張れるが如し。岩

一不動明王尊頼 妙澤筆

一愛染明王尊畫像 〔筆者未詳〕

金石地藏。上川德壽庵と稱し。禪宗の庵寺なり。本尊は金石地藏尊にして。佛體半石質半鐵質にして。甚新なる有名の佛像なり

梅林。維新の後荒廢せしが。近時梅樹の植附ありて。や、面目を改めたり

長濱公園

長濱は市街の北端なる棧橋より三町餘の處にあり。海を隔て、西の方大元公園と斜に相對し。其洲濱三町三十間餘に渉り。全園の反別拾町一反貳畝歩に達せり

一條の白沙新月の形を劃し。入江を挟みて長く延び渉り。背後には蒼鬱たる青山を控へ。前面には渺茫たる蒼海を隔て、大野地御前等の諸山に對し。洲濱には拾餘株の老松偃蹇して背後の赤松林と相對し。翠色江の内外に映じて一段の風趣を添へ。眺望壯濶。頗る山水の勝に富みたり

海水浴場。はかゝる秀麗の地位を占めて洲鼻に建設せられたり。このところ海水極めて清澄。潮流の陳謝よく其度に適し。靜養頗る驗あり。夏時避暑をかね。茲に入浴せる輩尠なからず

〔右浴場は毎年舊曆六月中旬より。八月中旬まで數日間開設するの例なるが。一人前金四錢にて終日入浴することを得るの例とせり〕

長濱神社。同濱にあり。嚴島神社の攝社にして。興津彦命、興津姫命

を祭り。相殿に所翁を祀れり

要害山公園

要害山公園は市街の東北端に横たはれる一の岡巒にして。西及北の両面は海を隔て、沿海の諸山に對し。南は東部の市街を下瞰し。また高く御山の翠色を仰ぐべし。岡上には拾餘種の老松矯々として凌霄摩雲の狀勢を呈し。頗る眺矚に富みたり

今の要害山一圓は天文弘治の昔毛利元就が陶晴賢（全姜）を討滅せんとするに當り。敵を死地に陥れ。一時に勝敗を決せんとの躊躇より特にこの島に渡り。此處に於て最初に些壘を築きたる宮尾城の舊跡にして。天文二十四年五月下旬工を起して經營晝夜を重ね。翌年即ち弘治元年の夏に至りて功を竣へ。之に己斐豊後守同五郎兵衛及新里掃部介を部將として精兵三百騎を附し。守備を嚴にして敵を誘致せしめたる城墟たりしなり。要害の稱は此時より起れりといふ。

此岡に

今伊勢神社。あり。天照皇大神、八幡大神、素盞鳴尊、興津彦命、興

津姫命、春日大神を合祀し。相殿に大織冠鎌足公の靈を祀れり

存光寺。禪宗の寺院にして。要害山の麓宇伊勢町にあり

寶物の主要なるもの

一 觀音像。巨勢金岡筆 一 善道大師像。雪舟筆

一 不動明王像。弘法大師作

一 毘沙門天立像。智證大師作

一 白河法皇御宸翰。 一地藏尊像。弘法大師作

一 二位尼時子像。作者未詳

谷ヶ原公園。紅葉谷公園の東隣にあり。谷ヶ原の麋鹿は古八景の一

れども。今や昔の面影を改めたり。同園平原の景は見るに足らずと

雖も。山上の經營其當を得ば又一一大勝地たるを失はず。當園は面積

一萬八千二十坪を有せり

なく鹿のこゑは秋なるやつか原

をかべの松はときはなからに

風早實積

雨餘豐草滿原春。水綠沙明境自眞

麋鹿知無羅網患。呦々不敢避遊人

寺田臨川

鳥居松公園。園の中央に當り。數百年の歲月を経たる二株の松樹並び

立ちて。鳥居の如き形を爲せるか故に鳥居松の稱は起れるなり。本

園は字中の町の背部に位せる岡巒にして。眺望の勝に富めり。此邊

櫻樹多く。陽春三四月の交に當りては。市中の老若男女。此園に來

りて觀花の宴を張り。陶然として鬱を散ずるの輩尠なからず

かたるともあやはつくさんなかくに

この鳥山のはるのけしきを

釋全宗

うちかすむこのしま山のさくら花

なかにあかぬはるの海面 長吉

稱名庵。淨土宗の庵寺にして。鳥居松公園の麓にあり

瀧の尾公園。鳥居松公園の東方に位し。櫻花を以て顯はる。園内に不

動明王堂及細布の瀧あり。當園より鳥居松公園を経て。谷ヶ原公園

に通ずる新設道路あり

當園より西鳥居松まで三町。谷ヶ原まで五町。紅葉谷まで七町半 東梅

林及金石地藏まで二町。長濱まで四町半

寶壽院。本尊阿彌陀如來

眞言宗京都仁和寺派にして。其創立は天慶年中にありといふ。降つ

て文安の頃。高野の學侶宥順上人天奏を経。堂宇を再建せしを以て

中興の祖と爲す。宥順より十九世を経。以て現住職上見法龍に至れ

るなり

寶物の主要なるもの

一 藥師如來畫像。明の嘉靖四十四年。聖烈仁明帝畫工に命じて畫かしめ玉

へる物なるを。豊臣秀吉征韓の時傳來し。故ありて當寺

に寄附せられたるものなりといふ

一 歡喜天皇肖像。作者未詳

一 不動明王畫像。弘法大師筆

一 三尊阿彌陀。惠心僧都筆

一 五大尊畫像。唐人筆

瀧見岩。平面なる拾坪餘りの大磐石にして。瀧の宮神社の前石段道の傍にあり。これ治承四年三月高倉天皇當島へ行幸の際。此岩上に於て白糸の瀧を觀覽ありしより其名起れりといふ。其時曼珠院法親王の詠じ玉ひし和歌あり。曰く。やまたかみ登ればのぼる春の日にくりかへし見る白糸の瀧

紅葉溪公園

嚴島神社の半面を環流せる御手洗川を遡り。南町の南端山勢の頓挫してうち開けたる處。御山山顚の一面より流下せる清流。南溪の幽谷を貫きて來たり泓然として一區の清澄を作り。楓樹松樹櫻樹の老幹參差幹を交へて此清流を蓋ひ。奇岩怪岩は溪の両脚に出没して苔蘇色濃かに。涼亭拾餘區川の中外に峙ちて瀟洒畫けるが如く。溪邊殊に楓樹に富み。汀邊低く柯をたれて澄水に影をやどし。玉露紅をそめて愁ふる楓葉の秋に至りては。千紫萬紅。點々深き緑の間を綴りて一種錦繡の境をつくり。頗る清婉なる風趣を呈せり。若それ炎威燬くが如き三伏の候にあたり。遠く南溪の幽谷より澗底の清流を逐ふて絶へ間なく吹き來たれる涼氣は。又當園の特色にしてまことに塵襟を拂ふに足れり。かゝる境内に位置を占めて顧客を迎ふるもの。これを旅館岩惣と爲す

此是、靖州三勝、一。神明護得幾千秋

滿溪、紅葉畫圖裡。一道、鳴泉繞屋流

丹楓蔭冷水奔流。臨、水家々起小樓

谷干城

想得、絃歌人散後。數聲、鳴鹿滿山秋

木原桑宅

紅葉谷公園より西の方へ大聖院遺跡まで六町。瀧の宮まで七町半。白糸の

瀧まで九町。多寶塔まで六町半。經納山（清盛山）

まで八町半弱。大元公園まで十町

同 園より東の方へ谷ヶ原公園まで一町半。鳥居松公園まで四町半

瀧の尾公園まで七町半。梅林及金石地藏まで九町

半 長濱公園まで十二町

光明院。字大町の岡天狗山の麓にあり。淨土宗智恩院末にして。本尊

は阿彌陀如來の立像（惠心僧都の作）とす。當院は土地高燥にして

清潔。座上より山海の景色を望み得べし

（當院の開基は以上八上人（慶長時代）にして頗る英才あり。二世辨西能く其志を繼ぎて堂宇を開擴し。十四世素信（元文時代）十五世恕信（寛延時代）共に德望あり。中興の祖と稱せらる。十八世學信（寛政時代）又法器の聞へ高く。爾後現住職荒谷隆徳に至るまで。二十六世法燈連綿たり而して現時有する所の檀徒の戸數三百二十戸に及べり。當院に於ける國寶及寶物の主要なるもの左の如し

國寶

一 阿彌陀如來立像

へ金泥塗切金模様にして甚だ優美なり。御丈一尺六寸

五分。作者未詳なれどもなか／＼の傑作なり

一 來迎彌陀如來

へ御丈二尺七寸。絹地金泥彩色の畫幅にして。頗る古色を帶びたり。惠心僧都の眞筆なり

回祿ノ災ニ罹リ。爾來幾多ノ歲月ヲ經ルモ。再興未ダ其緒ニ就カズ。空シク趾跡ヲ存スルノミナルハ。斯ル勝地ノ一大欽典トシテ衆庶ノ最モ遺憾トスル所ナリ。今回 殿下親シク該院ヘ臨マセラレ。御歎惜ノ餘。貴納ヘ舊觀復興ヲ御至囑遊バサレタリ。貴納宜シク恩命ノ辱キヲ拜戴シ。盡碎自ラ任ジ。速カニ復興ノ實ヲ擧ゲ。以テ優渥ナル御令旨ニ奉答アラシコトヲ。殿下ノ命ヲ稟テ特ニ申進候

明治三十四年一月十六日 小松宮家令丹羽龍之助

明尾快雄殿

〔豐臣秀吉公當島ヘ參詣の際。當院に於て和歌の御會あり。之に倍席せるもの義近以下三十五人。三十六詠あり。今其數首を録ス〕

き、しよりなかめにあかぬ嚴島

みせばやと思ふ雲の上人

ことの葉もよばぬ春の海山を

君がながめとなしておくらん

行舟もきみがみゆきのをりを得て

波もしづけき春の宮島

春ごとのころしもたえぬ山櫻

よもきかしまのこゝちこそすれ

名も高き宮居はるかに來て見れば

かすみのすゑのおきつ白波

關白秀吉

義近朝臣

長盛

三成

太一坊

瀧の宮公園

瀧の宮公園は御山の麓にあり。園内頗る喬木に富み。松杉檜樅榎等の老幹古木參差枝を交へて空を蓋ひ。御山の前半面より直下せる清流はこの間を貫流して景を添へ。頗る幽邃の趣を極む。園内に大聖院遺跡、大師堂、瀧の宮神社、火消不動堂、白糸の瀧布等あり

白糸の瀧。は瀧宮神社の背面にあり。其瀧の漲り落つるさま。千條の白糸を亂せるが如きを以て此稱あり。こゝに會したるの清螢。灌莽喬樹の間に散点せる奇岩怪礁に觸れて曲折流下し。御手洗川に會して止む

瀧宮神社。嚴島神社の末社にして。湍津姫命を祀れり。夏の夜に當り。

この宮の附近を流る、溪水に添ふて。深緑叢中に映ずる無數の螢火は。一種の奇觀にして。古人の八景に數へたる所なりとす

瀧の宮の水螢（嚴島八景の一）

森々緑樹邊^ニ宮邊^ニ。南岳懸^テ雲吐^キ立泉^ニ。

萬點水螢三伏夕。涼風亂^レ影似^ク秋天^ニ。

潤陰古廟倚^ニ葱籠^ニ。自^レ是幽人避暑宮^ニ。

晚映^ニ水簾^ニ螢火影^ニ。輕和^{シテ}濺沫^ニ逐^テ微風^ニ。

この宮の光そへてやよひくの

ほたるも瀧の玉とみだる、

瀧の糸はぬきもとめず玉垣の

たまとみだれて螢とびかふ

なかめにあかぬはるの海面

禪高

多寶塔。一に二重塔と稱す。多寶の岡にあり。建物方二間半。高さ相輪頂まで四十二尺四寸五分。大永三年六月多寶院開山歡公知藏禪師の創建にかゝるといふ。本尊は元藥師如來の像を安置せしが。維新の後これを他に移して清正公の靈を祀り寶山神社と稱す。本塔は明治三十四年八月を以て。内務省より特別保護建造物に編入せられたり

〔本塔建物の古雅にして優秀なる。全國又稀に見るところ。大永時代の建物としては稚きの感あり（大永三年は今を去ること三百八十一年なり）

此地は弘治元年九月毛利氏陶氏と合戦の時。陶氏が陣營を設けたる一部の地にしてこの山脊を登ること七町にして。出城の舊跡に達することを得べし〕

出城。出城は弘治の昔。陶氏が駒ケ林の天險と連絡して。砦壘を設けたる舊跡にして。多寶の岡より駒ケ林に達する中間の要衝に當れり。此地市街及附近公園の全景を脚下に俯瞰し。又海を隔て、遙に近村の諸山を望み。眺望愛すべし。是より山背に添ふて登ること十餘町にして。駒ケ林の舊跡に達す〔駒ケ林の件は御山の部に詳かなり〕

大聖院遺跡。御山の麓瀧の宮公園に接したる高原にあり。瀧山水精寺大聖院と稱し。眞言宗とす。世々嚴島神社の別當職に任し。全島第一の巨利と門閥とを以て有名なり。世に座主と稱し西の御室と稱するものはなり。

〔當院の開基は其年曆頗る古きも。數度の回祿によりて其所傳を詳にする能はず。然れども大同元年弘法大師御山開基前後に於て。本院の創設せられたることは明かなり。降て治承四年高倉帝行幸記に。當時の住職尊叙を以て。座主阿闍利に爲し玉ふ云々とあり。又中興の開山は日輪上人にして。法器の聞へ高き學匠なりしといふ。天正中仁助法親王止住あらせ玉ひしより。仁和寺院家の任を世々にし。西の御室と稱するに至りしなり。仁助法親王の薨去は天正十二年十一月二十九日にして。其御廟所は御遺言により。對岸の大野村字赤崎に葬り奉りしが。今の宮島驛西端に存するものはなり。明治十八年七月。今上天皇陛下當町へ行幸あらせらるゝや。當院を以て行在所に遊ばされたり

當院は境内一千七百二十坪餘を有し。四邊鬱然。頗る絶壁の淨境なりしにも拘はらず。明治二十年十二月不幸にして視融の災にかゝり。本島唯一の巨利は一朝にして灰塵となり。歴代の重寶古書等盡く烏有に歸し。千古の名利。今はたゞ其礎石の落々たるを認むるのみ

明治三十四年一月。故小松宮殿下當町に御來島遊ばせらるゝや。親しく本院の遺跡に臨ませられ。御歎惜の餘。現住職明尾僧都に對し。左の御令旨をたまはりたり

御令旨寫

宮島大聖院ハ古來西の御室ト稱シ。勅願ノ道場ニシテ。仁和寺門跡ト深キ由緒ヲ有セリ。故ニ歴代。皇族ノ移住アラセラル、モ多ク。又屢々行在所ニ充テラル、等。帝國著名ノ靈刹ナルコトハ今更言ヲ待タス。然ルニ一朝

如く。危橋亭樹この間を縫ふて趣を添へ。以て四季の遊客を迎ふ。これを旅館白雲洞と爲す。大元の櫻花は嚴島八景の一にして古人の吟詠に現はれたるもの尠なからず。石風呂の前より木比屋谷の平曠をよぎり。大元神社の神地内外百樹春色を迎へて黄鳥縦に嬌音を競ひ。花香雲影遠近相應じて大元灣中に蘸するの景は一入の美觀にして。他に匹儔を見ざる所なりとす。加ふるに此地塵喧の外に卓絶して最も閑静を極め。氣清く地靈に。緩遊の間自ら仙實にあるの思ひならしむ

社下、白櫻交影深。濃雲淡靄共森々

三春花時無多日。坐愛千金一刻陰

北村篤所

祠在仙山蒼波濱。白櫻相映滿階春

雲蒸霞散常彷彿。一段風流仰此神

從二位韶光

うらとほみよる舟まねく尾花かな

宗碩

いとまなき日ばかり花はさきにけり

鳳朗

大元や拜むも見るもはつざくら

鳳律

大元神社。數百年を経たる樅樹杉樹の喬々として天に參はる樹林中に森然として聳ゆるものを大元神社となす。嚴島神社の攝社にして其創建本社と同時代ならんといふ。祭神は國常立尊、大山祇神にして。相殿には佐伯鞍職を祀れり。當社の境内は一千五百九十八坪を有し。周圍は即ち大元公園なり

境内に時雨の櫻あり。社前の山を橘山と稱し。この邊一帯を稱して麓の森といふ。杜鵑を聴くの勝地たり。在原業平の歌に曰く。五月

雨にたちなば山のほとゝぎすふもとの森によなくぞなく。と以て其由來するところ久しきを察すべきなり

大元公園より（木比屋谷公園まで一町。經納山（清盛山）まで二町半多

寶塔まで三町四十間。大聖院遺跡まで七町。瀧の宮神社ま

で八町半。白糸の瀧まで九町。公園道を通り紅葉谷公園ま

で十町

又同園より奥（富士岩まで七町半強。繪馬岩麓まで十七町弱。岩屋大師ま

で十七町弱。御劍岩まで十九町強。駒ケ林まで二十二町半強。

御山三門まで二十二町強。御山本堂まで二十四町強

經納山。一に清盛山と稱す。字大西町の西側にある小岳にして。大元

公園に往復する山道の支線に當れり。此地は往昔平清盛土中を掘り

て經卷を納め。且つ許多の小石に法華經の首題を書して埋めたる古

跡にして。現存せる北端の石塔は清盛塚と稱し。清盛の靈を祀れる

なり。又塔の背部にある石燈籠一基は。平氏の臣難波六郎より奉納

せる所なりといふ

消盡當年威焰々。寶塔三尺萎苔青。

寂々千古無人中。空使松聲演法經。

清處

近年此丘の最も高きところに一の私設休憩所を構へ。茶を煮て遊客を迎ふ。之を見はらしと稱す。頗る山海の眺に富み。眞に見はらしの名に背かず

くるゝともいかでかへらむ島山の

寺傳弘法大師作

一釋迦如來坐像 〈御丈二尺八寸余膝張二尺二分余〉

寺傳行基菩薩作

一阿難尊者立像 〈高三尺一寸余幅九寸九分余〉

寺傳毘首羯麻作

一迦葉尊者立像 〈高三尺一寸余幅九寸六分余〉

寺傳毘首羯麻作

寶物

一龜居山記 桐箱入一卷

〈右は寛文の頃。當寺の住職以空大僧正。靈元天皇へ拜謁の際。天皇より拜受せし所の宸翰にして。書中嚴島神社に關する秘事等記載あり。院主の外堅く見ることを禁ぜり〉

一瀟湘八景野立屏風 八枚折壹雙 〈高三尺四寸六分幅一尺八寸七分〉

〈右は當寺の住職尊海上人。大藏經を得んか爲に。大内義隆の紹介により。渡韓の際。請ひ得て携へ歸りたるものなりといふ〉

一豊公陣中枕屏風 貳枚折 〈三十六歌仙 光信筆 鹿の繪 光正筆〉

一梵鐘。鐵製 〈徑八寸五厘高一尺二寸八分〉 〈銘に允曉庵小鐘とあり。豊公征韓の役分捕せし所なりといふ〉

一酒壺。 〈一名吸筒〉 全上

〈以上三品は豊臣秀吉公の寄附にかゝるといふ〉

一兩界曼荼羅。 貳幅 興教大師覺錢上人筆

一大釜 鐵製 〈徑三尺七寸深二尺七寸〉

〈此大釜は往昔南町に設けたる大風呂に用ひたるものにて。嚴島神社に奉仕せる。杜家供僧の潔齋を爲す用に供したるものなりといふ。これに附隨せ

る横石堅石あり。横石は平清盛の寄附にかゝり。堅石は毛利元就の寄附にかゝり

以上の外同寺に安置せられたる阿彌陀如來坐像。弘法大師の像〈大師自刻〉如意輪觀音坐像〈行基の作〉二王像〈作者未詳〉等。又凡作にあらざるなり

住吉神社。同寺の傍にあり。祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命の三座にして。これ元龜二年吉田兼右卿の勸請せられたる所なりといふ

石風呂。大元神社に行く道の傍にあり。石を築きて造りなせる蒸風呂にして。古昔御山にて求聞持修行の僧徒風濕の氣に悩めるものを癒へしめんが爲に弘法大師の築かせ玉ひしものなりといふ

木比屋谷公園。大元公園の東隣にあり。園内には拱木枝を錯へて天碧を陰翳し。閑靜なる一佳境なり

大元公園

市街の西端を距ること三町餘の處にあり。東西の両側は蓊鬱たる岡巒に接し。北は渺茫たる滄海を隔て、遠山を銜み。又近く有の浦より米ヶ浦に到るの沿岸翠岱と相對せり。南は平遠幽邃にして溪谷深く展開し。遙に雲中に聳ゆる繪馬ヶ岳の絶壁を仰ぐべし。この絶壁より滴るところの清水木の根岩が根を潜りくゞりて大元神社の背面に出で。白雲洞の前を抄めて海にそゞ。之を大元川と爲す。其水極めて清冽。淙々として奇岩碧樹の間を流れ。潏然として溪流となり。泓然として池の

當日豪華今已盡。沐猴獨戲落花風。

木原桑宅

月夜書千疊閣梁上

山高星落夜無人。踏閣垂臨碧海濱。
風靜仙娥波上舞。輕々移步轍生塵。
山々のかすみのひまにちりてくる

清人劉之高

花かあらぬか見ゆるしらなみ

堯熙

またこんと誰にもえこそいひをかじ

心にかなふいのちならねば

塙團右衛門直之

五層塔。俗に五重塔と稱す。千疊閣と相並びて龜居山の東端にあり。

建物方二間半。高さ相輪頂まで九十一尺一寸。應永十四年七月の建立にかゝれり。境内には元釋迦如來及び脇士普賢並に文殊菩薩の像を安んじたりしが。維新の後これを他に移せり。内國に於て五層塔の建築せられたるもの尠なからずと雖も。本塔の如く優秀なるものは稀なりとす。是何人の建築なるを詳にせず。一書に御奈良院の御宇。天文元年將軍義晴建立云々の事見えたり。天文元年は今より三百七十二年前に當り。應永十四年は今より四百九十七年前に當れり。而して千疊閣の建築は文祿年中なるを以て。今より三百十餘年前なること明なり。

廣島縣壯兵殉難碑。龜居山の西端にあり。明治十年西南の役に於ける本縣千人隊の忠勇紀念碑にして。腔血報國と大書せる下。諸士忠勇戰死の狀況を誌すること詳かなり。碑文は陸軍中將谷干城の撰にして。賴元啓の書に成れり。

第二編

嚴島市街及其附近に於ける名勝舊蹟

有の浦。今の東部市街大半の地は古の所謂有の浦の埋立地にして。嚴島八景の一たり。今や昔の面影を改めたりと雖も。元天然の風趣を有したる海濱なりしこと推察せらるゝなり

つなぎよるたよりや有の浦なみに

とまり定むる船ぞかずそふ

參議公長

群帆落日向千山。繫纜翠巖碧石灣。

借問東西南北客。夢魂應不至人間。

僧獨麟

尼洲。一に二位の洲といふ。今の海岸通一町目邊に當れり。壽永の昔長門檀の浦にて源平の戦に。二位の尼安德天皇を抱き奉り海底に投ぜしに。其尸此洲に漂着せりといひ傳ふるものはなり

大願寺。龜居山本願大願寺と稱し。西京大覺寺派に屬せり。元眞言宗の古義派にしてその開基頗る古く。年曆久遠にして考ふべからず。現代の院主松峯光典より四十六世の祖。榮繁上人（文治年間）を以て中興の祖と爲す。本尊は弘法大師の作藥師如來の像にして。其他釋迦如來、阿彌陀如來、如意輪觀音、阿難迦葉兩尊者及弘法大師等の像を祀れり。當寺は元嚴島神社修理造營の掌にして。大聖院の次きたる門閥たり。現有寶物の主要なるもの左の如し

國寶

一 當寺本尊 藥師如來坐像（御丈一尺四寸余幅一尺一寸余）

協會に於て建設し。後嚴島神社に寄附したるなり。爾後専ら神社寶物の一部を陳列し。以て衆庶の縦覧を許せり

寶庫。筋違橋附近にあり。其構造は畦庫作と稱するものにして。頗る堅牢なるものなりといふ。嚴島神社の重寶珍器等舉つて本庫に藏めたり

文庫。千疊閣の南の下にあり。本社 of 書籍を納む

御衣裳藏。本社 of 裏手にあり。神能用の衣裳を納む

御廄。東廻廊口の前にあり。本社 of 神馬をつなぎある處なり

三翁神社。寶物館の東にあり。祭神は佐伯鞍職、所翁、岩木翁の三翁にして。相殿に大己貴命、平清盛を祀れり。御殿三棟にしていづれも七尺二寸四方。拜殿桁行六間一尺梁行五間餘にして前に金鳥居あり本社 of 攝社にして例祭は九月二十三日とす

御花島。御本社西部廻廊の背面。御手洗川に沿ひたる一條の堤防をいふ。堤の両側に櫻樹數十株ありて。三春の花月に富めり

芳野嵐山世久聞。誰知此地獨超群

蓬萊宮裏花千樹。穿去一雲又一雲

賴杏坪

花のはるあきのみや島來て見れば

なほ一しほの月の夕暮

道茂

御幸松。承安四年三月。後白河法皇當島へ御臨幸の際。此處に行宮を設け玉ひし紀念として植附たる松樹。幾多の歳月を経。數圍の巨木となりしが。今や朽腐して丈餘の根幹を存し。なほ當代の事蹟を追

懷せしむ

千疊閣。元大經堂と稱し又俗に千疊敷と稱ふ。市街の中央なる龜居山の岡にあり。梁間十間五尺桁行二十間棟高五十八尺椽幅八尺にして四方に欄干を設けたり。是豐臣秀吉公朝鮮征伐の際。九州名古屋城に出陣の途次。嚴島神社に賽して大神の冥助を祈り。凱旋の後。文祿年中毛利輝元及安國寺惠瓊に命じて建設せしめられたる所にして。この堂には元釋迦如來の立像及脇土阿難迦葉の彫像を合祀せしが。維新後之を大願寺に移し。以て豐公の神祠を安じたるなり

始め此山上には楠の大樹ありて高く漢に秀で。鬱々として一山を蓋ひたりしが。秀吉伐て以て夫の有名なる安宅丸新造の用材に供し。其餘材を以て此跡に大經堂を建營するの資材に補したりといふ

當閣の建築は宏壯にして雄偉。淡泊にして豁大。東西南北一点の隔壁を設けず。遠近山海の眺矚踞して雙眸に収むるを得べく。座して塵襟を一掃するを得べし。三百拾餘年後の今日偉人の氣宇を代表して巍々青空の風塵を拂ひ。永く天下の公堂として克く億兆の衆を容れ。緩遊の間自ら當代の英風を追懷せしむ

（因に記す。明治三十四年八月十五日當閣に於て。廣島山口岡山及島根四縣聯合凱旋祝賀會を開催せらるゝや。名譽ある陸海軍人將校有志のこの會に會するもの八百十餘人。豐公征韓の役凱旋を去ること。正に三百十餘年にして。始めて此光輝ある盛典を擧げたるなり）

千人閣上憶「豐公」。曾宴群雄酌戰功

一泓寒碧傍靈祠。淨似菱花可鑑眉

最是清秋明月夜。其如漢帝影娥池

僧獨麟

三笠濱 元大神の鎮ります灣内の総稱なりしも。何時の頃よりか。主として御手洗川々口なる。松原の鼻一帯の海濱を以て三笠濱と稱するに至れり。此邊老松翠鬱として生ひ茂れるのみならず。右は本社殿廊に連なり。左は大元公園の翠色をひかへ。前は海を隔て、遙に佐伯郡沿海の諸山を迎へつゝ。海中に巍々たる大華表を望み。眺望頗る絶麗なり。殊に月の景色甚だよろしく。雪景又一段の佳趣あり

三笠濱鋪雪（嚴島八景の一）

ふりにけり三笠の濱の松が枝に

いく千代かけし雪のしらゆふ

東皐

誰もみな家路わすれてきてぞ見る

三笠の濱の雪の夕ぐれ

美静

白雪重々御笠濱。平沙十里更清新

夜來最覺好風色。寒月和光同玉塵

菅原在廉

風糝飛花堆笠濱。漁夫轉棹却迷津

雲林煙塢渾一色。更訝波神撒玉塵

黃壁百泉

康賴卒堵婆の趾。御本殿の東側なる揚水橋の下にあり。治承元年平判官康賴。清盛の逆怒に觸れ。法勝寺入道俊寛及丹波少將藤原成經と共に。鬼界ヶ島に謫せらるゝや。都に残りたる老母を懷ひ。故郷を

戀ふの餘り

さつまがた沖の小島にわれありと

親には告げよ八重のしほ風

おもひやれしばしと思ふ旅だにも

なほふる郷はこひしきものを

といふ二首の歌に。康賴法師の銘をも併せ彫りたる卒堵婆を作り。日々作り得らるゝに隨ひ。風のたよりに任せ。祈願をこめて之を流し。流したる卒堵婆の數終に千本に達しけるが。其内一本此處の石に漂着しけり。折節康賴に縁故ある京師の僧侶。康賴を慕ふの餘西國修業を思ひたち。機を得て鬼界ヶ島にも渡り。其音信を探らんと志し。此島にわたり嚴島神社に祈願してありけるが。漂着せる卒堵婆を見て感涙に堪へず。即ちこれを神官に請じ。直ちに携へて京師に上り。康賴の老母に達し。法皇の觀覽に供しければ。法皇其志を慰ませ玉ひ。清盛又以て神慮のある所となし。遂に康賴を赦して都へ歸されけるとなん

康賴の石燈籠。卒堵婆の漂着したる岸の上に建設せられたり。臺石より寶珠まで高さ九尺餘。佛像雲龍等の彫刻を施され。古色を帯びて風韻あり。これ康賴赦されて歸郷せし後。奉賽せる所にかゝるといふ

寶物陳列館。梁行六間桁行十二間の建物にして。本社背部御垣ヶ原にあり。これ明治二十八年第四回内國勸業博覽會開設に際し。賛同

一還城樂

一陵王

一納曾利

一散手

一貴徳

一採桑老

一二の舞笑面

一二の舞瞞面

以上九品。何れも皆古來本社の舞樂に用ゐ來たれるものにて。實に木彫の逸品なり

本社の実物

本社の実物は以上に列記したる國寶の外。夫の三種の神器に亞ぎて朝廷の至寶たりし。玄上の琵琶及高倉帝の愛翫し玉ひたる小櫻笙を始とし。刀劔甲冑古書畫等の類枚舉に遑あらざれども。今茲に掲載するの餘地なきを以て之を畧す

本社の繪馬

本社廻廊及殿内に掲額せられたる繪馬の數は。無慮一千餘点の多きに達し。是れ皆數百年來信者の奉獻せしところにかゝり。小は方尺位より大は疊五六疊大の積を有し。繪くところ山水花鳥人物樓閣草木什器動植文書及歴史上の事實等。殆んど網羅せざる所なく。而して之れが筆跡の錚々たるもの其一班を舉ぐれば。

雪舟あり。元信、常信、永徳あり。兆殿司あり。應舉あり。文晁あり。蘆雪、景文、東洋、應震、岷山あり。祖仙あり。梅山あり。素絢、抱一、峻峯あり。宋紫石あり。米菴あり。士式、丈山、春水あり。恰も百花碗を競ひ。群芳秀を爭ふの觀あり。是れ神社の額面としては帝國内無比の大觀を極むるもの。一大美術館に入るの感あり。

大修繕後の殿廊内には建築物保管上の都合によりて。之を掲額することを得ざるにより。千疊閣を修繕して。其大部分を掲額するの豫定なりといふ

社頭明燈（嚴島八景の二）

ところからたつの宮居もうかぶかと

見えてつらなる浪のともしび

似雲法師

波間より見えて數あるともし火に

宮居もしるしいつくしま山

梅月堂宣阿

嚴島雲晴飛「繡覺」。宮廊壯觀壓「西瀛」

神燈波面幾千點。添着和光夜々明

二品親王堯延

好山朶々鏡中看。百尺樓臺海氣寒

夜有「神燈」光映「波」。却疑星斗落「欄干」

黄檗悅峯

一鏡池 客神社と朝座屋との間にありて。干潮の際。洲上別に一小池

を爲せり

鏡池秋月（嚴島八景の二）

ところから月もかゝみの池の名を

見せてや秋のかげみがくらん

羽林雅季

みやしろにかくる光も曇なき

かゝみの池にすめる月影

宣阿

海門、靈跡甲西洲。嚴島佳名千古悠

多少、行人富觀賞。瑤池明月鏡池秋

三位藤原宣通

一 安德帝御玩具 六種八點

御産着。御笏。御飾太刀。御石帶。御箆。御檜扇三本

一 松喰鶴蒔繪小辛櫃 〔竪八寸、横一尺五分 深五寸五分、足二寸〕

安德帝の御産着を納めまゐらす所にして。黒塗蒔繪松喰鶴の金銀模様あり。中宮國司從四位佐伯景弘朝臣の調進せるところとす

一文晝硯。 大内義隆の奉納せる所なり

一 奚囊。〔胴の廻り二尺三寸九分、高六寸五分 皮亘り四寸五分紫絹緒〕

朝廷よりの御寄進也

一 鑿。 胴及皮金地極彩色にして古色あり。又朝廷の御寄進なり

一 琴。 平重衡の愛翫せる所にして。唐の雷家の作なりといふ

一 佛器。〔獨鉢。三鉢。五鉢鈴。金剛盤〕 弘法大師の所持品なりといふ

一 大鳥居扁額

後奈良帝の御染筆にして。大内義隆の奉納にかゝれり

一 紙本墨書御判物帖 壹綴

本社のお神領寄進狀及制令等。眞筆にかゝる古書類を集綴せしものなり

一 檜扇。 平氏の奉納せる所なり

一 赤梅櫃佛像。 箱入

佛像二十一體の精巧なる彫刻にして。毘首羯摩の作なりといふ。納むる所の箱黒漆塗堅地にして。模様は優美なる金金具とす。印度又は支那古代のものならんといふ

一 狛犬 拾八軀

拾八軀各皆其狀貌を異にす。此類の彫刻品にては全國無比の逸品なりといふ。其高さ概ね二尺内外にして。長さ一尺八九寸の間にあり。元社殿内に安置せしものなり

一 唐鞍飾馬 壹軀 同上

一金梨地螺鈿飾太刀。二振 〔大 中身長一尺五寸一分五厘 小 同一尺一寸五分〕

一 螺鈿飾太刀 中身長二尺二寸九分

一 藤卷太刀 中身長二尺四寸九分五厘。毛利輝元寄附

一 兵庫鎖太刀 中身長二尺一寸九分五厘。久明親王寄附

一 兵庫鎖太刀 中身長二尺一分。惟康親王寄附

一 兵庫鎖太刀 中身長一尺八寸七分五厘

一 兵庫鎖太刀 中身長二尺九寸六分。將軍政所寄進

一 嚴物造太刀 中身長二尺二寸 將軍賴嗣寄附

一 足利尊氏短刀 中身長七寸九分五厘。足利尊氏寄附

一 同尊氏短刀箱 壹個

一 拔頭面 壹面

今を去ること七百卅四年前。承安の頃より用ひ來たれるものなり。この面は當地神官野坂家古來相傳舞樂の秘曲にして。毎年正月五日禁裡御祈禱の際。用ゆること古例なりしといふ。これ承安三年政所の寄附にかゝり。寛政八年には天覽に供し。叡慮の書狀あり

- 一 二月上旬未申日御鎮座祭あり
- 一 三月十七日靈神祭并に講社安全祭あり
- 一 五月十五日講社島廻式あり
- 一 九月十五日菊花祭舞樂あり
- 一 九月十七日靈神祭并に講社安全祭あり
- 一 十月十五日講社島廻式あり
- 一 十一月初申の夜御鎮座祭あり
- 一 十二月卅一日大祓祭あり

本社の國寶（百〇二點）

一 平家一門書寫經卷 三十三卷

平氏の一門清盛以下三十二人の公達が數年の歲月を費やし。各精神をこめて手づから左記の諸經文を書寫し。以て本社に奉納せし所に
かゝり。是實に本社寶物中の白眉と稱せらるゝものなり。〔經卷の紙中には佛畫其他奇異の模様あり着色善美を盡し軸は多く水晶なり其優美なる又言説する能はざるものあり〕

- 一 法華經 各編 二十八卷 一無量義經 一卷
- 一 觀普賢經 一卷 一 阿彌陀經 一卷
- 一 般若經 一卷 一 清盛願文 一卷

一 平家納經圖 〔竪二尺二寸四分、横九寸六分 總高七寸八分、臺高二寸二分〕
銅製臺附三重ニグロメにして。金銀を鏤めたる雲龍五輪等を置金物

とし。其製作いと優美巧妙なり。これ前顯三十三卷の經卷を納めたる内函にして。平家の奉納にかゝれり

一 平家納經萬壽繪唐櫃 〔竪一尺四寸六分、横一尺七寸八分 深一尺五分、蓋深二寸五分〕

黒塗模様桐葉金蒔繪にして。金物は総て金やきつけいと美麗なり。
同上經卷の外箱にして。福島正則の寄附にかゝれり

一 法華經七卷 箱入

平清盛及弟賴盛の両筆なり

一 納經箱 一個

光明皇后御筆法華經八卷を納めたり

一 平重盛甲冑 一領

製作質樸にして堅牢なり。公の用ゐられたる所なりといふ

一 新羅三郎義光甲冑 一領

武田氏累代の重寶にして。大内義隆の奉納にかゝれり

一 小櫻威甲冑 一領

なか／＼の尤物。千載の逸品なりといふ

一 大内義隆甲冑 一領

南都の人春太光信の作にして。大内義隆の奉納せるところ

一 高倉帝御扇 一本

扇面の歌は久我通親卿の手跡にして。高倉帝本島へ行幸の際納め玉ひし所なり

陵王、一曲、延喜樂、貴德、納曾利等の舞樂を演ずること古例なり。翌十六日より十八日まで三日間能舞臺に於て神能の執行あり古來神聖なる祭典の一として嚴正に執行せられたり。殊に其衣裝は大内家毛利家淺野家より奉納せられたるものとて。其錦繡綾羅の類現代製品の及ぶべからざる逸品尠ならずといふ

管絃祭。陰曆六月十七日之を行ふ。本社年中の大祭にして。其盛大なること關西第一の祭事と稱せらる。この祭典は新造船三艘を組み合せ。其上に御座を設けて屋形を構へ。周圍に幕を張り。艦の方には神鏡を懸け。舳の方には寶劍玉鉾を建て。又屋形の周圍には提燈數十個を釣り。中央に神輿を載せ奉り。而して神官其左右背後に列座し。水主に至るまで烏帽子を冠り素袍袴にて各棹をとり。篝火を焚き。其儀裝いと壯嚴優美なり。又引船三艘左右權を揃へて前にたち。御供船盛裝して其後へに隨ふ。御船は午后四時大鳥居沖より外宮なる地御前神社の廣前に渡らせ玉ひ。神事奏樂あり。終りて後歸路長濱神社及大元神社沖に於て管絃あり。是より大鳥居をくぐり客神社の前にて奏樂前の如く。後御船を本社の廣前にすゝめ。管絃を奏しつ、御船を三回めぐらして神事あり。それより本社に還御あらせらるゝの典例なりとす

當祭典數日前より參拜者及參拜者の船舶遠近各地より闊集し。殊に當夜は湊船と和船とに論なく。各船競ふて其櫓頭に幾多の紅燈を点して獻燈せるに依り。幾萬の紅燈海面を蓋ひ。頗る壯觀を極む

千百竿燈映^ス碧流^ニ。綺羅爭艷木蘭舟^ヲ

急絃豪管隨^テ潮去^ニ。散作^シ神娥洲畔秋^ノ

適處

延年祭。陰曆七月^ノ中に於て臨機時日を定めて之を行ふ。玉取延年祭と稱するもの是なり。當祭は御池の内本社前面の海中に於て。長さ三間餘の圓柱四本を方二間餘の距離内に建て。上部に横木を渡し杵の如く組み。上部に於て狭く下部に於て廣くし。四面に七五三繩をはり。而して其中央に方五尺許なる臺を釣るし。中に三寶へ載せたる寶珠即ち玉を置くなり。本社祭事の終りつる頃。此寶珠を載せたる臺を綱にて上下すれば。數百千人の壯丁裸體にて海に入り。海水中に於て其玉を爭ふ。寶珠三寶より落下するや。群集互に鯨波を擧げて之を採み合ひ。上になり下になり之を爭ふさま。其壯觀いはん方なし。而して勝敗決し。寶珠を得たるもの之を事務所に報ずるに至りて止む。世話係此報によりて直に寶珠を點檢し。御神札及寶珠の外米俵金帛等の供物を賞賜せらるゝ例なり。此寶珠を得たるものは未來の幸福を追求し。畢生の名譽とせるなり。此日祭事を見んとて各地より群集せるもの恰も堵の如し

右の外なほ左記の御祭典あり

一月二日一の祭舞樂あり

一月三日三の祭舞樂あり

一月四日斧始式あり

一月五日地久節舞樂あり

水は潮兮山は島。山光相映落波瀾。
不離當處神仙境。百八廻廊一社壇。
釋自休
後青山兮前水濱。德輝嚴島大明神

今宵有心萬燈闌。百八廻廊月一輪
天下名區市杵島。仙查況問月花秋
龍燈光失海心火。蜃氣象鮮波上樓
留急神鴉鴉欲下。砂明瑞鹿曉猶遊
人間伊境眞難得。應向廣寒宮裏求。
賴杏坪

本社の祭事

嚴島神社の御祭事中最も盛大なるは管絃祭にして。これに次で
有名なるものを年越祭延年祭桃花祭及鎮火祭と爲す

年中官祭

元始祭。一月三日之を行ふ。神饌祝詞神樂及奏樂あり

祈年祭。二月中臨機時日を定めて之を行ふ。班幣縣廳に着して縣知事

又は書記官來島の上勅使奉幣式を執行し。神饌祝詞神樂及奉樂あり

例祭。六月十七日之を行ふ。奉幣使參向の儀前に同じ

大祓及鎮火祭。十二月三十一日之を行ふ

神前に於て祭典執行の後。當日午后六時より千疊閣下海岸通神地内に於て松明式あり。東西の町民より奉獻して點火せるところの大炬小炬數百本。交互東西に奔走して之を焚き頗る壯觀を極む

東西曲巷人猶鬧。百八廻廊燈未銷
半夜鐘聲報新歲。臨砂萬炬汲春潮。
登々菴
以上の外なほ左記の御祭典あり

一月一日 神饌祝詞奏樂あり。二月以下毎月一日之に準ず

一月三十日 孝明天皇祭

二月十一日 紀元節

四月三日 神武天皇祭

六月三十一日 大祓式

九月十七日 神嘗祭

十一月廿三日 新嘗祭

十一月三日 天長節 而して以上皆神饌祝詞奏樂あり

年中私祭

神衣獻上祭。毎年一月一日午前一時を期して祭典を執行せられ。宮司

御神衣を奉じて内陣に獻じ奉る。是れ太古大神が本島へ渡らせ玉ふに當り周防國和木浦に於て。先づ神衣を更め奉りたるより起りたるものなりといふ

年越祭。陰曆正月六日之を行ふ

幸福なる新年を迎へんとて遠近より參詣するもの萬を以て數ふ。此夕諸方の商人祓殿に群集し。當年出來秋の穀物豫想相場を立つるの古例なるが概ね暗合すといふ

桃花祭。陰曆三月十五日之を行ふ。桃花を獻じ曾利古、萬歲樂、散手、

一大床 幅四尺六寸

一幣殿 〈梁行二間三尺五寸桁行二間四尺七寸〉

一拜殿 〈梁行四間一尺八寸桁行十三間二尺〉

一祓殿 〈梁行五間一尺四寸桁行五間三尺五寸〉

一揚水橋 本社の東隣にあり 〈幅一間五尺長三間〉

一朝座屋 本社と客神社の間にあり 〈梁行五間一尺五寸桁行十一間

八寸〉

此處に講社事務所の設あり

一大國神社 本社の西側にあり。祭神大國主命

一天神社 祭神菅原道真公にして大國神社の西にあり

一長橋 本社の西隣にあり 〈幅一間四尺八寸長十八間〉

一反橋 長橋の西にあり 〈幅一間二尺長十一間三尺〉

一能舞臺 本社の西にあり

〈舞臺三間四面の外脇座二尺四寸地誦座九尺橋長七間幅一間樂屋

五間に三間とす〉

一行宮の遺跡。今の能舞臺邊是なり。治承四年三月高倉天皇御臨

幸の際。此處に行宮を設けさせ玉ひしと云ふ

一大華表 本社廊嘴（火燒前）を距ること八十八間。巍々として

三笠濱頭の一大偉觀を爲せり

一柱高 七間二尺五寸

一全廻 五間三尺三寸

一棟長 十二間一尺七寸

一總高 八間三尺七寸

一副柱 高四間四尺廻三間

一袖貫 長六間六寸幅二尺四寸五分厚九寸

一屋根幅 片流二間六寸額庇二尺七寸長く出づ

一上棟より軒先まで。一間六寸

一両柱左右の距離。五間五尺八寸

一扁額 竪一間二尺六寸横五尺八寸

是故有栖川二品熾仁親王殿下の御染筆にして。表裏二面あり。

表に嚴島神社。裏に伊都岐島神社とあり。また以前の額は

後奈良帝の宸筆にして大内義隆の奉納にかゝり。古代のも

のは表は小野道風裏は弘法大師の筆なりといふ

此大華表も本社創建と同時に建設せられ。數度の改造を経たるにて。

現今のものは明治七年十二月工を起し。翌年七月に至り功を竣へ

たるなり

此大華表の汀に宮羣貝とて。間々宮殿又は鳥居の形狀を模様に現

はしたる。一種のあさり貝を産することあり

遠島の下つ岩根の宮はしら

波の上よりたつかとぞ見る 玄旨法師

さす潮も光をそへて鳥の名の

宮居すゞしき夏の夜の月 似雲法師

建武三年二月十八日足利尊氏本社へ参詣し願文及劍（銘友成）を獻じ。

参籠して大神の加護を祈り。貞和四年八月二十六日に至り當國己斐村の地を獻し。廻廊以下造營の料に充つ

天文十年七月五日大宰大貳大内義興祠官に命じて廢典十一條を再興せしめ。同十一年五月二十日鎧一領太刀一腰神馬一頭を獻ず

天正十五年三月豐臣秀吉肥前名古屋へ出陣の途次本社へ参詣して大神の冥助を祈り。凱陣の後毛利輝元に命じて大經堂（今の千疊閣也）を建設せしめ且つ一萬石の寄進狀を納む

其他朝廷を始めとし平氏の諸將侯は勿論。源賴朝、同實朝、征夷大將軍賴經、同賴嗣、同惟康親王、同久明親王、足利義昭、大内義弘、同義隆、毛利元就、同輝元、福島正則、淺野藩侯等よりも屢神領の奉納贈位の沙汰（古の贈位は神に位階を授くるにあらず神領の多寡祭儀を定むる爲めなり）寶物奉納等の事ありしことは枚舉に遑あらず。以て其神徳の壯嚴なる一斑を推察し奉るべきなり

本社本殿 祭神 三座

市杵島姬命（主神）。田心姫命。湍津姫命

相殿 三座

國常立尊。天照皇大神。素戔鳴命

一本殿 〈梁間六間三尺六寸桁行十三間一尺三寸〉

御鎮座の正殿をいふ

一大床 幅五尺

一幣殿 〈梁間三間一尺五寸桁行三間一尺八寸〉

正殿の前にあり

一拜殿 〈梁間六間桁行七間四尺四寸〉

幣殿の前にあり

一祓殿 〈梁間六間四尺八寸桁行十三間三尺八寸〉

拜殿の前にあり

一高舞臺 〈竪三間四尺横三間〉 祓殿の前にあり

一平舞臺 高舞臺の前後左右をいふ平面積百八十六坪あり

一樂房 〈梁間二間五寸桁行五間五寸〉

二字左右に別れて平舞臺に連る

一廊嘴 〈幅一間五尺三寸長七間一尺三寸〉 平舞臺の前端をいふ

一門客神社 廊嘴の左右にあり。俗に沖惠美須と稱す。豐磐間戸

命及櫛磐間戸命を祀れり

一廻廊 幅二間二尺長さ百四十八間二尺にして本社の左右に延

長し。曲々節を爲し一間毎に鐵燈籠を釣れり。これ百

八燈の一にして社頭の明燈と稱し。嚴島八景の一に數

ふ

客神社 祭神 五座

正哉吾勝勝速日天忍穗耳命。天穗日命。天津彦根命。活津彦根命。

熊野櫛樟日命

一本殿 〈梁行五間二尺三寸桁行七間五尺五寸〉

して明かなり。推古帝の朝に至り。當郡の守佐伯鞍職。御神託により官奏を経て宣下を蒙り。島内の長老所翁と與に力を併せ。御笠濱の大石小石を切り平け。奥山に繁立てる大木小木を伐り採り清き荒磯の底津磐根に宮柱太敷立て。常世の神籬と定めて。かの足引宮より市杵島姫大神を遷して鎮め祭り。又田心姫命湍津姫命の二神をも配祀り。又相殿に國常立尊、天照大神、素盞鳴命の三神を祀り。又客神社に於て。正哉吾勝勝速日天忍穗耳命、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野櫛樟日命の五神を齋奉りたるは同帝の御宇即位元年癸丑十一月十二日のことにして。今を去ること正に一千三百十一年。嚴島神社御鎮座の基礎茲に定りたるなり

是より五百餘年の星霜を経。社殿の荒廢甚しかりしか。當國の主平清盛靈夢の感により。大に土木の工を興し。神領を増加し。經營數年を重ねて社殿を改め造り。百八間の回廊を起し。大鳥居攝社末社に至るまで盡く改造し。其壯麗美觀遙に前古に卓出するに至れり爾後明治維新に至るまで。殆ど七百年。上は朝廷を始めとし。歴代の名門武將等か或は神領を増加し。或は社殿を造營し。或は寶物を藏め。或は本社に參籠して親しく拜禮をつとめたる等。其崇敬のなか／＼をろかならざりし事跡は枚擧に遑あらざるなり。上にして既に然り。下億兆の崇敬に至りても又これに譲らず。參詣の輩雲霞と共に四時去來を絶たず。誠に本邦の大社皇國の守護神にして。其神徳の壯嚴なる。今や益遠く宇内萬邦に輝きわたり。仰がぬものこそ

なかりけれ

明治三十二年四月五日。内務省本社の建物を以て特別保護建造物に編入し。次で今回大修繕の舉あり。神殿の壯麗前に數倍し。神徳ますく／＼新たなり

やはらぐる光りも高き宮島の

神にあゆみをはこぶ諸人

海原やまたたくひは浪の上に

宮居しめたる嚴島かな

中納言持豐

恭惟市杵島^{シクルニ}姫命。神聖靈蹤益壯哉^{ナラ}

廟貌歸然浮^{トシテ}海水^ニ。怪看^{ミル}蜃氣吐^{クハク}樓臺^ニ

石川丈山

歴朝崇敬の一斑

承安四年三月十六日後白河法皇御臨幸座まし本社へ御參詣あり。同年四月九日還御あらせらる

治承四年三月十九日高倉天皇御臨幸座まして本社へ御參詣あり同年四月九日還御あらせらる

治承四年九月二十二日高倉天皇再御臨幸座まし本社へ御參詣あり御願文を納め玉ふ

安元元年十二月大介藤原朝臣を勅使として御供田十三町一反を寄せ同年神領として高田郷を寄せらる

弘安四年元寇來侵の際執權北條時宗より數日間異賊降服の御祈禱あり。其後正應六年に至り執權北條貞時より因幡國船岡郷を奉納す

嚴島案内記

第一編

嚴島の地勢及概況

我が大日本帝國海岸の地勢中最も曲折變化に富み。大に趣味を有せるものは瀬戸内海を以て最と爲す。而して此瀬戸内海中天地秀靈の氣を鍾めて粹然山水の精妙を極め。加ふるに歴史上の遺物名跡に富めるものは我が嚴島を以て最と爲す

嚴島は安藝國の海中にありて陸地を離るゝこと遠きは四五里。近きは五六町ばかり。北及西の一半面は佐伯郡二十日市、地御前、大野、玖波等の諸町村と相對し。東及南の一半面は佐伯及安藝兩郡の諸島嶼と相對し。又はるかに伊豫周防の諸山を望めり。島の周廻七里三十二町餘。面積三千百四十餘町歩に達し。戸數八百二十三。人口三千二百十九を以て數ふ。島の中央に近く御山の高峯を控へ。其周圍には大小幾多の峯巒山脈起伏蜿蜒して四方に延びわたり。地形東北より西南に向ひて長く。不規則なる長方形を劃せるを見る

市街は島の西北面に位し。塔の岡及龜居山千疊閣を中央として東西の両部に分れ。更に之を別ちて十八區と爲す。其東部市街の沿岸は即ち嚴島港にして。多數船舶の繫泊に適し。町内には町役場小學校を始とし。警察分署、憲兵出張所、郵便電信局、國有林保護官舎、銀行支店及棧橋會社等の機關備はらざるところなく。交通又至便。氣候温和にして寒暖度に適し。土地清潔。水質清晶。空氣又極めて新鮮なり町民の大

半は木竹細工を以て産業と爲し。轆轤物、杓子類、竹細工、彫刻物等其大部を占む。近年交通機關の開發に伴ひ。參詣來遊者の數年を逐ふて増加し。産物の販路。又其改良進歩と與に漸年盛況を呈するに至れり

本町は元伊都岐島と稱ふ。蓋し市杵島姫命の鎮座せるより伊都岐（市杵伊都岐國音相通ず）と稱へたるものなるべし。古の諸史皆此稱を用ひたり。近世専ら嚴島の稱を用ふるも又伊都岐と通はして慣用せる所なるべし。宮島の稱も其起因は大神の宮居し玉ふより出でたるものにて。其唱呼既に久しく。高倉帝行幸記に宮島と記しあるを見て知るべきなり

入海の八十浦かけて十島なる

なかに香ふかき島は七浦

小野篁

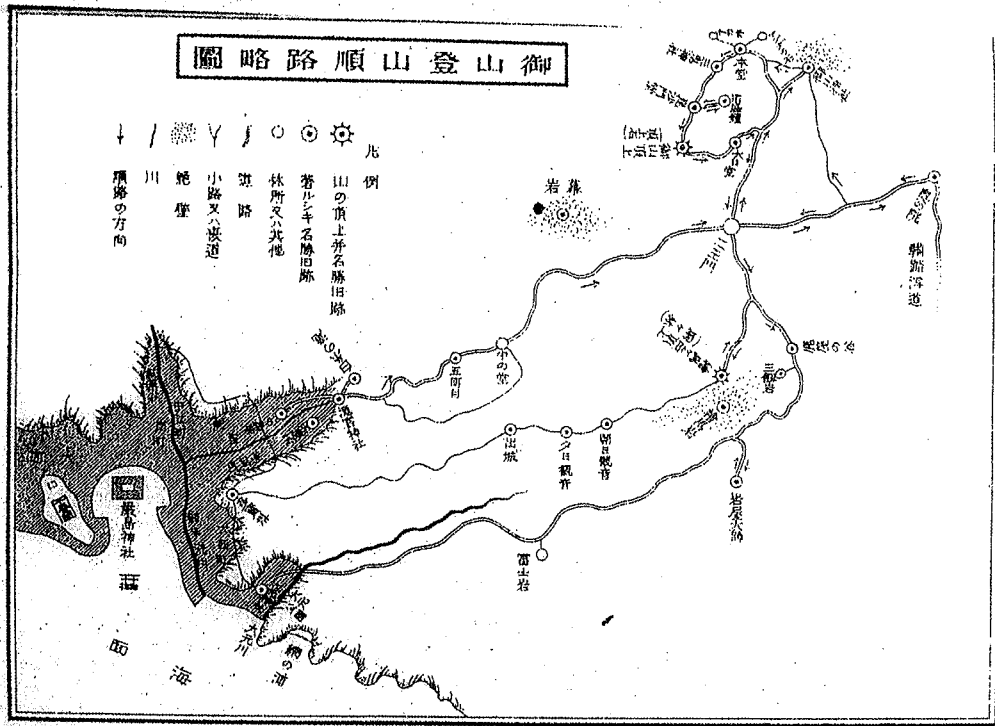
恩賀しまのすがたはをのづから

よもぎの山もこゝにありけり

在原業平朝臣

嚴島神社

嚴島神社は天照大神の御女子。市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命を齋き祀れるところにして。三神與に大神の詔のまに。高天原より豊葦原の中國に天降り座て。皇御孫命を輔け。又皇御孫命の爲に齋かれたまふ。而して市杵島姫命か我が嚴島に降臨ましませし時代は。其年歴頗る悠遠にして。今俄に考ふべからずと雖も。推古帝時代より以前既に本島に降臨ましく。御山足引宮に御鎮座ありし事蹟は照乎と

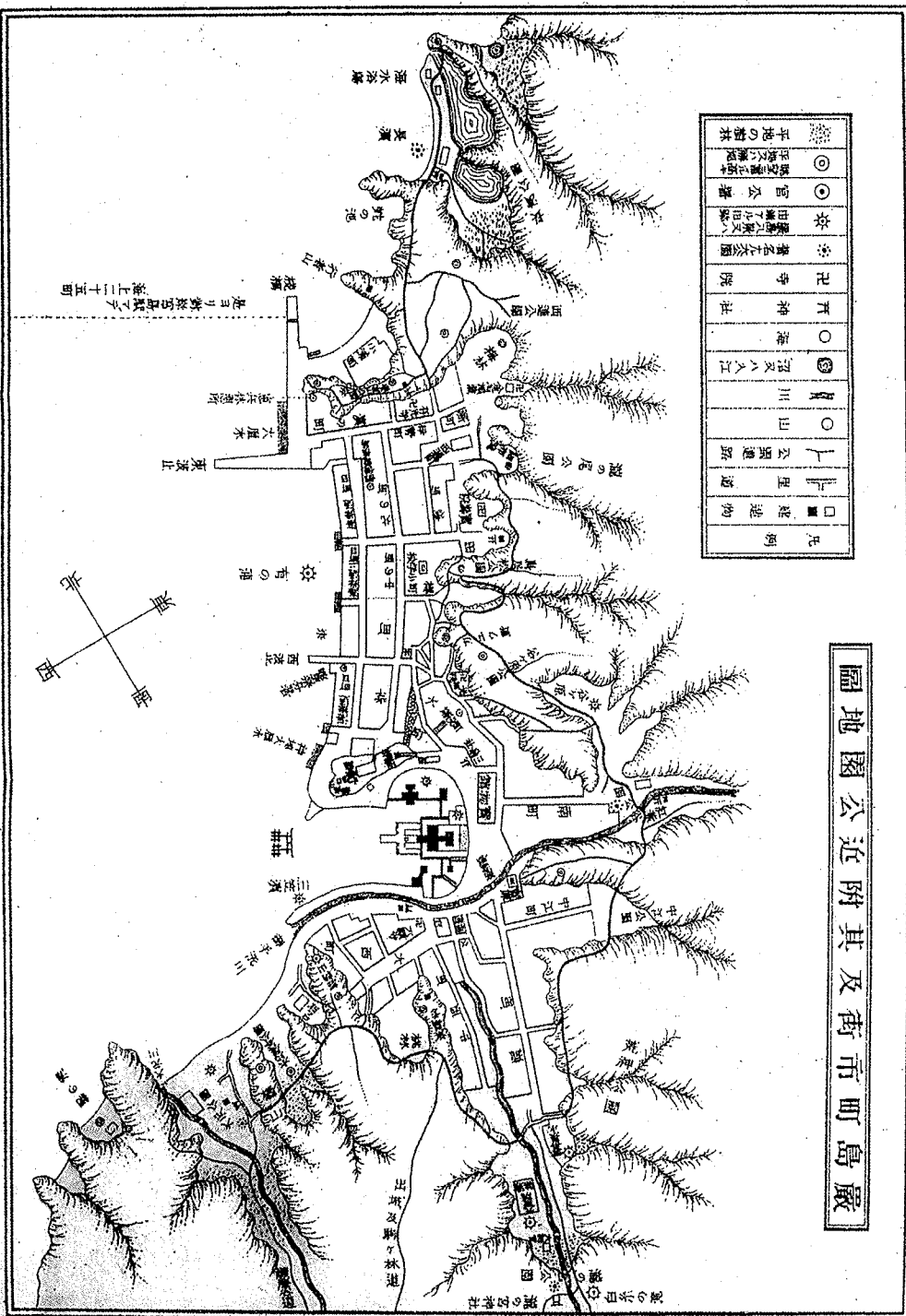


嚴島の物産
 町民職業別の概要
 宿屋組合規約によりて定めたる旅籠
 料及飯膳料
 産物店の組合規約
 目次終

九十四丁
 九十五丁
 九十五丁
 九十六丁

嚴島町市街及其附近公園地圖

氏
崎
■建設的
↑↑聖道
↑公園道路
○山
③沼々八江川
○海
天神社
記寺院
●集まると園
●田舎が田舎
●宮公署
◎歴史と環境
◎平野の風景



繪馬岩	七十二丁	高安ヶ原	八十三丁
龍ヶ洞	七十二丁	養父崎	八十四丁
駒ヶ林Ⅱ古戦場	七十二丁	養父崎神社Ⅱ鳥喰式	八十四丁
第四編		山白濱	八十五丁
七浦		山白濱神社	八十五丁
島廻	七十六丁	革籠崎	八十五丁
島廻の順序及儀式	七十六丁	須屋浦	八十六丁
浦廻及浦遊	七十七丁	須屋浦神社	八十六丁
長濱より聖崎に至る沿岸	七十八丁	御床浦	八十七丁
聖崎(蓬萊岨)	七十八丁	御床浦神社	八十七丁
蓬萊の出現	七十九丁	内侍岩	八十七丁
杉の浦	八十丁	鞠踏潟Ⅱ以東の沿岸	八十八丁
杉の浦神社	八十丁	網の浦	八十八丁
金剛水	八十丁	七浦に於ける風景上の概観	八十九丁
包ヶ浦	八十二丁	雑録	八十九丁
包ヶ浦神社	八十二丁	嚴島港	九十二丁
鷹の巢神社	八十二丁	宮島渡航株式會社。憲兵休憩所。	
腰細浦神社	八十二丁	郵便電信局。八田貯蓄銀行支店。	自九十二丁
大砂利浦	八十二丁	嚴島尋常高等小學校。嚴島警察分	至九十四丁
青海苔浦	八十二丁	署。國有林保護官舎。嚴島町役場。	
青海苔浦神社	八十二丁	演劇場。勸工場。航路標識。	

長濱神社 五十六丁
 要害山公園 五十七丁
 宮尾城墟 五十七丁
 今伊勢神社 五十八丁
 存光寺 五十八丁

第三編

御山
 御山の開基 五十八丁
 一の鳥居 六十丁
 懺悔地藏及其他 六十丁
 祈不動遺跡 六十丁
 御幸橋 六十丁
 五町目 六十二丁
 中の堂 六十二丁
 岩屋薬師 六十二丁
 幕岩 六十二丁
 二王門 六十二丁
 御山神社 六十二丁
 御山神鴉の由來（八景の二） 六十三丁
 求聞持堂（本堂） 六十四丁
 〔錫杖梅。關伽水〕

曼陀羅石
 三鬼神社 六十六丁
 鐘撞堂 六十六丁
 毘沙門堂 六十六丁
 石洞門 六十六丁
 岩屋不動 六十六丁
 此邊一帶の風景 六十六丁
 御山頂上（頂上石） 六十七丁
 龍燈杉 六十七丁
 満干岩 六十九丁
 船岩 六十九丁
 大日堂 六十九丁
 目洗薬師 六十九丁
 三界萬靈水掛地藏 六十九丁
 水晶石 六十九丁
 奥の院（大師堂（籠所）彌勒堂） 七十丁
 水手向地藏其他
 御山二王門より以西に於ける名勝舊跡 七十丁
 鹿屋谷 七十丁
 三劔岩 七十丁
 岩屋大師 附近の風景 七十一丁

康頼卒塔婆の趾	三十丁	大元公園（八景の二）	四十丁
康頼の石燈籠	三十二丁	大元神社	四十二丁
寶物陳列館	三十二丁	經納山（清盛山）	四十三丁
寶庫	三十二丁	多寶塔（二重塔）	四十四丁
文庫	三十二丁	出城	四十四丁
御衣裳藏	三十二丁	大聖院遺跡	四十五丁
御廨	三十二丁	瀧宮公園	四十八丁
三翁神社	三十二丁	白糸の瀧（八景の二）	四十八丁
御花畠	三十二丁	瀧宮神社	四十八丁
御幸松	三十三丁	瀧見岩	四十九丁
千疊閣	三十三丁	紅葉谷公園	五十丁
五層塔	三十五丁	光明院	五十一丁
廣島縣壯兵殉難碑	三十六丁	谷ヶ原（八景の二）	五十三丁
第二編			
嚴島町市街及其附近に於ける名勝舊跡			
有の浦（八景の二）	三十六丁	鳥居松公園	五十三丁
尼洲	三十七丁	稱名庵	五十四丁
大願寺	三十七丁	瀧の尾公園	五十四丁
住吉神社	三十九丁	寶壽院	五十四丁
石風呂	四十丁	金石地藏	五十五丁
木比屋谷公園	四十丁	梅林	五十五丁
		長濱公園	五十五丁
		海水浴場	五十六丁

GUIDE TO
ITSUKUSHIMA
嚴島案内記

明治三十六年三月

著作者識

例言

一本書は第五回内國勸業博覽會の開設に際し。嚴島準備會の囑に依り島内に於ける名勝舊跡の現状を紹介せんがために編纂せるものとす

一編纂の事項中最も重きを置きたるは嚴島神社に關する事跡にして。これに次ぎ島内各地に於ける山海自然の美が各特殊の風光を發揮して造化の英靈を發き。優に宇内無比の絶景を呈しつゝある所以の一斑を紹介せんことをつとめ。併せて從來闇黒の裡に埋伏せる由緒ある舊跡の發揚に意をいたしたり

一本書巻頭の市街地圖は寧ろ市街の三面を包圍せる公園其もの、地勢通路等を示すを以て主とせり。蓋し黒線を以て表したる周圍公園の通路はいづれの處に於ても山海の眺望に富みて新生面を開かざるはなく。頗る趣味ある遊覽線たるを以てなり。其名勝の符號点の如き讀者必ずしも拘泥するを要せざるなり

一本書編纂の材料は總て最新の事實に據り調査せり

一本書中一部の記事は匆卒の編纂にかゝり。誤謬疎漏の点なきを保せず。讀者幸に示教を玉はんことを

嚴島案内記目次

嚴島町市街及其附近公園地圖

御山登山順路略圖

名勝舊跡寫真版二十四個

第一編

嚴島の地勢及概況

嚴島神社

御鎮座

歷朝崇敬の一斑

殿廊の結構

大華表

年中祭事（官祭私祭）

本社之國寶

本社之寶物

本社之繪馬

社頭の明燈（八景の二）

鏡池（八景の二）

三笠濱（八景の二）

一丁

三丁

六丁

八丁

十一丁

十四丁

二十丁

二十五丁

二十六丁

二十七丁

二十八丁

二十八丁

大野 一里 玖波 三里
 岩國 五里 柳井 十四里
 上ノ関 十八里 三田尻 十八里
 馬関 五十里

嚴しまの平野南洋翁は
 多年の丹誠を凝らしあら
 たに嚴しま獨按内てふ
 ものを綴り同舟の大石鳳祥
 雅哲に校訂をもとめこのたひ
 上木することゝなりしは其勲し
 も亦少なからさりければ

くちぬ名や
 盡きぬ眺めや
 嚴しま
 在廣陵 露垂 印

明治二十八年八月廿四日印刷
 明治二十八年八月廿八日發行
 蓬山堂藏板
 定価金廿銭

版權所有

廣島縣佐伯郡嚴島町
 百三十四番邸
 著者 平野岩吉
 廣島縣佐伯郡嚴島町
 百三十四番邸
 發行兼印刷人 平野種太郎

賣 捌 所
 ㊦ ㊧ ㊨

嚴島産物卸商
 小西安次郎
 同紅葉通南角
 沼田榮三郎
 同紅葉通り北角
 中川禎吉
 同幸町四ツ角
 川口伊兵衛

賣 捌 所
 ㊩ ㊪ ㊫

嚴島産物卸商
 調子梅吉
 廣島市中島本町
 森 光次郎
 同横町商工俱樂部
 同 支店

嚴島筋違橋角
 嚴島紅葉通り裏櫻事

産物

當島に産して人のよく賞讃するものを左に挙ぐ

色楊枝 いろはぎ 〈形ちを種々に削り五色に染け最も美しきものなり〇いにしへより正

月四日大神へ青柳楊枝を献し奉る事あり故に名産の第一とす

杓子 しやくし 〈大小種々に削りなせり昔し本島に清心といへる削り初めたるゆへに

清心杓子と云ふ

竹木の匙 ちやくぼのさし 〈近來は外國向き等まで作れり形ち種々にけづりなしていとたくみ

なるものあり

竹木の盆 ぼん 〈角形、丸形并その模様には社頭の圖、山水、草木、花鳥等さまく

の彫刻あり或ハ煎茶器鉢器具又、花活、帽掛けなどを製す風流人士の愛玩

する處なり

竹木菓子器 くわしき 〈形ち大小種々に作る彫刻もつとも美なるものあり

竹木の簞 はた

挽物手遊ひ ひきものてあそ 〈種々彩色をなしたるものあり

木鹿 きじか 〈其彫刻甚たたくみなり殊に本島に小川良平米齋と号する老人の刻は

能くその真を得たるを以て世に賞せらる明治十年御國博覽に出品して花紋

賞牌を拝受したり

石蘭 いしかん 片葉蘭 かたはらん 鸞蘭 うぐすらん 岩干鳥蘭 いわちどりらん 孔雀蘭 くじやらん

〈いづれも御山の深谷に生す形小くして愛すへきものなり

岩茸 いわたけ 〈御山の巖壁に産す

薯蕷 やまのいも 〈御山に産す滋養に功驗ありと云ふ

松露 しょうろ 〈七浦の内須屋浦の海邊に産するものをよしとす

櫻海苔 さくらのかい 〈七浦海岸の岩に生す雅人の賞する處なり

みる貝 みるかい 〈當島近海に産す甘味ありていやしからず

目張魚 めばる 〈本島草籠浦邊にて釣たるもの味ひことに美なり

雪花漬 せつかけ 〈豆腐のからに魚肉又は大鳥居洲潟に産する種々の貝肉を漬けたるも

のなり風味甚た愛すべし

惣太郎漬 そうたろうづけ 〈糖を水に浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとして賞せ

り

裏櫻餅 うらぎもち 〈御垣原にひさぐ上戸の知らざる味ひまた愛すべし

おもてをつゝむはるかすみおつこちすゝし瀧の町

紅葉見る日も雪の夜も間夫はつとめのうらさくら

本島より海上各所の畧里程

隆正

上

阿品 十八丁 地御前 一里

廿日市 二里 草津 四里

廣島 五里 江田島 七里

呉 十里 隱渡 十一里

三津ヶ濱 十八里 尾道 廿五里

多度津 五十里 岡山 六十二里

神戸 九十里 大阪 百里

下

書	韓信	山水	大盃〔詩繪〕	檀風	板額詩	書	浪日出	山姥	書	騾馬	松竹梅	鹿	松間月	神馬	文王	清正	書	牛若辨慶	鷹	秀郷
澤三石	觀山	武高泰	細野僊助	藍江	丈山	三條實美公	画工不詳	蘆雪	金井之恭	探幽	岷山	春卜	雅信	光綱	文晁	長府公	鳥尾敬幸	元信	画工不詳	素絢
龍	書	蝦夷人物	那須宗高	朝比奈	敦盛直實		羅城門	繫馬	張飛	三福神	田植	寶船	龍	龍虎	扇面	鯉	狂歌	草摺引〔木偶〕	厩馬	書
杏雨	米庵	武四郎	丹倫	俊峯	丹覺		直信	左近	古秀	常信	永叔	画工不詳	愛信	愛信	揚心	雪塘	貞佐	甚五郎	画工不詳	三千風

三十六歌仙〔歌常雅公画左ハ光芳右ハ光博〕

太平樂	鷄	耶馬溪	蝦蟇仙人	書	神廟記	菊慈童	玄德	書	虎	書	詠諧發句	花鳥	馬	書	書	書	書	書	書	書
丹倫	松林	皆雲	兆殿司	蒙處	士式	藍江	楠亭	賴聿庵	東洋	春水	撰者蒼虬	岷山	画工不詳	杏坪	東海	梧竹	書	書	書	書
仙人圍碁	漁樵	草花	山水	神功皇后	大助	道灌	孔雀	外國灣江	鹿猿	大湖石	書	寒山拾得	書	書	虎	書	書	書	書	書
岸良	二承	逸峯	梧莊	驪山	桃江	芳園	紫苑	常春	祖仙	老山	子琴錢	松花堂	康文	賴協	諸葛藍	一六居士				

〔社頭の梁間に掲げてあり大なるは横額にて竪一丈余横二間余竪額ハ竪二間余横一間余すべて大小その幾百枚なることを知らされともたゞ人々の称するものをわずかに挙くるものなり〕

黄楊つげの駒こま 一頭

木馬 一頭

銀獅子 一具

古銅印 一個

古錢 三百八十九枚 豊臣秀吉公社参の時賽銭なり

法華經 八卷

經卷 一函

内

法華經 二十八卷 無量義經 一卷

觀普賢經 一卷 阿彌陀經 一卷

心經 一卷 願文 一卷

都て三十三卷 平清盛公の寄附にして願文ハ公の自筆にてその余は一族

三十二人各一卷を分ち書寫ありしものなり是を平家一族の經と云ふ

華嚴經 五十五卷

復古の裏に写してあるも殊勝なるものなり復古經とも云ふ

劍 三十三口

昌五郎、地藏信國、等あり

短刀 三十三口

天國、神息、友成、波平、行平、國光、正宗、國行、國俊、志津三郎兼氏、

國光、兼光、村正、定廣等の作あり

薙刀 五振 貞宗宗貞等の作あり

鎗 八本 信國金遺等の作あり

上に掲けたる刀劍類の寄附は源平二氏及足利大内豊臣毛利家等を第一とす其他古今各武將より寄附に係るもの実に枚挙にいとまあらず茲には先づ人々の能く称讃するものを抜き出したるものにて此外にも素より名作数多あり願くは實際熟覽して焼刃匂ひ等の真味を知らるべし

弓 九張 矢 十五筋

甲冑 十三領

右は源義宗公同義光公平重盛公大内義隆公等の着用せられたるもの又ハ毛利家浅野家より寄附ありしものとす中に小櫻緞の一領は寄附者詳かならされとも古代の名作として世の称揚する所なり

繪馬

楓鹿 常信 獅子 愛信

三十六歌仙 歌三條實隆公画土佐光信

辨慶 俊峯 鐘馗 藍江

孔雀 宋紫石 孔雀 岸駒

綾羽呉羽 應震 書 頼春水

龍虎 連山 虎 應舉

國栖笛 公長 曹操 海僊

瀧二鯉 探幽

百歌仙 歌万里小路政房卿画土佐光貞

兆殿司画 たうでんす	一軸	額 額 後奈良天皇	二面
探幽画 たんじゆゑ	三幅對	仙洞御筆 せんどうぎよへ	一軸
狩野采女圖 かのうねめ	三幅對	新院御宸筆 しんゐんぎよへん	一軸
淺野綱長面讚 あさのつななが	二幅	曼陀羅 まんだら	一軸
法華經 ほけきやう	八卷	曼陀羅 まんたろ	一軸
法華經 法華經 高倉天皇御宸筆	八卷	蓮糸三尊彌陀 れんしさんそんやだ	二軸
壽量品 じゆりやう	一卷	曼陀羅 まんたろ	一本
壽命經 じゆみやう	一卷	高倉天皇御扇 かうかうてんぎよへん	一本
授記品 しゆきひん	一卷	赤梅檀釋迦 しやくばいだんしやく	一軸
理趣品 りしゆひん	一卷	安徳天皇御座着 あんとくてんぎよへ	一軸
般若心經 はんにやんしん	一卷	御劍 ぎけん	一肩
細字法華經 さいじふはふけい	八卷	石帶 いしおび	
細字法華經 細字法華經の外函ハ堅三寸横二寸深さ一寸七分なり	八卷	笏 しやく	
和歌 和歌 御小松天皇	一枚	檜扇 ひせん	
和歌 和歌 後花園天皇	二枚	墨 すみ	一挺
全 全 後土御門天皇	一枚	文臺 ぶんだい	一本
全 全 後柏原天皇	二軸一枚	文臺 文臺 硯宮とも	一脚
全 全 正親町天皇	一枚	檜扇 ひせん	三本
全 全 後陽成天皇	一軸	曲玉 まがたま	十二顆
全 全 後水尾天皇	二軸	青磁塔 せいじとう	一基
全 全 明正天皇	一枚	赤梅檀香 しやくばいだんかう	一包
全 全 靈元天皇	一枚	沉の櫓 しんのか	一本
		沉の櫓 沉の櫓 長五尺三寸余	一個
		沉枕 しんまくら	一個
		青磁枕 せいじまくら	一個
		硯 硯 獨鈷	各一振
		古鏡 こきやう	二面
		七寶杯 しつぽうのさかづき	一個
		蘭奢待 らんじやたい	一包

八高倉天皇の御管治承四年御臨幸の時御奉納し給ひしなり

篳篥

二管

笛

三管

〔第一ハ駐腦にて造り第二ハ銅第三ハ異なるものにあらず中にも駐腦の笛は豊太閤の征韓の時彼國より持帰りしものにてこれを毛利家へ給ひ同家より御寄附のものなり〕

高麗笛

一管

箏
〔銘法華律板柱とも〕

一張

和琴

二張

琴

一張

〔表裏とも断紋あり平重衡愛甌の器にて唐の雷家の作と傳稱す〕

琵琶

五面

〔第一谷川、第二瀧浪、第三磯浪、第四落月、第五無銘、中にも谷川は玄上を模して作りしものなりと傳稱し第五八九條道房公の愛甌せられし器と傳稱せり〕

太鼓

五挺

羯鼓

三挺

二ノ鼓

一挺

三ノ鼓

一挺

小忌衣

十領

御宸翰

二十五枚

内

聖武天皇

一枚

嵯峨天皇

一枚

後鳥羽天皇

一枚

龜山天皇

一枚

後宇多天皇

一枚

伏見天皇

一枚

後伏見天皇

一軸

後二条天皇

一軸

後光嚴天皇

一軸

後光嚴天皇

一枚

以下畧す

智子皇女御染筆

二枚

古文書

二百十八卷

〔内神領、制令、祭記、當繕、寄進、雜翰等各部分をなしたり〕

賴朝卿御下文

一枚

和歌奉納
〔藤原経尹卿筆〕

一卷

榮華物語
〔松木内大臣宗條卿筆〕

全部

和漢朗詠抄
〔冷泉為成卿筆〕

一卷

和漢朗詠集
〔冷泉為成卿筆〕

一卷

百人一首
〔外山光和卿筆〕

一冊

嚴島八景詩歌
〔諸公卿筆〕

三卷

嚴島香記

一卷

漢板二十一史

全部

懷紙
〔足利直義公筆〕

一枚

文
〔藤原為相卿筆〕

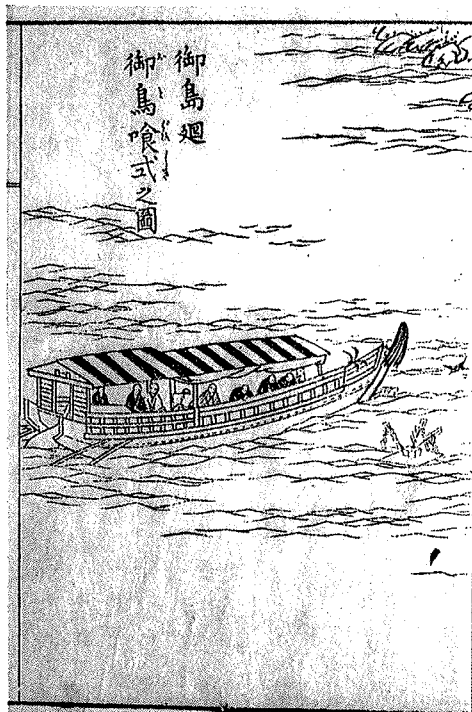
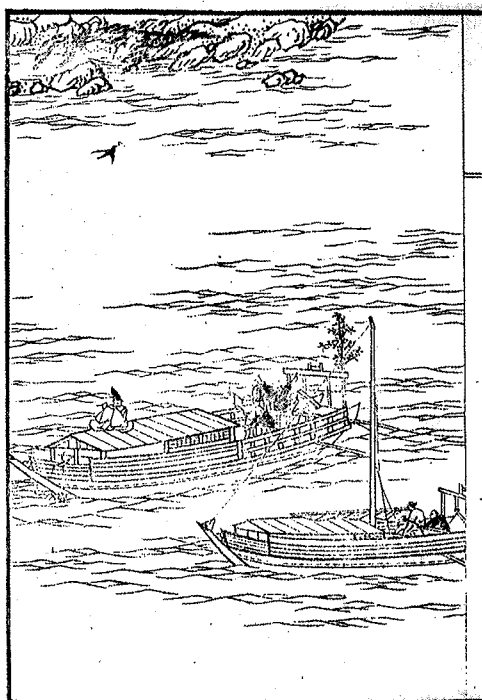
一軸

色紙和歌
〔豊臣太閤御筆〕

一軸

巨勢金岡圖

一軸



蹈鞠濱 〈治承の頃平宗盛公弥山寄附の鐘此所にて鑄製せしと云ひ傳ふ〉

鬼石 大黒石 喧嘩濱 大寄浦 飛石

梶石 鱈ヶ浦 江の浦

網の浦 〈大鳥居より六里二十七丁鳥廻りの舟此所より願主の人々上陸して大

元神社に参拝し終て本社に帰る三笠濱大鳥居より東へ出て周圍を一廻し西

の方大元の社へ帰る累程七里にして七浦七胡子の神社を順拝し終るなり〉

いつまでも見る眼は嬉しいつくしまめくる浦輪をおもかげにして

中納言持豊

○本社の寶物

伊都岐島大神御鎮座記

一冊

嚴島神社神主歴代署記

一冊

假面

十二面

拔頭 還城樂 陵王 納曾利 散手 貴德 採桑老 二之舞

胡德樂 〈以上承安三年朝廷の御寄附の物なり中にも拔頭の面ハ享和

二年天覽に備へ奉りし時古物殊勝の品に思召大切に致すべく旨御繪旨を

給ふ〉

奚囊

一挺

〈假面と同時の御寄附なりと云ふ〉

鼗鼓

一振

笙

五管

〈第一小櫻、第二春風、第三小男座、第四國家丸、第五獅子、中にも小櫻

藤ヶ浦 帆掛岩 鏡岩 屏風岩 今山浦

青海苔浦神社 大島居より三里七丁島巡り第四番の拝所なり此所にて午飯

青海苔を用ひたる饗應あり御師此所より楽を奏し神鴉を呼出す

祭神 中筒男命

影ひたす木々のみとりも青海苔の浦の名しるき波のおも哉

中納言持豊

讃岐の浦 青海苔より養父崎の間を云ふ所さたかならず

聞さひしさぬきの浦のゆふくれにましろのさけふ聲のかなしき

赤人

養父寄神社 大島居より三里二十二丁神鴉の霊をいつき祭る此社の沖合に

て御鳥喰式を行ふ神官海上に楽を奏す神鴉奏楽を聞山上より飛来

り波の上の楽を啄へ養父崎神社鳥居の前へはこぶ此時舷中より拍手して禮

拝を為す是を鳥喰式と云ふ此式は願主の望により行ふものにして一日に二

度三度行ふ事もあり或は久しく行なはざる事ありと虽も神鴉の式を行ふに

變ることなし舷中願主等に若し穢あれば靈鴉出る事あるも楽を運ばざる事

あり

七浦の島めぐりする舟の中のもの、音あかす神や聞らん

中納言持豊

うたかふなからすは島の花の神

篤老

戸田 一退浦 小谷口 なえりが鼻

山白濱神社 大島居より四里四丁島巡り第五番の拝所なり

祭神 表津少童命

かしこしな名さへ動かぬ山白の濱邊にしめし神の宮居ハ

中納言持豊

菓子盆岩 革籠崎 一ツ葉嶮岨 下り松浦

鳥帽子窟 長浦 比良根磯 丸石ヶ久保

洲屋浦神社 大島居より五里島廻り第六番の拝所なり此所にて餡餅を饗す白

砂数百間海上に突出し老松蟠蜿岸上に横たはり景色のよきところなり

祭神 表筒男命

浦はる、須屋の朝なぎ夕なぎに見る眼はさこそたくひなからめ

中納言持豊

下谷浦 猪子坂

御床浦神社 大島居より五里七丁島廻り第七番の拝所なり社前に大石あり石

上龜甲の如き文あり其形ち床に似たりよりて御床と称すと云ふ往古大神の

此島に着き給ひし所なりと云ふ傳ふ

祭神 市杵島姫命

あふけなは天降まし、その神の御床のいはほ動なき影

中納言持豊

鳥帽子浦 水尻浦 大川浦 二石谷 大江浦

鰐口浦 犬はふ

内侍岩 島廻りの時御師の舩より此所に御幣を捧げ楽を供する例あり

米ヶ窪 下室濱 上室濱 鵜留り 須本崎浦

導をなしたる例に倣ひ七浦七胡子の神社を巡拝し養父寄の神社に於て靈鳥鳥喰の式を行ふ其儀式の概畧ハ神官舩一艘是を御師の舩と称す其舩には四手切かけたる櫓を立て管曲を奏し先に進む客舩一艘幕を張り裝飾をなし願主を乗せ水主かんとりに至るまで櫓拍子を揃へよろこひの歌を謡ひ御師の舩に次て漕出す宿舩其後に従ひ御山を右に仰き島の東浦より巡り始む

大菜切 小菜切 清水ヶ浦 米ヶ浦 屏風ヶ浦

聖寄 （曼珠院竹内御門主覚如法親王御参詣の時御歌に）

四ツの海なみしつかなる時にあひてひしりか崎をけふ見つるかな

蓬萊巖 姥ヶ懷 江の浦 彌七ヶ谷

へいづれも長濱より杉の浦に至る海岸の地名なり

海氣 （蓬萊巖あたりの沖合にて清明の頃朝霧晚霞の中に宮殿閣樹木等の形

状あらはるゝ事あり所謂蜃氣楼のたぐひなり俚俗これを蓬萊と称す古説に

此邊の海中一面に沙金あり故に金氣の發する所以なりと云ひ傳ふ

杉ノ浦神社 （本社大島居より東へ三十丁を隔つ本殿ハ辰に向ひ拝殿桁行五間

梁一間玉垣あり此社島廻り第一番の拝所にして御師の舩よりハ社前に神酒

洗米を供へ神官樂を奏す宿舩より朝飯を饗す此邊一名生相ノ浦とも云ふ

祭神 底津少童命

いく世をか杉の浦風吹音も神さひにけるこの宮居かな

中納言持豊

〈又此所を生ひあひの浦と云ふよしハ菅家の御歌に〉

おひあひの浦の浪風はけしくてしほもさたかに見えぬ夜のそら

金剛水 （清冷の泉あり）

櫻川 中寄浦 火戾り口 與左ヶ谷

へいづれも杉の浦より包浦の間の地名なり

包ヶ浦神社 （大島居より一里十四丁海中に圓形の大石ありて其上に社宇を

建つ卯寅に向ひ塩土翁を祭る此所にて御師の舩より神鴉に鳥喰を投す此社

ハ七浦の外なり

つい通 こんかまし浦 千献岩 （海中に在り五間二間の床形なりの巖石

なり）

鷹の巢浦神社 （大島居より一里二十八丁島廻り第二番の拝所なり此浦の砂

濱に鷹の爪貝とて鷹の爪の如き小貝あり本島名物の一なり

祭神 底筒男命

ときは木の影も鷹巢の浦浪をかけて晴たる神の廣前

中納言持豊

落磯 桃岩 上飯濱 下飯濱

腰少浦神社 （大島居より二里九丁島廻り第三番の拝所なり此所より島の裏手

になり南は豫州の島々をのそみ海上渺々として遠景佳勝の地なり

祭神 中津少童命

汐みてバ浪もいはほを腰細の浦吹風やはけしかるらん

中納言持豊

大砂利浦 穴の口浦 上藤留り 焼山浦 檜ノ木浦

の作にして千手観音は行基菩薩の作なり与其他堂内に安置しありしハ伽羅佛の薬師如来佛舍利塔（いづれも空海上人天竺より持帰り給ひし宝物なり）飛不動尊、三光石、興教大師の像、地藏尊、弘法大師の像等にして悉く火災の際焼失せしが明治二十七年堂宇の建立をせられたり

神鴉 へ通常の鴉と異なり形状少し細くして羽色光澤あり往古大神の當島に御鎮坐の時此鴉の始祖従ひ来り爾来当山に棲息して其裔今日に傳りたるものと云ひ傳ふ毎年雌雄一雙を産す陰曆九月二十八日大野村大頭神社に於て子別れの式あり此時親鳥は紀州熊野神社へ別れ行と云ふ鳥廻り御鳥食の時出て式を為す靈鴉と称するは即ち是れなり毎年鳥廻り式ニ於て五月頃より九月別れの式以前にありては親子四羽の鴉出て鳥喰の式を為し九月後より五月以前にありては二羽のミ出るを例とす此れ本島の最も靈異として尊ぶ處なり慶應二年大野村に戦争ありために一年子別れの式を怠りたることあり其年ハ九月以後雌雄二雙となり翌年の儀式後に至り又終に一雙に復したり實に神鴉と云ふの虚ならざるを知るべきなり

御山の神鴉 八景の一

この山の宮居をさらでいくとせかすめるからすのつかひはなれぬ
黄門輝光

山形如湧趣尤奇林杪深邊雄與雌豈有
群鴉爭茂樹一雙萬古護靈祠

桂洲

關伽井 へ求聞持堂の下にあり大師修法の時汲給ひし井ノ水にして暑寒ともに
活る、事なく至て清冽なり

曼陀羅石 へ求聞持堂の南下にあり大磐石の面に天照太神宮八幡大菩薩春日大

明神その他梵字あまたを鐫たる所あり大師の作なりと云ひ傳ふ

御山神社 へ求聞持堂より一町程南西にあり此社は大神當島へ御臨幸の始め影

向ありし旧跡なるかゆへに三柱の姫神を鎮め祭りしにいつの頃よりか三鬼神を合せて祭り為に三鬼神の社と称し居りし欽明治四年改革に際し旧に復したり

奥の院 へ御山神社より未申の方六丁程の處にあり弘法大師を安置し大師堂ありしか今ハ廢れたり

鐵岩 へ帆掛岩 屏風岩 へいづれも大石にして奥の院より後の山を越す谷に至る間にあり

三劍窟 へ往古劍を収めし所と云ひ傳ふ

鹿屋谷 へ三劍窟のあたりをいふ此邊山高く谷深くして閑静幽邃の地なり藤原

興風の歌に「風吹く座屋の谷のたに深く月影清し雲のくれなみ」とあり
護摩谷 へ三王門より西手の峯にあり弘法大師護摩を修し給ひたる岩屋の舊跡なり

龍窟 へ護摩谷の西にあり名龍穴とも称す巖石の間に大ひなる穴あり

龍ヶ馬場 へ龍窟の上を云ふ昔し陶全姜のたて籠りたる場所にして古戦場なり

○島廻の順路

抑も島巡りの儀式は太古大神の當島へ鎮坐しますとき佐伯鞍職社地を定むる為め此島の浦々を見廻れる時靈鳥飛来りて船の

鐘撞堂しゅうどうだう
 (毘沙門堂の下にあり其銘に奉施入伊都岐島彌山水精寺治承元年二月

日施主右大將平宗盛とあり、

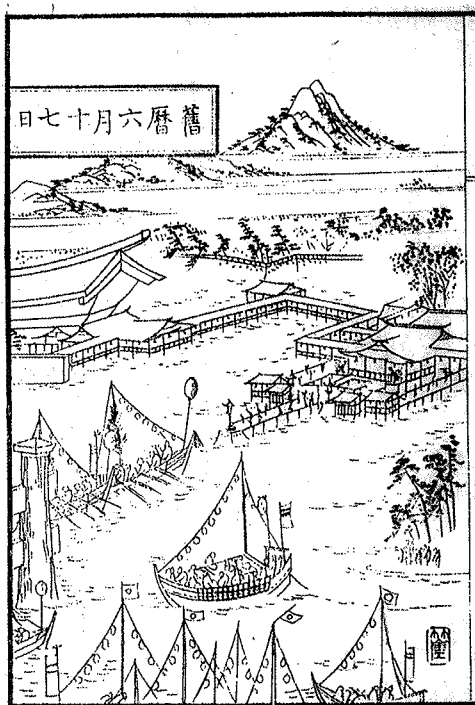
玉取岩 たまとりいわ 〈石面に玉を掘り採たる痕あり〉

時雨櫻しぐれのさくら
 〔求聞持堂の前に在り櫻樹の枝葉より常に露水を滴下すたまゝ〕風

の吹き来る時は其さま時雨の降りきたるに似たり

散杖さんじやうの梅うめへ求聞持堂の内にあり昔し弘法大師當山にて護摩を修し給ひし時
用いられし散杖をさし置き給ひしに其杖終に生木となり花實を結ひしと云
ふ今存するものは後世彼の梅樹枯朽したるのち古のしるしを存する為め更
に植たるものと云ふ

ほんどう
本堂 へ一の鳥居より十八丁なり桁行二十五間梁行八間弘法大師の開基にて平城天皇の御宇大同元年丙戌年十月大師帰朝の頃護摩求聞持の修行を為し給ひし霊場にして抑大師開基の昔より今日に至るまで一千有余年の久しき修法の行者跡を絶たす堂内の爐火ハ大師開基の昔し護摩を修し給ひし時の火を焚き續け今日に傳へたるものなり堂宇伽藍ハ平相國清盛公の營繕にして長享元年丁未將軍義尚公の再営あり降て慶長八癸卯年國主福島左衛門大夫正則公建立し給ひたるものにてありしか明治二十一年正月に至り火災に罹り灰燼となり今ハ僅に仮り堂あるのみ誠に惜むべき限りにこそ○本尊ハ五大虚空藏菩薩脇立千手観音十一面観音なり傳へ云ふ虚空藏菩薩は弘法大師



なから白糸をひきたることし

雲井より落来る瀧の白糸にちきりをむすぶ事そ嬉しき

三井寺公顯僧正

山高ミ登れはのぼる春の日にくりかへし見る白糸のたき

曼珠院寛如法親王

瀧宮水螢 八景の一

此宮のひかりそへてやよひくのはたるも瀧の玉とミたる、

右中辨光榮

森々緑樹遶宮遶南岳懸雲吐立泉萬點

水螢三伏夕涼風乱影似秋天

藤原總長

休堂やすどうへ一の鳥居より此所まで登山凡六丁阪路嶮峻なるか故に參詣の人多く

此の處に休息をなす茶店あり名物ちから餅をひさぐ眺望佳絶なる目下に本社宮殿大鳥居千疊閣等を瞰視し背後に翠巒を仰き風流人士の最も愛すへき所なり一名にこの邊を中の堂ともいふ

幕岩まくいへ阪路より谷向ひにあり巖石数十丈の絶壁となり其様さなから幕を張たるか如し

大夫たいふ屋やへ休堂より五丁程うへにあり昔し福島左衛門大夫正則參詣登山の時

此所にて吳形の山伏に出遇ひ怪事あり直ちに下山なしけると故に其名あり
三王門にやうもんへ一の鳥居より十六丁昔は未の刻より此門を限り登山を許さざりしが

今ハ其禁なし

水晶石すいしやうせきへ三王門の内水掛地蔵との間にあり中央に穴あり

三界萬盞水掛地蔵へ大日堂の下にあり此所に清水出つる

大日堂たいにちどうへ堂宇四間四寸四方本尊は胎藏界大日如来金剛界如来を安置す大同元

年弘法大師の建立なり神護寺と称し往古ハ弥山本堂といふ

船岩地蔵ふねいわじざうへ巖石船体の如くなりたるありて其所に安置す

満干石まんかんせきへ元立したる岩石に一箇の穴あり潮水満つる時刻には此穴に水満溢し

潮水退く時には乾涸して水空しくなる恰も潮水の満干にあるとひとし俗に

みち千の巖とも云ひ傳ふ

石佛觀音いふつくわんおんへ二体 十一面觀音 辨才天 如意輪觀音 へいづれも舟岩よ

り頂上石に至る間に在り

龍燈杉りうとうしやうへ頂上石の下にあり數百年を経過したる杉樹にして今は枯朽して僅に

其幹を存す因に記す往古より毎年陰曆正月元日より月末に至り晴天の夜本島浦さの海面より火光現はるゝことあり其火色ハ尋常の燈火に異ならず山上より望めば數個の漁火の如しといへとも聞近く此を見れば尺余の團火の如し其出沒明滅自然に海底より浮ひ出ると云ひ傳ふ此を龍燈と称す此の老樹のある所ハ彼の龍燈を瞰るに最好なるを以て斯く名附けたるものなり

頂上石ていじやうせきへ當山の最点にある巖石なり巖上平にして床の如し東北に望み西方ハ

長防の諸嶺に向ひ眼下に藝備防豫の各島嶼を見其遠景瞻眺の勝絶なる実

筆端に盡しかたきものなり

石門いしもんへ巖石自然と重りて門の形をなせり此石門に入りて毘沙門堂へ下る

岩屋不動いわやふどうへ巖石自然に屋根の形をなす其内に不動尊を安置す

毘沙門堂ひしゃもんどうへ水精寺といふ堂宇三間五尺五寸四尺本尊毘沙門天弘法大師の作な

立かへりなこりも有の浦なれば神もめくみをかくる白波

徳大寺實定大臣

わかたのむ神の恵ミの有浦ありし昔にかへれしら波

足利將軍義植

尼の洲きよすま 有の浦にあり壽永四年壇の浦にて入水ありし二位尼の尸此處に漂着

したりと云ひ傳ふ

幸神社さいはいじん

祭神 猿田彦太神

瀧町たき 御垣原より筋違橋を渡り御山へ登る道筋なり

大聖院だいしょういん 御山の麓にあり真言宗にして旧時は嚴島神社別当職にて座主と称

し杜僧十五ヶ寺の長たりし勅願所にして年々御撫物を下し給ひし例ありしが明治四年に至り杜役を廢せらる当院創立は大同元年なれとも天文年中災禍に罹り旧記を失ひたれば委しき事ハ知るによしなし天正年中御室宮一品

仁助法親王御住居なし給ひし事あり天正十五年三月豊臣秀吉公筑紫下向の時当院に於て供奉の諸侯を集め和歌の會を催し給ひし事あり当時秀吉公の

自詠ハ其集會の一軸三十六首の中にあり(下にしるす) 明治十八年七月三

十一日今上天皇陛下御臨幸の時当院に御駐輦あらせ給ひたり昔時より寺格

の輕からざりし事は堂房伽藍の廣大なるにて思ひやるべし本尊不動明王ハ

豊臣太閤の護身佛を納め給ひしと云傳ふ惜むべし明治二十二年十二月火災

の爲め灰燼となりたり

聞しよりなかめにあかぬいつくしま見せばやと思ふ雲のうへ人

松

松とあるは秀吉公の御事にて御歌にかざりていつも松とか、せ給へり長

門國赤間関阿弥陀寺にて平家追悼の御會ありし時の御歌にも松とあり

多聞坊たもんぼう 眞言宗にて弥山本願と称せし寺なりいまは廢れたり

西方院さいほういん 眞言宗にして舊杜僧坊の一なり今は廢せられたり当院の庭園ハ雪舟

の造りたるものにて假山の雅致なること第一なり明治二十一年陸軍中將野

津氏こゝに別荘を設けられ現時は野津氏の所有となれり

御山登山の順路ごやまとうざんのじゆんろ

一の鳥居いちのとりい 御山の麓にあり是より御山登路の始なるを以て一の鳥居といふ因

に記す抑も御山ニは当社大神本島へ御臨幸の初め此の山に鎮坐ましますし事あるを以て大神の御山と称せしを中古ニ至り佛門の徒峯嶺の不凡なるにより須彌山に比し弥山と改めたりしが明治改革の際旧に復し御山と改唱することゝなれり

地藏堂 大師堂 火消不動堂 何れも一の鳥居より瀧の宮までの間に散在

す

御幸石みゆきし 治承四年高倉帝御幸の時この石上より瀑布を靱覽なし給ひしと云傳

ふ

瀧宮神社たきのみやじんしゃ 一の鳥居より一丁程登り御山の麓にあり御殿二間二尺四方拝殿

五間に二間の建築なり

祭神 湊津姫命みなつひめのみこと

白糸の瀧しろいと 御社の後にあり巖に一丈はかりの段ひとつあり其段に流るゝ水さ

二王門跡にほうもんのかど 伊勢町より長濱に越ゆる道にあり此處櫻樹多く霞たつ春の頃ハ

眺望最もよき所なり

揺岩ゆきいわ 大さ方一間はかり二王門跡より凡十八丁の東の方山上にあり

角佛堂かくぶつどう 二王門跡の北にある堂を云ふ役の行者を安置す

長濱ながはま 一名八重濱と云ふ海濱すへて白砂にして老松生ひ茂り前に滄海を望み

景色優れたる地なり

神代より今も絶せぬ八かさねの濱の真砂は闊浮檀金

人麿

長濱神社ながはまじんじゃ

祭神 興津彦神 興津姫神

相殿 所の翁

海水浴場かいすよく 長濱にあり夏時納涼の頃は浴客殊に多し因に記す本島の海濱ハ

潮流の緩急波動の強弱其度に適ひたるを以て病者の治功を奏するもの少からす特に近年ハ一般に衛生の道に心を用ふるもの多ければ初夏より晩秋の頃まで来客群集するに至れり一体この海水浴は往昔よりも世人の行ひしものにして石川丈山の千疊閣に於ける落書とて左の詩も傳はれり

一鳥周廻唯七里層峯蒼鬱勢峴然衆

人浴澡長濱水群女徘徊小浦邊塔傍山

堂高聳漢寺棲林壑薄籠烟飛樓湧殿連

江曲無數神燈照客舩

石川丈山

西行辰さいぎょうあち 長濱より小浦に帰る道なり昔し西行法師此島へ渡りし時此所に

て老嫗に出逢ひ道を問ひしに老女答へをせさりければ西行これを見て「空

蟬のもぬけのからにこと問へは山路をさへにをしへさりけり」と一首の歌

を詠まれければ此の老嫗うちあみて云ひけるにはもぬけのからかこそ詠むへけれ既にもぬけのからと定め給ひたればなにかハおしへまゐらすべきといへり西行此の詞を聞てこゝより引返し帰りしといふ

小浦こみづ 漁子どもの住家あり昔時ハ僅の家数なりしに今は軒を並へて町のかたちを為せり

宮の尾みやのび 小浦の上の山を云ふ今伊勢宮鎮坐し給ふを以て名つく此所に毛利元就陶全姜と合戦の時陣屋を設けたる所あり為に又要害の鼻とも云ふ

水天宮すいてんぐう 濱の町にあり

祭神 大綿津見神 安徳天皇 二位尼

有の浦ありのうら 濱の町より南海濱人家建並ふ所を云ふ諸國より参詣の船舶皆此ところ湊ひ帆檣林立旅客の送迎諸荷物の運輸常に賑しき所なり有の浦客舩とて本島八景の一なり

有の浦客舩 八景の一

つなきよるたよりや有の浦浪にとまりさたむる舟そ数そふ

参議公長

激瀨波光有浦前石磯一望水連天無朝

無暮問津聒去々々々幾客舩

民部藤原為經

群帆落日向千山繫纜翠巖碧石灣借問

東西南北客夢魂應不至人間

僧獨麟

高倉天皇還幸のみきり此沖にて

まり同地に於て薨し給ひしと而して安藝国佐伯郡より石州に通する道に方
りて明石と呼へる村あり（この地に人麿を祭る）又明石崎、柿の浦など称
する地ありていつれも本島に接近せる真向ひの地方なりされば人麿の彼の
「ほのく」との名歌はまつたく右の明石より厳島を望みて詠し給ひしも
のなりと古老の云ひ傳へるあり如何にや」

稱名庵 〈浄土宗庵室にして鳥居松の麓にあり〉

北の神社 〈稱名庵の北手の岡にあり〉

祭神 猿田彦大神

寶壽院 〈稱名庵北手にあり真言宗なり本尊ハ阿彌陀如来往古網の浦の海中よ
り顕れ給ひし靈佛なりと云ひ傳ふ寺内に豊太閤の納め給ひし薬師如来を安

置す

瀧の尾 〈舊時大御堂と称し丈六の大佛を安置しありたり今は廢せられて原野
となれり山麓に小瀧あり故にこの名あり此邊大なる櫻樹多し旧時茶屋あり

櫻の茶屋とも云ふ

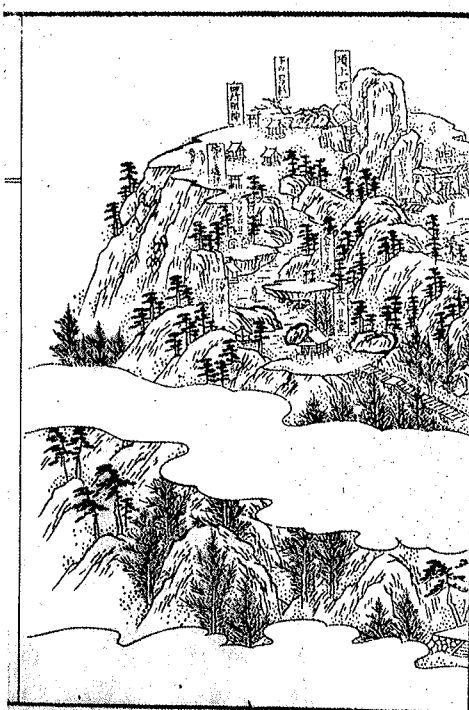
金石地藏 〈德寿庵と称し禪宗の庵寺なり本尊石佛地藏尊佛体金質に化し半身
は鍍黒色に變し給ふあらたなる佛像なり〉

新町 〈維新の以前にありてハ盛なる遊廓なり全盛の大夫も夥敷ありて賑ハへ
る所なりしが今ハ廢れて僅に民家の四五軒を存すのみ

今伊勢宮 〈伊勢町の山上にあり

祭神 天照皇大神

存光寺 〈禪宗にして伊勢宮の下にあり



て参詣の旅客に馴れ食を求るなど他郷に比類なき事なり

谷ヶ原の麋鹿 八景の一

鳴鹿の聲そ秋なるやつかはら岡邊の松ハときわなからに

親御中郎將実積

傳道原頭物色幽清風爽氣不因秋數株

松樹陰森處旦暮只看麋鹿遊

翰林学士菅原為範

三翁神社 荒胡子神社の東手にあり前ハ御垣か原とて本社之裏手なる廣場に

向ふ御殿三棟にして何れも七尺二寸四方拝殿桁行六間一尺梁五間前に金の

鳥居あり

祭神 佐伯鞍職 所の翁 岩木翁

相殿 大己貴命 平清盛

大芝居 三翁社の東南に在り毎年陰曆三月六月九月祭事の節芝居を興行す維

新前ハ毎年大阪より大芝居を呼寄せ興行を為すの例なりしか故に舞臺棧敷

等廣大なりしも火災の爲め再築して其規模昔しの如くならずありしか明治

二十八年宝物陳列館新築ニ依り悉く解き拂となりていまた他に建設の途に

至らず

御垣原 荒胡子神社より三翁社大芝居の前の廣場をいふ

荒胡子神社 文庫の東手にあり

祭神 素戔鳴尊

文庫 千疊閣の南石階を下りて右手にあり本社之書籍等をおさむ

龜居山 本社之東に当り三笠濱の背後なる岡を總稱す上に千疊閣五層塔あり

眺望の最佳なる所なり

五重塔 午未に向ふ二間半四方高さ十五間余天文元壬辰足利義晴建立あり

慶長五庚子年毛利輝元再興なりと云傳ふ

千疊閣 桁行二十五間梁行十八間四方椽幅九尺欄干附天正十五年三月豊臣

秀吉公筑紫征伐下向の時参詣あり神明の加護を祈願し給ひ翌年凱旋の際毛

利輝元に命して建立ありしと云傳ふ旧時は毎月千僧を集め一切經一万部經

等誦讀せしめ供養を行ふの例ありしと云ふ

千人閣上憶豊公曾宴群雄酣戰功當

日豪華今已盡沐猴獨戲落花風

木原棗宅

豐國神社 千疊閣の中にあり舊時は千疊閣を經堂と稱し本尊釈迦如来脇立に

は阿難加葉菩薩を安置しありしに維新改革の際此を廢して豊太閤を祭らる

塔の岡 三翁神社より大町を登りつめし所をいふ此地海岸船舶の出入するを

瞰下し眺望最も佳なる處なり

光明院 浄土宗なり以上八人の開基にして天文年中建立せしものなり毎年

陰曆六月二十五日什物を陳列して諸人に縦覽を許す古器物書画等看るへき

もの多し

鳥居松 光明院の北手なる岡にあり並ひ立てる様の鳥居に似たるを以て其名

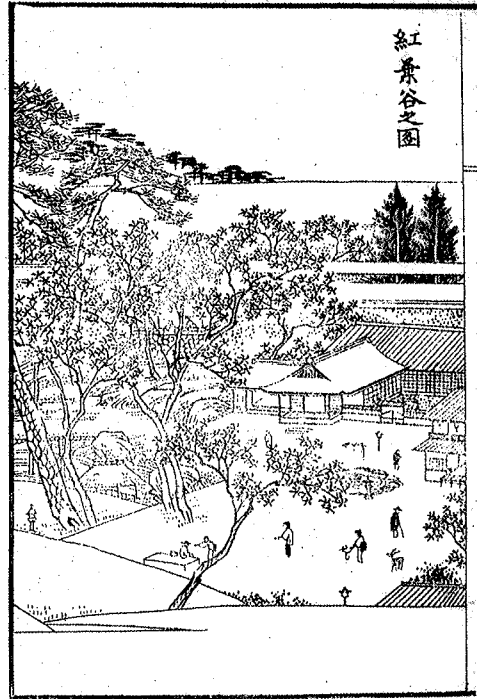
あり一望市中を見下して眺めよき所とす

本町 鳥居松の邊より俯視して人家櫛比する所一体を本町と總稱す北の町中

の町幸町等の數町この内にあり

人麋神社 中の町尋常小学校の後なる山麓にあり因に云ふ人麋ハ石州にとゞ

紅葉谷之圖



きも緑翠陰翳溪流清潔夏時納涼を以て第一となす
あきやまにそめし心のミヤひともとりてそしのふもみち葉の色

本居大平

夏の日をよりてそ遊ぶ紅葉川あしろに似たる涼み所に

元貞

紅葉亭にて雨を聴く

楓より又花よりもうるはしき軒の青葉の五月雨の頃

杉聽雨

此是靖州三勝一神明護得幾千秋滿溪

紅葉画圖裡一道鳴泉繞屋流

谷干城

來愛楓林野鹿迎小亭眠足午陰清狂雷

忽起頑雲近只有雨痕譁水聲

井上世外

丹楓蔭冷水奔流臨水家々起小樓想得

絃歌人散後數聲鳴鹿滿山秋

木原葉宅

四宮神社（紅葉谷にあり）

祭神 不詳

南谷大國社（同所に在り）

祭神 大國主神

谷ヶ原（紅葉谷の北東なる山麓の平地なり東北に山を負ひ暖地なるを以て麋

鹿常にこゝに群をなす殊に晩秋の頃なとハ妻こふ聲なとあり風流人士の幽
邃を愛するに適したる所なり因に記す康は世俗に純善の獸と称し殊に本島
に於てハ古来より大神の畜と云ひ尤も之を愛する習慣あり故に年々繁殖し
て其數夥しく或は市中に遊び或ハ海濱に眠むる様などは実に憎からぬ姿に

ふ櫻花満開の節ハ更にも云はず海濱邊に地方の村落を望み遠近に漁と
る海人の小舟の来往する様々と眺望毎に佳絶なる所なり

冬のうちに春は来にける紅葉谷一つ梢の花を見るかな 前田正名

麓の森 (橋山のあたりを云ふ)

梅さくらおなしさかりに咲にけりふもとの森のはつ春の空 源順

經の尾 (大元神社より東に出て石風呂の後東手の岡の邊をいふ昔し清盛公

許多の小石に法華經の題目を書して之を埋め其上に一基の宝塔を築きけり

今猶ほ一石の小塔を存す

多寶塔 (中西町岡の上に建てり本尊藥師如來を安置す方三間にして高八間あ

り二層の構造なり大永三年に建立せしものと云ひ傳ふ維新改革より佛体を

廢し加藤清正公の靈を安置し宝山神社と称す

留主口胡子社 (中西町にあり)

祭神 佐伯鞍職

金刀比羅神社 (中西町にあり)

祭神 大物主神

御花島 (西廻廊上の土手御手洗川に傍ひたる所を云ふ道の左右に櫻樹数株

あり)

御幸松 (御花島にあり後白河天皇御臨幸のとき此所に黒木の御所を建て給ひ

しと云ふ其記念として植置し松樹ハ幾多の星霜を経て巨木となりしか今ハ

僅に其根株を存せり)

御衣裳藏 (御花島の東本社裏手にあり能舞に用ふる衣裳を納めあり)

御手洗川 (御衣裳藏の前なる川流を云ふ水源は紅葉谷の奥より出て松原に沿

ひて海二入る一名御靈川とも云ふ昔しは此流れを汲み神供に用ひしとかや

ゆへにその名あり)

筋違橋 (御手洗川に架せる橋なり渡り詰めより山手の方を瀧町といふ但し元

は板なりしが今ハ石橋となれり)

寶庫 (筋違橋を渡り左り御手洗川の上に在り本社の宝藏にして古器宝物を納

むる所なり其構造は木材を井桁の如く組み重ね壁となして土を用ひす往古

の建設にかゝれるものなり)

庫中に納めある寶物は刀劔甲冑書画經卷鏡玉樂器等の類にして

其數枚舉するに遑あらず何れも稀代の珍寶なり卷末に其品目を

列記す好事の看官熟覽し給ふへし若し實見を希望するものハ本

社々務所へ就き拝見を請ふ時ハ縦覽を許さるゝなり

御寶物陳列館 (本社の後御垣の原にあり桁行十二間梁行六間○明治二十八

年博覽會に付特に此館を建設して寶物を陳列せらる而して爾後ハ同館に於

て毎に陳列縦覽を許さるゝと云ふ)

秋葉神社 (南町中程に在り此の社の中に古き石燈籠あり有王丸の寄附せしも

のと云ふ)

祭神 火産靈神

紅葉谷 (御手洗川の上流にして南町の奥にあり谷深く水清し奇石怪巖を以て

岸をなし水聲潺々響を生す岸上に楓樹多く染盡す秋の頃は千枝爛熳紅錦を

曝す樹下に巖濺亭と名くる會席あり幽静閑遠眺望の佳なる春夏秋冬の別な

て石を敷きた、みて室を作る其廣さ六七尺高さ丈余あり松葉を
 燒き室内を温め置き藻草をしき潮水をそそき病者を其内に坐せ
 しむ古來此風呂に入り宿痼を癒せしもの其数少なからず今に至
 りて毎年初夏の頃治癒を求むるもの踵を接せり

大元浦

〔石風呂の西にあり此の地大元浦と云ひ又竹原濱とも云ふ（柿本人麿
 の歌に「竹はらのよにも絶せしはま風の吹こそはらへミさはりの雲」とあり）
 泉石幽邃の地にして櫻樹数株あり百千鳥囀る春の頃ハ殊に風景の佳き所
 なり大元神社は島中もつとも古社にして俚俗に島の地主神とも云ひ傳ふ〕

大元神社

寶殿 〔桁行二間三尺梁行二間三尺〕



大元神社

幣殿 〔桁行一丈一尺梁行二間二尺〕

拝殿 〔桁行五間三尺梁行二間一尺〕

瑞籬 〔廻り十四間〕

祭神 國常立尊 大山祇神 大國主神

相殿 佐伯鞍職

大元櫻花

〔本島八景の一なり大元神社の傍らなる櫻花妖艶の景色を云ふ満
 開の頃ハ騷人墨客の花下に遊宴を催し春を賞するものいと多し〕
 見まほしき花の下かけこれもまた神の井垣や越てとはまし

冷泉亞相為久

祠在仙山蒼波濱白櫻相映滿階春雲蒸

霞散常彷彿一段風流仰此神

從二位藤原韶光

杜下白櫻交影深濃雲淡靄共森々三春

花事無多日坐愛千金一刻陰

北村篤所

心ある人や手向にうゑそへてさくらそしけき大元のミヤ

宣阿

時雨の櫻樹

〔大元神社境内にあり往時ハ樹下に八幡宮社ありし今は廢せら
 れたり〕

橋山

〔大元神社の後山の麓を云ふ此の邊り時鳥を聞によき所なり〕

五月雨にたち花山の時鳥ふもとの森によなくそなく

在原業平

匂ふらん橋山のやま風に麓の森のかなたこなたは

伊勢大輔

〔附して云ふ大元神社の後なる河流の兩岸櫻樹の下に會席を設け是を白

雲洞と呼ぶ谷深くして清流は奇石怪巖の間を奔れりこれを大元川とい

處神仙境百八廻廊一杜壇

釋自休

海上巍然神女廟山間幽邃梵王家春風

滿島二三月處々香雲皆是花

頼杏坪

立婦り都の人に語らんも言葉つくさしいつきしま山

岩倉具選

華表蘸潮艇日通幾回靈境拜仙宮月前

疑雨潏々水霜後欺花處々楓千疊閣開

臨翠壁五層塔秀挿青空徘徊更合問

遺跡義戰長傳當日功

杉聽雨

大國神社 本社の左にあり平橋につらなりある社なり宮殿桁行四間三尺梁行

四間四尺

祭神 大國主神 相殿 保食神

連歌殿 本社左の平橋の側に在り往古神職の輩毎月連歌會の催し有り其度に用ひたるものなり内に天満宮を安置しあり

祭神 天満宮

平橋 本社左に有る大國主神社の前より花畠の土手に向け架したる板橋を云ふ長十九間幅二間

輪橋 平橋の左廻廊續きにあり半圓形をなす長十四間幅二間

行宮跡 治承四年三月十九日高倉天皇御臨幸の時黒木の御所を設けられし所今の能舞臺の所なりと云傳ふ

能舞臺 本社西に在り廻廊と相對す陰曆三月十六日より三日間桃花祭の式あり其時亂舞を行ふ所なり建物三間四方外脇坐二尺四寸地謡坐九尺橋懸り

長七間幅二間梁屋五間に三間

繪馬額 東廻廊より拜殿殿殿西廻廊等に掲けあるもの數百面其中有名のもの

を撰し卷末に其目錄を附す看官就きて見給ふへし

松原 本社西廻廊を出て西に向ひたる所海中に突出したる松原を云ふ百八個

の石燈籠あり此處より有の浦小浦長濱などの景色を望むよろしき所なり

大願寺 本社西廻廊を出て御手洗川の下流を渡り大西町に入る樓門あり真言宗にして龜居山放光院と号す維新以前ハ本社「社本願」と稱して僧職

し寺内庭前に老松あり傳へ云ふ小松内府重盛手つから植るところのものなりと今は枯朽して僅に其幹株を存するのみなり

住吉神社 大願寺境内に在り元龜二年吉田兼右卿下向のとき勸請せられしものなり

祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命 三坐

大風呂釜 昔し清盛公の寄附に係れり後大江元就公再興せらる其風呂の臺石横石堅石等に平清盛大江元就同隆元吉川元春小早川隆景等の名を銘せり石

と稱し来れとも実ハ鍊にて作れるものなり是れ昔し社家供僧社役行水に用ひし風呂なりし今ハ大願寺の境内にあり

石風呂 大元神社の東海岸に在り此地市街を隔ち最も閑静の地なり殊に門前海濱に數株の櫻樹あるをもて艷陽の花の頃などは遊客の杖を曳くもの多く眺望のよき所なり

傳へ云ふこの風呂ハ古昔彌山にて求聞持修行の僧徒風濕の氣に悩めるものを癒さしむる為めに弘法大師の造り給ひしものに

國常立尊 くにとこたちのかみ 天照皇大神 あまてらすおほかみ 素盞鳴尊 すさのをのり

三座外三十三坐

安藝國二十浦十嶋をよめる其中に恩賀島を殊にめてし心なり神の御徳のかうはしきゆへの名なり又神の御恩賀の浅からぬをもて名つくともいふ恩賀の二字をたくひなきと訓す

入海の二十うらかけて十嶋なる中に香深き島ハ七浦

小野篁

たくひなき島のすかたはおのつからよもきの山もこゝにありけり

在原業平

さをしかの月にさやけき宮居哉

大内義隆

僧海量のたゝへ言葉集に今此いつきしまの世に秀てたることとをあけつらは、松島はし立蔽島の三つハをかしくゆたに奇しく怪しき類ひにあらす清けくこまやかにうるはしくのとかなるかたにして其地をふミと見かうみ徘徊ふねうけすゑこゝかしこ漕めくり眼をよるこはしめ心をなくさましむるに世に秀てたりとめてはやさんことうへなりさて三つの内たかひにそのふりくこそ異なれいつれおとりまさりハあるへからされと松嶋橋立は浦邊島回到其たくへるところなきにあらす此しまのみわしのもと大床の下までうしほのミち来るよそほひまことに世にたくひなき名ぐはしきところなりとめではやすへきにこそうたよみしていへらく

宮柱ふとしく建てるミつ垣に汐の満くる島そこの嶋

僧海量

わたつミの神の宮かもしなをかもいつきしまべの神の瑞籬

同

みつ垣に満来る汐に燈火の影そ移れる乏しきまでに 同

朝にけに見れともあかす神風のいつきしまひによする白浪 同
安藝の海いつきしまねの動なくさかはへゆかないく萬代に 同

ミな月三日いつくしまにて

さす汐も光をそへて島の名の宮居涼しき夏の夜の月

似雲法師

同夜わた殿の百八燈をおかみたてまつりて

ところからたつの宮居もうかふかと見へてつらなる浪の燈火 同

めのまへに見るこゝちしていつきしまいつ来ぬらんとたとるうつし繪 本居宣長

安藝のいつくしまにて

やはらくる光りも高き宮嶋の神にあゆみをはこふ諸人

中納言持豊

海原やまたもたくひは浪のうへに宮居しめたる蔽島哉

同

ミつしほはたゝ大海のいつみかな

宗祇

みつしほに月よりうへの宮居かな

宗長

満しほにうかふやかめの花の山

遊行

恭惟市杵島姫命神聖靈蹤益壯哉廟貌

巋然浮海水怪看蟹氣吐樓臺

石川丈山

後青山兮前水濱德輝蔽島大明神今宵

有心萬燈闇百八廻廊月一輪

釋江月

水是潮兮山是島山光相映落波瀾不離當

其卒都婆の漂着したる所なり

康頼石燈籠 （卒都婆旧跡の邊りにあり康頼入道帰京の後神徳報謝のため自ら

寄進建立せしものと云傳ふ

本社殿島神社 （宝殿ハ戊亥に向き前は滄海に臨み後に鬱蒼たる樹林を負ふ）

寶殿 （桁行十二間七寸梁行五間五尺五寸）

玉殿 （鎮座の正殿を云ふ） 六座

大床 （宝殿の周圍を云ふ四方椽幅五尺周り二十八丈五尺欄干付）

幣殿 （宝殿の前にあり桁行三間二尺梁行二間五尺）

拜殿 （幣殿の前にあり三棟にして桁行十五間一尺三寸梁行六間五尺）

祓殿 （拜殿の前を云ふ桁行八間七尺七寸梁行五間三尺）

高舞臺 （伶人舞樂を演ずる所長四間幅三間欄干付）

樂房 （平舞臺の左右の端にあり桁行五間五尺梁行二間五寸）

平舞臺 （高舞臺兩脇の板敷を云ふ二百十三坪あり臺下石の足柱三百十二

本ことくく赤馬関の石を用ふ

門客神社 （火燒前の左右樂房と並ぶ俗に沖の恵比須社と称せり）

祭神 豐石窓命 櫛石窓命 二字

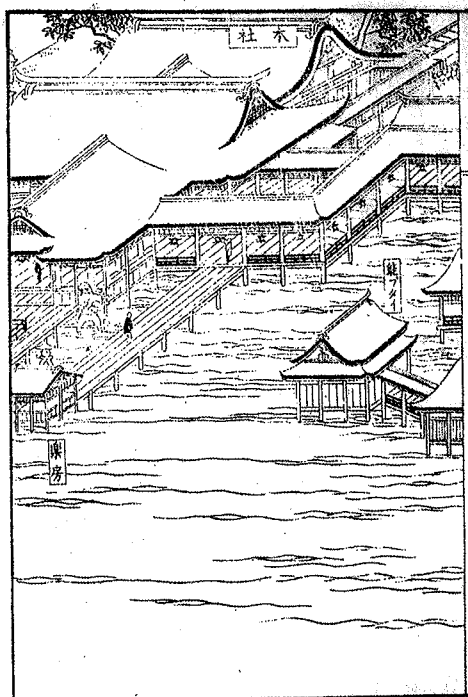
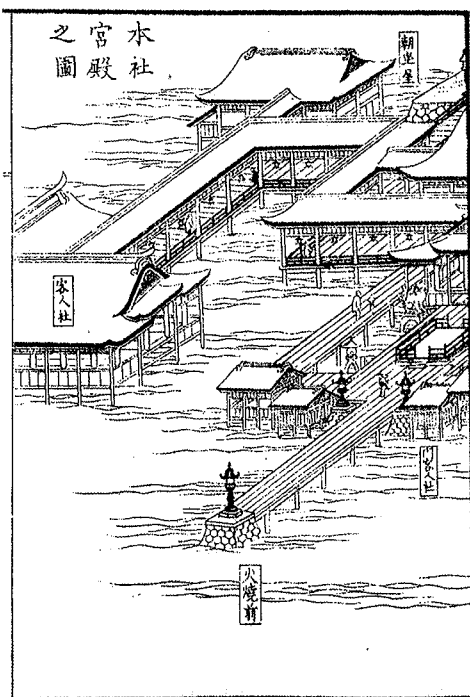
火燒前 （平舞臺の正面海中に長く突き出たる所を云ふ俗に舌先とも称す

幅一間五尺三寸長さ七間一尺三寸

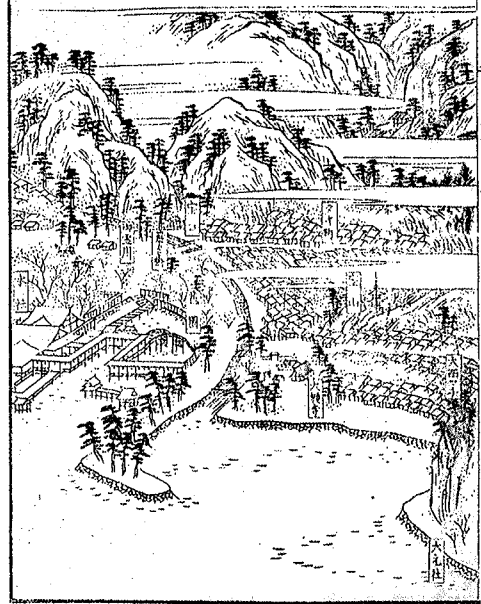
本殿祭神

市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命 三座

相殿



嚴島全圖



景の一にて秋夜月光をすましむるときは一層の清景なり

鏡池秋月 八景の一

ところから月も鏡の池の名を見せてや秋のかげみがくらん

羽林雅季

海門靈跡甲西洲嚴島佳名千古悠多少

行人富觀賞瑤池明月鏡池秋

三位清原宣通

みやしろにかくる光も曇なき鏡の池にすめる月影

梅月堂宣阿

朝坐屋あさざや へ是は往昔神職の社事を取扱ひたる勤務所なり桁行十一間二尺梁行四

間四尺

朝坐屋清水あさざのしみづ へ朝坐屋の後にあり最も清冷なり昔し難治の病者此の水を呑み癒

ゆえを得たるもの数す多くありしかや故に棄の清水とも云ひ傳ふ

卒都婆の舊跡そとばのふるあと へ本社と朝坐屋との間鏡池の内にあり昔し法勝寺の入道俊寛

丹波少將成経平判官康頼の三人鬼界島へ流罪となりしとき平判官康頼ハ都

に残り給ひし老母を思ひ出てせめての便りにもやと千本の卒都婆を作り「薩

广かた沖の小島に我ハありと親には告よ八重の汐風」おもひやれしはしと

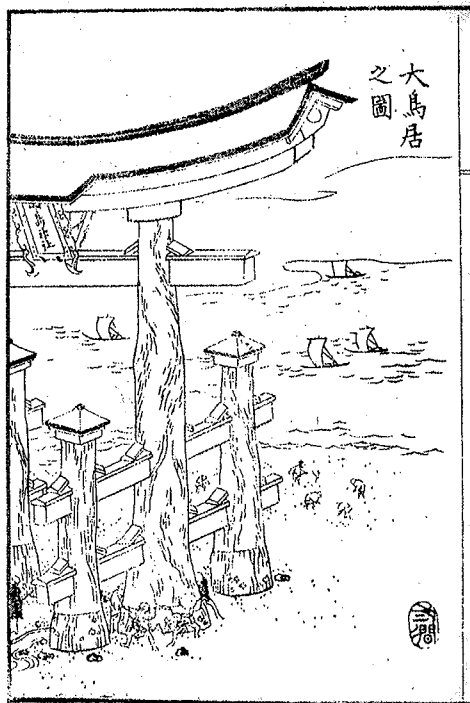
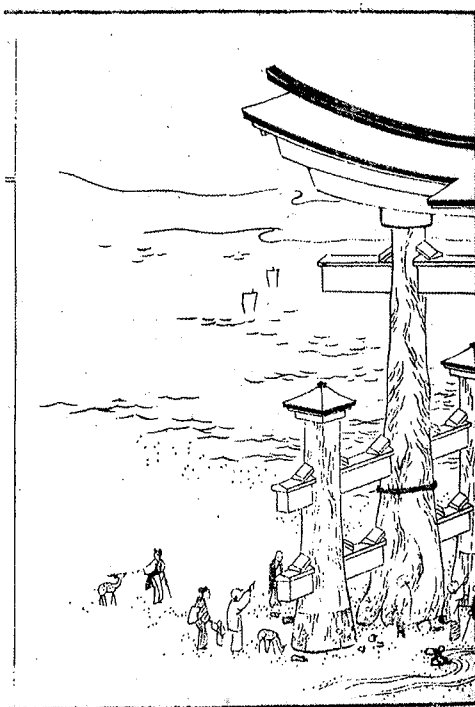
思ふ旅たにもなを古郷は恋しきものを」と二首の歌并に姓氏を彫刻ミ熊野

神社嚴島神社に祈誓をかけて流しければ其卒都婆此の渚に漂着しけり当時

康頼入道に縁ある僧此の卒都婆を都に送り法皇の教覽に供しければ法皇そ

の孝養の志を哀愍し給ひ又平相國清盛も入道の善根を感じ終に康頼入道を

都へ帰しけるとそ実に神明の加護靈驗にこそ此の事源平盛衰記に詳なり是



大島居
之圖

するに随て響き鳴る燈火波に映する景色最も美觀なりけるを以て本島八景
の一到社頭明燈とて廻廊燈火の夜景を賞しけり

社頭明燈 八景の一

汐みてはなみにうつるも数を見るこの宮嶋のミヤのとし火

正二位通躬

いつくしまあまねき月の外にまた光たふとき宮のとし火 隆正

嚴島雲晴飛繡薨宮廊壯觀壓西瀛神燈

波面幾千點添着和光夜々明

二品親王堯延

宮嶋やとふろふの火に明やすし

其角

客神社 本社かくじんしゃの廻廊續きにあり宝殿は未申に向ひ後に瑞籬をめぐらし前に拝

殿祓殿あり

寶殿 桁行七間七寸梁行四間五尺

玉殿 五座

大床 四方椽幅五尺周り十九丈四尺

幣殿 桁行二間四尺梁行二間一尺

拝殿 三棟桁行十二間八寸梁行三間四尺八寸

祓殿 組入桁行五間梁行四間

祭神

天忍穗耳尊 あめののしをみみのこと 天穗日命 あめのほひのこと 天津彦根命 あまつひこみこと

活津彦根命 いくつひのこみこと 熊野櫛檀日命 くまのくすひのこみこと

鏡池 客神社と朝坐屋の間にあり汐干たるときは別に一小池をなす當島八

は沖二三町はかり干潟となり麋鹿群をなして砂上を徘徊し汐満るときは参詣の帆船も自由に鳥居の下をく、り入り来りて廻廊の板敷に轡をかくることを得るなり

柱 へ高さ四丈四尺三寸四歩廻り二丈七尺両柱の距離三丈五尺八寸

副柱 へ高さ二丈八尺廻一丈八尺袖貫長三丈六尺六寸同幅二尺四寸五分厚

さ九寸

大貫 へ幅中にて二尺九寸五分左右的端にて三尺三寸長六丈六寸厚一尺一

寸

棟 へ長七丈四尺五寸笠木長六丈九尺二寸嶋木六丈三尺四寸

屋根幅 へ片流れ一丈二尺六寸額庇二尺七寸ツ、長く出ツ

總高 へ五丈四尺六寸四分

額面 へ長八尺六寸幅五尺八寸

へ大鳥居の建立は推古天皇の御宇創立せられ仁平二年平清盛再建寛元仁治の頃本社修造の時改め造り其後弘安九年應永四年天文十六年永祿四年元文四年享和元年数度改め造らる現時建てるものハ明治七年十二月斧始めあり同八年七月落成せしものなり昔の額面ハ表は小野道風裏ハ空海上人の筆にてありしか其後後奈良天皇の宸筆を掲けしなり現時のものハ有栖川二品熾仁親王の御筆にて表面は嚴島神社の四字裏面ハ伊都岐島神社の六字なり

これてたる秋のすかたや大鳥居

蒼虬

一ツならず又二柱三ツしほのよみ盡されぬいつきしま山

蜀山人

宮羣貝 へ此の華表の汀に種々貝類あり其中にあざり貝に宮殿の形又ハ鳥居

の形状を自然と模様と顯したるあり是を宮うつし貝と稱し名産の一なり
所からなみのしらゆふかけまくもかしこき神のミやうつし貝

山田貴三

玉の御池 へ大鳥居より内入江をすへて御池といふ

妙なりや玉の御池に影さへて光りか、やく浪のまに／＼ 貫之

三笠濱 へ大鳥居の東の沙潟より本社廻廊の入口に至る鳥居山のおもとなる老

松殖ひ茂れる所を云ふ左ハ本社宮殿を拝し右ハ滄海を隔て佐伯郡の諸山を迎へ水中に突立せる大華表を望み景色清くして美しき所なり三笠濱の鋪雪とて本鳥八景の一なる名所なり

御笠濱鋪雪 八景の一

浦波のいろもひとつにふりつもる雪をみかさの濱の真砂地

從三位實岑

白雪重々御笠濱平沙十里更清新夜來

最覺好風色寒月和光同玉塵 菅原在兼朝臣

誰もミな家路わすれて来てそ見る御笠の濱の雪の夕暮

議官福羽美靜

神庭 へ御維新以後此所にかりに設けらる

廻廊 へ本社の兩脇に屈曲して長さ百八間幅二間あり各八尺を一間とし間毎

に鍍燈籠一個を釣るし敷板は一間に八枚宛敷並へ釘を用ひす故を以て歩行

月並祭つきなみまつり 一月十七日より毎月十七日を行ひ供物献上音楽を奏上す

初申祭はつさるまつり 陰曆二月初の申の日此を行ふ舊時ハ大祭にして勅使御代拝あり今

ハ只供物を奉るのみなり

推古天皇祭 四月十八日舞樂に振鉾、萬歳樂、延喜樂、陵王、納曾利あり

桃花祭とうかまつり 陰曆三月十五日此の祭事ハ薄暮より始め音楽を奏し桃花を奉る舞樂

に振鉾、曾利古、一曲、萬歳樂、延喜樂、散手、貴德、陵王、納曾利あり

講社安全靈神祭かうしやあんぜんれいじんまつり 五月十四日神饌舞樂あり講中の信徒幣殿にて拜禮を行ふ

教會講中靈神祭きやうくわいこうちゆう 五月十五日之を行ふ

講社島巡かうしやしまめぐり 五月十五日之を行ふ

管絃祭くわんげんまつり 陰曆六月十七日此の祭典は本社年中の大祭にて其盛大なるハ古來

関西第一と称したり祭式の概畧を掲くれハ神輿を乗せ奉る松を管絃松と唱

へ松三艘を組合せ屋形を仕つらい幕を張り爐の方には神鏡をかけ舳の左右

にハ宝劔玉鉾を建て紅色の提燈數十顆を釣りて粧ひし中央に神輿を安置し

神官左右に羅列し管絃を奏す水主十二人烏帽子素袍を着て左右に篝火をた

く引船二艘を牽おして御船を引く供船ハ何れも其後に従ふ祭式は薄暮潮の

満來るを待ち御船を大鳥居の内より漕出し地御前神社の廣前に渡り神事終

りて長濱神社へ還御管絃あり夫より大元神社に渡御管絃を奏し終りて大鳥

居に入り客神社廣前にて神事あり何れも神事の節ハ管絃を奏す夫より玉の

御池に於て神輿の船を三回めぐらして本社廣前にて神事あり夫より還幸な

し奉る其儀式の嚴肅なる人をして渴仰の思を深からしむ当夜四方より群集

の船いつれも献燈を帆檣に掲げ舳舳相接して恰も燈火を以て海面を充填す

るか如く實に海内に比類なき大祭なり

講社安全祭 十月十四日講中の禮拜五月の如く當日講社靈神祭を行ふ

講社島巡 十月十五日之を行ふ

菊花祭きくまつり 陰曆九月十五日式ハ桃花祭の如く薄暮より音楽を奏し菊花を奉る舞

樂には振鉾、曾利古、一曲、萬歳樂、延喜樂、散手、貴德、陵王、納曾利

等あり

天長節祭 十一月三日舞樂に振鉾、萬歳樂、延喜樂、陵王、納曾利等あり

御鎮座祭ごちんざまつり 陰曆十一月上の申の日此を行ふ旧時ハ奉幣使御代拝ありしか維新

後は供物を献し音楽を奏するのみなり

神衣裁縫かみいいたちぬい 十二月二十六日より二十九日に至る

御煤拂式ごすすきはらひしき 十二月三十一日

鎮火祭ちんくわまつり 十二月三十一日薄暮松明の式あり

○本社并摂社末社巡拜の順路

大石華表おおいしわらひ 脇の浦の海岸千疊閣の下にあり

柱 高さ三丈六尺 一回一丈三尺一寸

貫 長さ三丈九尺 幅二尺五寸

笠 長さ四丈二尺

總高 三丈九尺五寸

沓石 二丈四方

御額 嚴島神社の四字太政大臣三條實美公御筆

大鳥居 本社火焼前より五十二丈八尺を隔て海中に建てり此の邊り汐干る時

大内義興公大永二年正月二十三日御参詣御劔一腰御馬一疋を献し給

ふ大永四年正月二十八日再び御参詣両社へ御太刀銘の物を献し給ふ

大内義隆公御参詣あつて神領并神物御修造の料地を奉り給ひ天正十

一年五月二十日御参詣鎧一領御太刀一腰（銘宗光）御馬一疋を献し

給ふ同十六年大鳥居御再興後奈良帝宸筆の御額を捧給ふ

毛利元就公神領及び神物御修造の料地并鎧御劔太刀御馬を献し給ふ

毛利輝元公御参詣鎧御劔太刀等の御寄附数多あり

足利義昭公天正四年備後頼まで御下向の時御代参を立給ひ御劔御馬

を奉り給ふ

豊臣秀吉公天正十五年三月筑紫御征伐の砌御参詣ありて大神の冥助

を祈り給ひ翌年凱陣の時も御参詣あり毛利輝元公へ仰せ付られて千

疊閣を御建立又別に一万石の寄進状を納め給ふ

福島正則公御参詣あり神領及び神物御修造の料地を寄附し給ふ

浅野家に於ては元和五年以後神物神領御修造等の料を奉り給へり

○年中の祭日

官祭（官祭とは國幣中社宣下以来官廳に於て定められたる祭日にて祈年祭例

祭新嘗祭の節ハ地方長官参拝祭典式場に列席せらるゝ

月並祭（一月一日神供音楽二月以下連月行之）

元始祭（同月三日）

孝明天皇祭（二月三十日）

祈年祭（幣帛神饌音楽月日不定二月四日宮内省式部職に於て班幣あり地方廳

へ到着の上吉日として祭日を定む）

紀元節（二月十一日）

例祭（六月十七日祈年祭同断）

大祓（六月三十日）

神嘗祭（九月十七日）

新嘗祭（十一月二十三日祈年祭同断）

大祓（十二月三十一日）

除夜祭（十二月三十一日神饌音楽）

私祭（私祭とは旧例に従り往古より傳り来りたる儀式に倣ひ祭禮を行ふもの

にして官廳より挙行せらるゝ、祭事に區別する為め私祭と名づく）

神衣祭（二月一日午前第一時（子の上刻）神衣を内陣に奉る次に神酒を奉る

終て神官一同大床に於て神酒を頂戴す参詣の貴賤男女一同階下に進み同し

く神酒を頂戴することを得る）

新年祭（一月一日舞樂あり振鉦を挙行せらるゝ）

同二ノ祭（二月二日神饌舞樂に萬歳樂延喜樂を挙行せらるゝ）

同三ノ祭（二月三日神饌舞樂に大平樂、狛鉦、胡德樂、陵王、納曾利あり）

楊枝献上祭（二月四日楊枝を奉る楊枝ハ当島物産の第一なるを以て古來此

を奉る例あり又當日より毎日洗米を奉る事なり）

斧始祭（一月四日）

地久祭（二月五日舞樂に振鉦、甘州、林哥、拔頭、還城樂あり當日ハ御寶祚

延長の御祈禱を挙行せらるゝ）

に治承四年三月十九日新院令參安藝國伊都岐島給四月九日還幸とあり。此時ハ御所を今の能舞臺の東に建て設け給ひしと云ひ傳ふ。高倉天皇御幸記に宮島の南の方三間四面の御所を造りて海のうへなぎさまで廊を造りつ、けて汐みたば御船をさしよせん支度をそしたる云々と見へたり。又同年九月二十一日高倉天皇再び御臨幸あり。百練抄に治承四年九月二十一日新院御幸嚴島第二箇度なり云々と見へたり。又古今著聞集に此時御手つから御願文御草ありて殿下普賢寺に清書させ給ひけり希代の御事にやかの御願文ことにめてたかりければ後日藏人宮内少輔親經表を書して奉りける云々と見へたり。降て明治十八年七月三十一日を以て今上天皇御臨幸あり鳳輦を大聖院に駐めさせ給ふ御供には北白河二品親王殿下宮内卿伊藤博文内務大輔芳川顯正其他貴顕の方々にて實に畏しきことなりけり。又明治二十七年十一月二十二日皇太子嘉仁親王殿下行啓紅葉谷岩村平助へ同日午後一時御着同三時還御あらせられたり。

○武將御崇敬の事項

小野好古源經基御參詣の事ハ賊伊豫掾純友九州に於て軍勢を集め軍威再び振ひける旨都へ注進ありければ洛中動搖大かたならすさらば重て追捕使を下さるへしとて左近衛少將小野好古大宰權少貳源經基兩大將として兵船二百艘を率ひて九州に發向せしめたり。時正二天慶三年春二月の事なりけり。去程に追捕使ハ日數經て安藝嚴島につかれ一日參籠ありて賊徒退治の事を祈り申されたり。

平相國清盛公は平家の繁昌を祈り給ひ月詣ふてなし終に仁平二申と

し兩宮殿并百八廻廊撰社堂塔に至るまで善を盡し美をつくして御造營あり神領をも増加し給ふ。又安徳天皇御産着經文三十二卷を納め給ふ。

小松重盛公ハ弘法大師阿界曼荼羅并甲冑を納め給ふ。

平宗盛公ハ御帶添（銘友成）を納め給ひ又弥山の鐘を寄進し給ふ。

能登守教經ハ御帶添（銘行吉）を納めらる。

右大將源賴朝卿ハ神領并神物御修造の料を奉り給ふ。

右大臣源實朝公承久二年當國佐伯郡三万石余を御寄附あつて神主を下し給ふ。

源賴經將軍仁治元年十一月二日御劔一腰を獻して天長地久國土安穩を祈り給ふ。

北條時宗公は弘安四年蒙古の賊船十万余艘我國に來りし時異賊降伏の御祈禱數日ありしとなり其後正應六年鎌倉より因幡國船岡郷の半分御寄進あり。

足利尊氏公ハ建武三年二月十八日御參詣ありて願文御劔（銘友成）

を獻し參籠して大神の加護を祈り給ふ。同年五月朔日所願成就して安

藝國造果保御造營の寄進狀を納め給ひ次て貞和四年八月二十六日安

藝國己斐村（除五十步）廻廊以下御造營に寄附し給ふ。

大内義弘公永徳元年七月朔日御參詣あつて安藝國志芳庄寄進狀を納め給ふ。

足利義滿將軍嘉慶三年三月十日參詣し給ふ。

石余を社納米として納められたり明治維新の後は朝廷より神社費として毎年金若干圓を頒附せられ宮殿の修理祭典儀式等総て官營と定めらる明治二十年以降ハ保存費として十五年間毎年金一千余圓を國庫より配附せられ社宇勝區を不朽に保存する事とハなりしか明治二十三年に至り更に其年限を三十ヶ年とせられたり

○神官の員數

明治維新の以前ハ両部の祭儀なるを以て社家あり供僧あり其他本社に隸屬するもの内侍社役人等夥多ありたれとも維新以後ハ宮司一人權宮司一人禰宜二人權祢宜三人主典五人其他等外五人の神官を設られ以前の神職なるものを廢せられ明治十年再ひ御改正ありて宮司一人禰宜一人主典三人等外五人となれり左に古來神職の員數を記す

社務大宮棚守職	一人	神主代上卿職	一人	昇殿六家祝師職	一人
大行事職	一人	檢校事職	一人	修理行事職	一人
横竹職	一人	客人社棚守職	一人	御燈司職	一人
兼舞方	十人	兼樂方	十人	地御前社棚守職	一人
本内侍	八人	同以下	二十八人	下官神樂男	五人
仕人	十一人	湯立祝者	十人	同神子	二人
神馬別當	一人	繪馬支配方	一人	下番人	二十人
燈明方	二十人				

別當職座主大聖院

社本願修理職大願寺

西方院

瀧本坊

圓城院

修善院

執行坊 東泉坊 松之坊 長樂寺
寶光院 龍燈院 増福坊 愛染院
花藏院 栃木坊 本覺坊 弥山本願職多聞坊
承仕 三人

右寺院を舊時ハ社僧と稱し何れも神社に屬する役僧たり維新後は悉皆廢寺となり現時僅に堂宇の存するもの三ヶ寺あり

能大夫 脇方 囃方 同音方
狂言方

大工職 小工職 棟梁 鍛冶師
檜皮師 瓦師 疊師

奉幣使代上卿職 一人 同以下神職 九人

右ハ國府に在住して二月、十一月初申日御鎮座祭の両度渡海の上立會して奉幣の式を執行あり國主より其料として毎年米六十六石寄附ありしなり

○鳳駕臨幸の次第

當社神明御神德の靈顯なるハ申すも畏こく上ハ天子の行幸を始め奉り代々將軍家の崇敬おろかならず天子自ら薨葬の禮を取り給ひし御始めは承安四年三月十六日後白河法皇御臨幸あり〔百練抄に承安四年三月十六日法皇（後白河建春門院臨幸四月九日還幸云々とあり）此時行宮を今の御幸松（御所の跡に植しを以て其松を御幸松と稱せり）の所に設けられしと云ひ傳ふ次て治承四年三月十九日高倉天皇御臨幸あり（山槐記

あり年々祭禮の節ハ縣知事御代拜奉幣の式等あり實にかしこき限りにこそ現時の宮殿廻廊ハ國幣中社に御勅宣ありし後官宮によりて御造営なりしものなり

○撰末社の個數

明治維新の以前ハ西部の祭儀なりし故を以て撰末社の數夥多ありしか明治五年神佛混淆分離改革の際或ハ廢社となし又は最寄の神社へ合祭し大に其數を減したり左に維新以前の撰末社を列記す其存廢を見易からしめん為め現時存在の社殿には△号を附し廢社合祭の社宇ハ×符を附す

△大元神社	△瀧宮神社	△御山神社	△長濱神社
△三翁神社	△今伊勢神社	△辻胡子神社	△荒胡子神社
△杉ノ浦神社	△鷹巢浦神社	△腰細浦神社	△青海苔浦神社
△山白濱神社	△洲屋浦神社	△御床浦神社	△包浦神社
△養父寄神社	△天神社	△大國神社	△豊國神社
△幸神社	△北ノ神社	△荒神社	△道祖神社
×牛王社	×湯殿山神社	×白山權現	×熊野神社
×谷藥師社	×中江藥師社	×谷ヶ原藥師社	×中間谷藥師社
△北藥師社	以上島内にあり		
△速田神社	△地御前神社	△大頭神社	△大瀧神社
△天皇神社	△惣社	△角振社	△官幣社

以上島外所々にあり

其他堂宇の存廢等も又左の如し

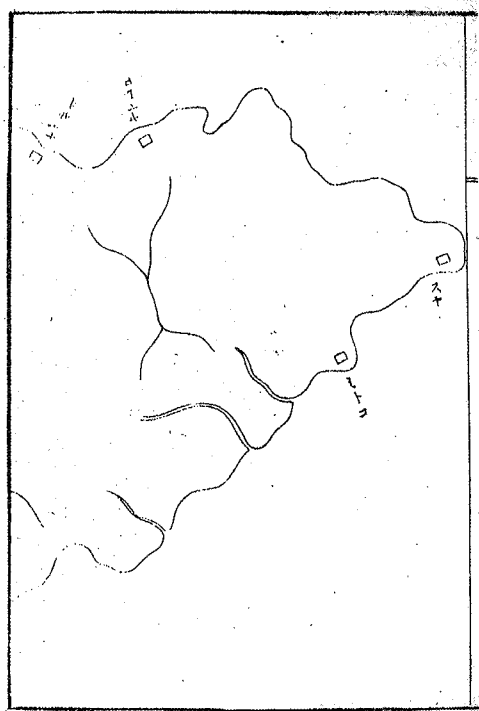
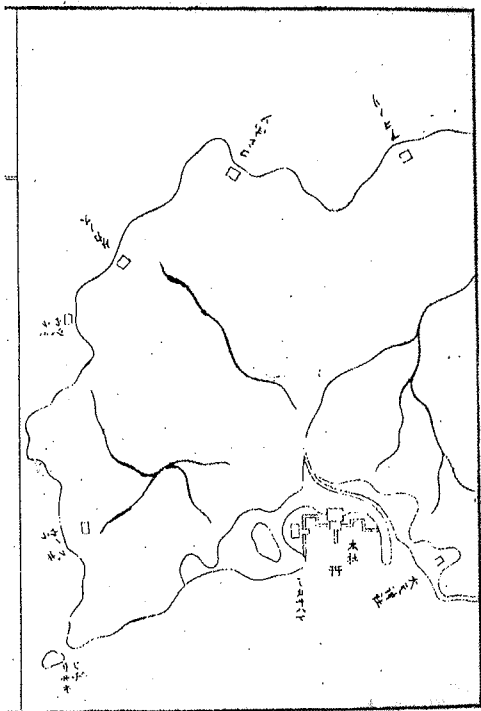
×本地堂	×大御堂	×二王門	×輪藏
×經納堂	×十王堂	×鐘樓	△五層塔
△多寶塔	△寶庫	△文庫	△千疊閣

都て撰末社堂塔百二字

○本社の収納

往古ハ神領なるものあり其收入を以て造殿祭式の經費を支辨せり聖德太子の傳記に伊都岐島神社神領ハ當國中水田一千百八十町修理八千余町とあり又或る書に仁平四年廳宣を以て高田郡三田一郷を神領に定むと記せり仁安元年の立券書にも一宮御領志道原合一町六反二百四十歩とあり安元元年春木市折西村御供田に附せられ同二年高田郷外七ヶ郷を附せらる治承四年に至り平清盛は安麻庄を寄附あり其後右大將源頼朝卿御崇敬ありて神領并に御修造料を奉獻し給ふ(御下文を納められたり今に傳りて宝庫に納む) 次て承久二年右大臣源實朝公當國佐伯郡一万六千貫の所領を寄附あり(此時高倉院の別當齋院の次官親能の男周防前司親實を神主職に補せられ佐伯の姓を給ひ御修理をも司とり佐伯郡桜尾に住して代々大神に奉仕せしか後ち天文十年親実十七代の孫上野介興藤に至り大内義隆公の爲めに其家亡ひぬ) 次て大内義隆ハ小方玖波黒川大野の四郷を寄附せらる其後毛利家ニ於てハ毎年米五千石を寄附せらる福島正則安藝國へ封せられ諸寺諸社の領園を削り其頃大に神領を減少せらる次て浅野家安藝國を領せられてより毎年米千六十六

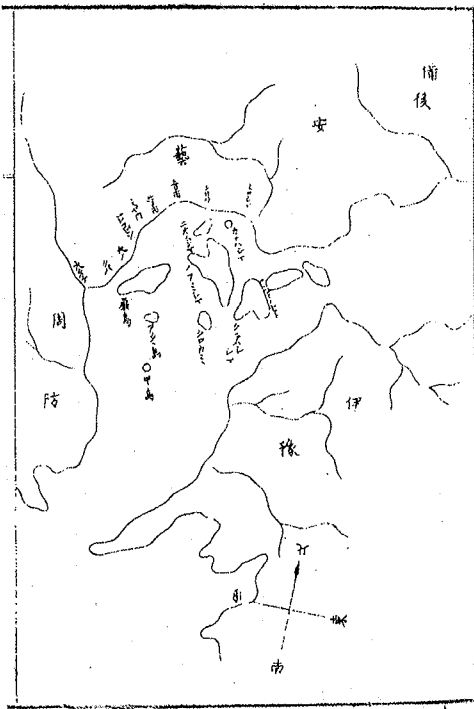
て宮殿を創建すと言ひ傳ふへ或る書に官奏の次第ハ佐伯鞍職神明憑談を行ひしに明神の宣まわく吾ハ幽事を治め百王を鎮護す汝朝廷に奏して此島に宮殿を造營すへしと由りて鞍職其次第を奏聞し勅命を得て社殿を造營するに至る其社地を定むるニ当り新に船を造り此島の浦々を見巡れる時靈鳥飛來りて船の導きをなし終に三笠濱に止る依て其地を卜して新營を造り建つ是を本社鎮坐の始めとす又靈鳥を平良の里に祭る今の平良村速田神社是なり靈鳥先導の事今に其例を存し島巡の時養父寄神社に於て五鳥鳥喰の式あり又或書に八人皇十一代垂仁天皇の御宇此島に鎮座し給ひへ今の御山神社其跡なり其後推古天皇の御宇今の地に移し祭れるなり爾來歷朝の天皇崇敬淺からず屢々御贈位あり△三代実録に御贈位の事見へたり往古ハ神に位階を奉る事あり其位階ハ神の尊卑を分かたふにあらす神領の多寡祭式をさたむるためなり人皇七十四代鳥羽天皇の御代に至り平相國清盛信仰深く大に神領を増加し社殿を修造し摂末社に至るまで修理を盡し壯觀を極るに至れり尚降て仁安元年祠官佐伯景弘私力を以て神殿を改め作る建永二年回祿の災に罹り官使を下して造營せらる貞應中再び火災あり安貞元年平宰相経隆當國の司として下向造營の事あり弘治二年毛利家より廻廊板を改め作らるへ陶全姜の合戦の時神前を汚穢せしを以てそれをきよめられしなり元龜三年毛利家ニ於て神殿を改め作らるへ永禄年中和智豊郷湯谷久豊兄弟を神殿に於て誅せられし穢れにより改造有しといふ當國の領主福島及び浅野家よりも数度社殿の修理ありたりし明治維新に際し改めて勅願所に定めさせられ次て同四年國幣中社に勅宣



嚴島獨案内

○嚴島の位置

嚴島ハ廣島縣安藝國佐伯郡の海中にあり廣島市街を去る西南五里許にして全島周圍凡そ七里西北は佐伯郡地方に向ひ僅に一葦水を隔て（海上遠きハ一里より近き所ハ十五六丁なり）廿日市、地御前、大野の諸村落と相對し東南ハ近くは似の島、能美嶋、なさひ、黒神、阿たさ、甲島等の諸島に面し遠くハ伊豫の諸山を望ミ遠眺の絶佳なるは申も更なり島中の峯嶺ハ峩々として雲に聳へ林樹蒼々として四時緑色を呈し海波滄然環りて風光を醺す実に天然の淨地にして古來我邦の人



海内三景の一と稱し山水の勝地なり子琴錢か日東第一勝と賞せしも亦溢美にあらざるなり

○島名の由来

嚴島ハ延喜式三代實錄拾芥抄の諸書にハ伊都岐島と記載せり舊とさせる名もなかりしに市杵島姫の命鎮坐ありしより市杵を伊都岐と呼ひ終に島の稱號となせしなり後世に至り更に文字を改め嚴島とは書なしたるへし維新以來は社名も終に嚴嶋神社と稱せらるゝ事とハなりぬ（尤宗祇名所方角抄には明神此島の山嶺のさまをいつくしと仰せありけるよりいつくしと号せりと記せり）又世俗にハ明神の鎮座し給ふを以て一般に宮島とも唱へ來れり或る文に往古ハ恩賀島御香島霧島我嶋など稱へたることありと見たれとも正史には更に見當りし所なし

○本社位置

本社ハ島の北面なる三笠濱に在り宮殿ハ戌亥に向ひ右方に千畳閣を仰き左傍に松原をひかへ大鳥居ハ海面に巍立し落潮の時をはるかに干潟となり潮水滴るときは廻廊瑞籬をひたし杜殿も波に浮ひ出る如く廊廓の往来ハさながら水の面を歩み廊下に游泳する鱗類も數へ得らるゝはかりにて宮殿の莊觀風景の佳勝なるは筆に盡すもおろかなり古昔僧海量の此島の宮殿を賞し清くこまやかにうるハしくのとかにて世に秀てたりと云ひしも誠にことほりなるかな

○鎮座の縁記

當杜御鎮座の始まり人皇三十四代推古天皇の御宇佐伯鞍職官奏を經

初夢夢遊世界
主宅仙嶼母華表
歸波海宇甘苦
蜀中秋空霜露

迹步族道徑
物依然人
紅葉思悠

明治甲午十一月

尋田偉史

凡例

一此の編は題辭に獨案内と掲けたる如く參詣者順拝の便路に従り大鳥居より本社に參拝し大元の社へ出て夫より紅葉谷に廻り東町山の手を過ぎ長濱に出て小浦に帰り夫より海岸を過ぎ千疊閣に歸り瀧町より大聖院に至るを第一段となし御山登山の參拝を第二段となし島巡り七浦七胡子神社順拝を第三段となす従りて各畧圖を載せ看官の辨となす翼くは參拝の諸彦能く畧圖を熟覽し書中と引合順路を知り給ふへし

一本島古來沿革の大概を知り易からしむるため左の區別を以て其次第を畧載す○第一嚴島の位置○第二島名の由來○第三本社の位置○第四鎮座の緣記○第五撰社末社の個數○第六本社の收納○第七神官の員數○第八鳳駕臨幸の次第○第九年中の祭日等をするす

一本編ハ現今杜宇佛刹古跡を案内し併て古來の沿革を指示するものなれば杜宇佛刹古跡等現在のものハ悉く擧て洩す事なし然れとも指せる由緒なく又は判明ならざる故事は総て是を畧省す

一社名地名の改りたる等の事ハ其所々にて改革の次第を明記すへて現在の實況を載て更に修飾を加ふる事なし

一佳景勝地にありては編者其風光の真影を述盡す能はざる所ありよりて古來名家の詩歌俳句を掲け叙事の助けを為す看官心して見給ふへし

丁巳仲夏三筆 廣谷行筆

仙山



獨步

一之少士題



丙大巨初書寫從位勳 寧機并能監君

客裏風光而意
愁夕陽人上古樓
樓海山指點曾



游地所背霜寒
衆島秋

甲午秋日堂應急據天宮家作

錦潤能監



新嚴島獨案内全撰

南洋平野翁起稿

鳳祥大石先生校訂

新撰
嚴島獨案内

蓬山堂藏板

内大臣位勲等德寺實則侯

蜃樓

貝闕

亥則書

具足圖油畫

絹細工人形押畫

曾我五郎乘馬圖

押畫楠公圖

俳諧發句 龜甲へ彫刻

嚴島七浦島廻圖

牡丹錦鷄 龜山福綱畫

馬

忠孝書

紫雲垂海 梧竹書

天然木天狗面

透彫近江八景

絹糸細工門覺上人

居管絃祭圖

八雲琴

天狗面 紙製

嚴哉德 宮小路康文書

高安流謠曲

眞貫流柔術

虎二竹ノ畫 湖南諸葛監畫

海老軒七勝詩文 寄合書

花鳥圖 岡煥畫

人物圖 松花堂元俗畫

書 賴杏坪

金牡丹孔雀圖

戰爭圖 義勝畫

龍 小龍畫

龍彫刻 工義爲

書 賴協

書 蛇山

桐鳳凰 刻彫

鞠形 天明元年

黑色山水 耕石筆

○御洗 延年ともいふ舊曆七月十四日なれども御一新の祭より此式日

定まらず御洗此日は廻廊を洗らいたる後に海中へ檀をかま

へ其上に寶壽の玉を釣りしあるを島人幾百人としれず群集し

て我先きにと水中へ飛込其玉を争いとらんとすとらさじとする
水中にて上ゑになり下になり水中のはたらき中々見ものな
り此式は祭禮の外なればをこなはぬ年も有なり

明治廿八年十月二十八日 印刷
同 十一月一日 發行

定價金拾六錢

編輯兼 島村武助
發行者 廣島縣廣島市字元柳町十

一番邸

印刷者 繁岡政吉

廣島縣廣島市字尾道町百

三十五番邸

印刷所 精巧堂繁岡活版所

廣島縣廣島市字尾道町百

三十五番邸

發賣所 廣島以文社

廣島縣廣島市字大手町壹

丁目三十八番邸

嚴島特約 福田富吉
販賣所

全縣佐伯郡嚴島町

版 權 所 有

銅	巢夫去遊	草摺引 立洲	楓樹仕丁 全上
雪天鳥居 南嶂	神馬 勝田	俳諧 かほりきぬ	鳥居建築雛形
山水人物	百人首奉額記	神馬 江阿彌	讀書有至味
玄徳關羽張飛 宗眞	鳥居鹿 松林	紅葉繪俳諧 集鳳杜	能樂翁押繪
不二油繪 江漢司馬峻	太湖石 老山	錢ノ鳥居	鷺濤蜃閣 金井之恭書
和歌 三粟田	走馬 法橋祐常	俳諧發句 有節撰	大田道灌
神馬 常照	社頭圖	帆船	龍虎彫刻
神馬 連荒雄	木鹿	楓鹿	松山水 小川清處
奥羽凱陣	正直乃	宇治川戰場圖 雲嶺	神馬 平安雪亭
旭鶴	猩々	三千風 藍江	丸盆發句 大必
龍 岡煥	俳諧 自長	胡子大黒 石盤摺	七福神
發陽書 佐久間	牡丹 墨湖	和歌	馬 大江寛信
動靜 金子正十郎	芝僊竹壽 蓬洲	田植ノ圖	帆船
辨慶	梧桐鳳凰 梅山	馬	鐘馗 暗暉
梅 永年	反毛鷄 二澗	馬 藤原俊固	麒麟 中臣吞海
梅牛	俳諧 丹項	帆船	和歌
神像 加々奈邊亭	東風吹波書	羅生門	大笛
菅神射術 立洲	養和書 八歳童	猩々	松二人物
芍藥 立洲	老夫牛 梅山人	大尺八	錦帶橋
白梅黃鸝 梅山人	錦帶橋	書林玉 女	俳諧發句 雲嶺畫入
松竹梅	俳諧 風律	全上 全上	金糸細工 雲龍圖

松鷹 法橋耕月	鳥居神拜 桃江
東都青山邸	旭鷹 貞勝
菅神	成應招 字浮彫
龜上松竹梅 太田暢直	牛若辨慶
兒童遊戲 藤原廣鄉	竹
神馬 畫所預大藏大輔	龍 狩野休情
金策和歌 貞碼	壽刻字
俳諧刻字 一糸	競馬 柿本人丸
守眞書	富士越龍 伊川院
揚弓 品評記	支那人物騎馬
揚弓 品評記	蟠龍刻字
羽客文猿	獅々 豐田
楠公書	能番組
尉姥	文庫奉納書目
鹿	和歌 朝日影若菜
蓬萊書	俳諧
鹿 二樂齋	三笑
壽老鹿 山長	墨梅 春濤
婦人石橋舞	田植
俳諧 竹邨	全上 文政五壬午
全上 桐大板	莊嚴仙島 朝散太夫

楓鹿 苔石	鳥居 菜園
算法 檜山義	張良 石川紫畹
油繪外國婦人 華鳥亭	遊妓荒 芳園
扇面竹山水	婦人
鹿角	猿鹿 雪晴
壽老眠鹿 陽山	神女
神馬兔 立洲	關羽 典顯
兒童遊戲	五福書 天方
本嶋八景 寄合畫	松鷹
蓬萊 峻峯	老松 洛東光霄亭
神馬 菜園	東方朔 龍山
米點山水 文麒	巴家義 甫富
六歌仙	松虎
信實刻字	七福神 春蔭
神馬 二水	驪馬 惇則
壽老龜	神馬
猩々 南嶂	雲龍
六勿銘落款 石川丈山	松鶴 山城守
錦帶橋 素白齋	楓林煖酒
油繪 江戸門芝畫士	木馬彫工 平井
古鉄	外國船

玻璃鏡	山水 難波覃菴	漁夫 藍江	虎 東洋
全上 雪中山水	船雛形	雞	安懷 賴惟完
全上	文王呂尚 文冕	猩々獅々 惶々堂	支那人物 養川院
扇面三十六歌仙 揚震	加藤清正 張府城	雲漢書 壽山	石山寺圖 刑部大輔
鯉魚 雪塘	墨狂歌 芥川貞佐	嵐山 岡亮	菅神 押繪
旭日波	羅生門 尚信	猿鹿 祖仙	梧桐鳳凰 木公伏田
松竹梅 岷山	龍 伊川院	俳諧	牛若 法橋洞
松二旭日	龍虎 永直	八幡太郎義家 之應齋	鐘馗 峯彦
虎 泰嶺	楓鹿	賴光蛛 晨鐘	山水 杏林女
神馬 峻峯	龍 洞白	楊弓 品評記	油繪 峯鶴
耕作 永叔	神光照海 三條公	玄德關羽張飛	尉姥 二樂齋
三福神 常信	山姥 蘆雪	文法 南陵	竹根 野間屋榮助
張飛 古秀	神馬 左近	昇龍 山田氏	神馬 貞嘉陵
群馬 探信	寶船	竹根 正司又一郎	神馬 二樂齋
三浦翁輔 森桃江	彭祖 藍江	全上 鹽濱長久	競馬 峯彦
猩々 梅山	大田道灌 芳園	篤敬書	牛若 菜園
青砥左右衛門	玄德 楠亭	俳諧	龜龍刻字
大哉書 賴餘一	孔雀牡丹 紫畹	松鷹 載花	坂府天王寺堺住吉
虎 勝秀	松 雪塘	六歌仙	神輿 大巧齋
外國江灣 常春	著善書 岡野政女	將棊ノ圖	至誠書 翼山
曾我五郎 法橋	惟清書 三石	双龍 龍山	事代主命騎馬 惇清

田植 二承

龜遊萬歲池

夏神祇歌集額

肅離書 七歲童品椎

鹿 玉蘊

俳諧 北川稔春

櫻花藥鹿 峻峯

俳諧 行春乃

扇面三十六歌仙本社組入外面左右拾八枚有金地古額

太平樂 丹倫齋

嚴島五律 刻字應量海

全上 雲本雷山

印譜

全上雜詠 全上黑川道祐

生田森戰鬪 藤原常之

麒麟 大鹿角

清淨

神功皇后 驪山

福海壽山書 蒙處

萬々歲書

網斬鬼女 青柳軒

壽星抱鶴 抱一

神功皇后 雪景

鷹 綵色

辨慶 元信

神廟記 亞壑離國公

群仙

曾我朝比奈 木偶

牛若 元信

天然木龍

櫻狩紅葉狩 藤原光孚

置上蒔繪

曾我朝比奈 岸良

和歌三神押繪

大磁石 壹面

是蓬萊 鳥尾中將

嚴島七絕 刻字石川丈山

扇面歌仙本社組入外面外右脇三面有金地古額

嚴島七絕 刻字石川丈山

直實 丹覺

全上全上左脇三面有全上

敦盛 全上

鷹 綵色

蝦蟇仙人 兆殿主

彭祖 梅山

嚴島七絕 金子濟民

廐馬 長嶺

平貞盛 雲嶺

漁樵問答 二承

陵王童舞 下野國那須

納曾利 全上

竹反毛鷄 松林

耶馬溪 皆雲

那須與市 丹倫齋

錦帶橋 白峯齋

大幅山水 梧莊

東方朔 龍山

八景和歌 繁民

檀風 藍江

錦帶橋 老泉

駿龍書 東都吉思温

龍 探淵齋

歌仙本社組入左內拾九枚有但付屬額共

品尚 直彦

拾文錢寶珠 仲貞

全上全上右內拾八枚有

戩穀 爲龍

七福神

內侍出會

夏神祇歌集

虎

八幡太郎義家 有景

瓶花 逸峯

奉納和歌集

虎

八幡太郎義家 有景

孔雀 宋紫石	伯鈐 丹倫齋	築地藝藩邸 抱一	紫陽花雀 賀易金府
八雲梨一 中山梨主	松鶴 良英	慶德書 甫員	神馬 春晴
老小町 三嶺	群仙 越海芳明	靜觀書 三石	楠公 恕菴
安宅關 雲嶺	鐘馗 藍江	祭式 源重方	虎 岸湖
賴政 直彦	彫刻龜上山 左徠	牡丹孔雀 雪蕉	常磐女 法橋万壽
狂言末廣 文波	官女押畫	松 畫所預正五位	仙人渡波上 東岳
和氣清磨押畫	龍 杏雨	重暉書 三石	漁夫幹信 觀山
吳羽綾羽 應震	松虎 專定	加藤二虎 鈴月山	龜鶴年壽齋 米菴
墨畫孔雀 岸湖	陵王 秦隆恒	梧桐鳳凰 應舉	三仙人
龍虎 龍山	關羽 中原雲軒	雨中山水 楊岸	鷹
白鹿書 春水	張良 金波	蝦夷人	日影 藤原光芳
競馬 山田文厚	龍虎 連山	至誠書 清原宣諭	西王母 梅山
猿 雪晴	黃石公張良	支那騎馬武者 精一	本社圖 米齋
鹿傍吹笛	老婆少女	散手 有景	武松 南洋
左官作土鹿	虎 應舉	賤ヶ嶽 肥後白川	六歌仙 文鳴
絕妙好辭石碑 海僊	龍 雪晴	御供船 立洲	管絃船 全上
墨竹	美曾岐 吳陽	江波漕船	居管絃 梅山
籃中百花 武駿	瀑布鯉魚 探幽	眞水 爲龍	竹鷄 應舉
竹取翁 二承		槩基書畫 醫學士中村	鳥回式
自順德院至天智天皇百枚附屬寄附名額壹枚		萬古清風 三石	大杯 細野仙助
旭日走亥 中務晴川院	墨竹 岷山	婦女觀花 松霞堂	虎 龍山

○須屋浦神社 末社○例祭 三月十五日 八拾八坪

○御床浦神社 末社○例祭 三月十五日 貳拾八坪

○貝殻塚 大江の浦十三町斗りの山間にあり弘治年中陶敗亡せし後ち
殘卒此處に忍居磯邊の貝を取露命をつなぎし處なりと云ふ

○淺葱櫻 白花水色を帶ふ奇木なり

○嚴島寶館 明治廿八年四月建築御垣ケ原にあり東西廿五間南北廿五
間寶物館拾貳間興行六間嚴島寶館の額横一間天地二尺九
鬼君の筆

○嚴島神社扁額表

木馬	鶴 東洋
龜 泰嶺	壽老龜鶴 鄰茂銀
松月 平安乘久	鷹 村上榮昌
神馬 狩野探圓	東下り 魯堂
八景和歌 寛之外七名	常磐女 節心齋栞石
鷹鴉鳩 東都龍晃	竹虎 文記
壽老人 中路定矩	孔明玄德關羽張飛 狩野圓山

浦島 應震	人物 南鶴
西京下賀茂神社 岡亮秀	石摺 東坡之書
秦之豫讓 龍晃	俳諧 舛六
義士 讚岐阿賀長右衛門	彫刻雲龍
狂言釣狐	楓樹群鹿 豊後高松檜原範久
道之字 岩國屋吉三郎	八幡太郎義家 一鳳
武松 山本雲溪	負鐘辨慶 俊峯
神馬 喜山	能舞猩々 立洲
能浦島 梅山	獅々 俊峯
歌仙三拾五面	歌仙三拾三面客神社組入外側
神鴉鳥喰式 菜園	勝驗 爲龍
關羽 藤原惇清	竹虎
巖上神鴉 墨湖	俵藤太 素絢
王義之蘭亭 菁華	關羽 蘆雪
龍 岩舟	五峯樓印譜 昇齋
鷺波 雅信	獅々 愛信
楓樹鹿 春卜	波
船半面	松竹梅
漁夫幹信	鳴門海月
秋田 永叔	支那人物
能舞臺雛形	反毛鷄 冲鳴

○毘沙門堂

同所にあり方三間五尺堂中武林士武寫彌山佳景の題額あり今は焼失せり武林は孟子六十八代の裔にして忠臣藏義士武林唯七の祖なり

○求聞持堂

桁二十五間梁十五間本尊虚空藏菩薩は大師の作なり此堂は大師求聞持修法満座の靈場にして道場廿四座あり修法の行者千有余年の今日に至迄一座も絶る事なき靈場なり後ち長享元年に再興し降て又慶長年中福島正則修營せりと云ふ堂内に大師手跡其外什物ありしが惜哉堂宇共に去る十八年火災に罹り焼失せり

○御山神社

攝社○例祭 二月一日 山地 三十三坪

○石鳥居

御神前の石鳥居は元木なりしを元祿十二年卯五月五日藝藩家老上田主水（龜次郎氏先祖）氏の寄進なり

○奥の院

大師堂彌勒堂等あり今は荒廢せり
岩國より來るとび火不動石藏ありしが今は破滅せりそとばの事なり

○長濱神社

攝社○例祭 一月二十日 百四十八坪

○杉浦神社

末社○例祭 三月十五日 七拾壹坪

島巡第一の拜所なり同浦砂濱五丁余古松老杉森々たり一名相生の浦と云ふ

祭神 底津少童命

島巡の時此浦に船を寄せ上陸茅の輪を潜りて神社に參拜し神官祝詞あり笛を奏し願主始め各拜す終て朝餉の式あり最も古風の者なり以下七浦の拜式いづれも同じ

○包ヶ浦神社

末社○例祭 三月十五日 岩上三十六坪

○應巢浦神社

末社○例祭 三月十五日 貳拾坪

島巡第二の拜所なり此浦鷹の爪と云る貝あり島人ひろい取て簪其外の細工にして販賣せり

○腰少浦神社

末社○例祭 三月十五日 貳拾五坪

○青海苔浦神社

末社○例祭 三月十五日 六拾壹坪

○養父崎神社

末社○例祭 三月十五日 參拾六坪

○山白濱浦神社

末社○例祭 三月十五日 拾四坪

○總高 八間三尺七寸

○額 竪壹間貳尺三寸 横壹間貳尺

○古より凡そ此鳥居を改作せし事不詳然れども平家物語に清盛鳥居迄て造るとあり其後仁治寛元の間本社修造せしとき改造す又弘安九年應永四年永祿四年天文十六年元文四年享和元年等改造數度ありしか今其一二の棟札に曰く永祿四年建替棟札に左の書あり 奉建立大

鳥居一字當旦那吉田住人毛利大江右馬之頭元就當屋形毛利備中守大江朝臣隆元十ヶ國の大將也小早川又四郎平朝臣隆景吉川治部少輔藤原朝臣元春(以下畧之)當鳥座主大納言棚守左近將監房顯との文字あり又天文十六年丁未六月七日袖柱建立全七月二日眞柱二本全九月廿七日御棟上の執行あり盛大なる舞樂御供御湯立等の式あり全十七年義隆卿の裏書あり其後改造數度ありしか今建るは明治七年十二月斧始めありて全八年七月棟上の式あり明治二十三年十二月惣柱根元修補せり○額字は往古の分は表小野道風裏空海の筆なりと云ふも今はなし元龜元年改造の時多々良朝臣大内義隆奏請し後奈良天皇御宸筆の御額は今神庫に藏す當時の分は有栖川熾仁親王殿下の御染筆

○能舞臺 毎年舊三月十六日より三日間能興行あり伊豫廣島等より能師參集いと賑なり

○清盛山 石風呂の邊り山の鼻に清盛の碑あり

○一の鳥居跡 御山登路の麓にありしが今はなし

○折不動堂 本尊不動明は棟札裏記に毛利家人佐世元嘉文祿元年三月

中旬本將軍關白大政大臣太閤秀吉公高麗御弓矢被思召立同二年高麗悉從八月御歸朝爲在御沙汰記置者なりとあり依て太閤護身佛たると云ふ

○瀧の宮神社 末社○例祭 二月一日 七拾五坪四合

○大日堂 麓より十八町にあり御山の本堂にして所謂神護寺これなり

本尊大日如來建立は大同元年弘法大師歸朝海路の序で當島に立寄給ひ開き給ひし堂にして堂内古代の燈籠あり

○水晶石 二王門と大日堂の中間小片道路に散在せり將又一大巖石表

は常の如き石にして中央の穴より何ば數丈の石悉く水晶なりと云ふ

○船岩 全所にあり形船に似たり四方拾間の巖にして岩上樹木青々生

ず岩下石像の地藏あり

○満干石 全所にあり

○鳥帽子岩 大岩二個あり此處地御前神社遙拜所あり

○頂上石 島内第一の高峯御山絶頂にあり高さ三丈余周圍四丈余なり

増補 巖島みやげ 全

序

蜻蛉洲裡好山水多し而して其最たる者を藝の巖島と為す一幅の活畫
圖ハ懸りて佐伯郡の海上に在り其風景の奇絶清絶なる実には天巧を弄
せる者なり況んや宮室壯麗にして人工の極致曠世の偉觀を呈するに
於てをや凡そ境の殊尤なるものハミな才の優妙に待つ所有つて弥よ
其自然の美を發揮す故に此地亦た前人の題詠多く詩に歌に俳句に之を
称述する者尠からすと雖も未だ之を曲尽せる者有らず是に於て乎
道芝記名所圖會等の諸書有り以て全嶋の光景を細写し其詳を天下に
知らしむ然れども道芝記ハ元禄年間印行する所にして名所圖會ハ天
保年中の編纂に係る故に其書ハ巖嶋の古を攷ふるに餘り有るも其今
を知るにハ猶ほ尽さざる所あり加之ならず巻帙浩瀚にして旅客の携帶
に便ならず半仙堂主人是に感あり嘗て全嶋の勝地に就きて其概畧を
記し且前諸書に漏れたる所を補ひ別に一書を作す題して「巖島みやげ」
と曰ふ此書や簡にして繁ならずよくその要を得たり想ふに巖嶋に遊ぶ
者の親切なる案内者となり便利なる紹介者となるハ此を措て他あらん
や其旅客に取りて恰好の土産たることまた言ふ須るざるなり近日之を
改板するに臨ミ序を予に徴す予辭するを得ず乃ち一言を題すと云爾

明治乙未之歲春四月

焉然居士 太田貞次郎 識

○神廐 東廻廊口にあり元の湯立殿の處なり

○廻廊 巾貳間貳尺長百四十八間三尺本社東西に屈曲し壹間殊に鉄燈

籠を釣たり祭事其外獻燈せん方々社務所に案内あるへしいつ
にても點火すへし

○繪馬額 是は別に掲ぐ

○朝座屋 梁五間壹尺五寸桁十壹間八寸當時巖島講社事務所となり日
日事務取扱居れり加入申込る、人は此處に申込みあるべし

○應接所 内侍橋脇本社東傍にあり

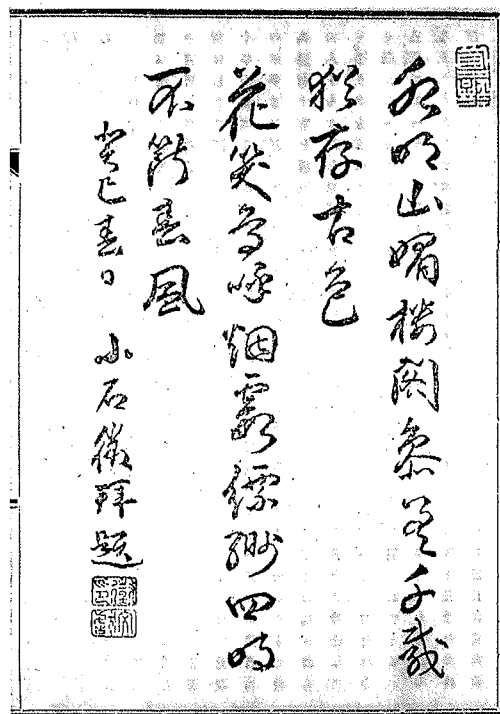
○社務所 本社西脇にあり日々社務を取扱處なり

○大鳥居 火燒前より五十貳丈八尺本社社の廣前に巍立せり

○柱 高 七間貳尺五寸 圍 五間三尺三寸

○副柱 長 十貳間壹尺七寸 上棟より軒先まで壹間六寸

○額庇 貳間 左右距離五間五尺八寸



明治廿六年四月十日 印刷
同 四月十三日出版

定價拾五錢

版權所有

編輯兼
發行者 嶋村武助 印

印刷者 神田友輔

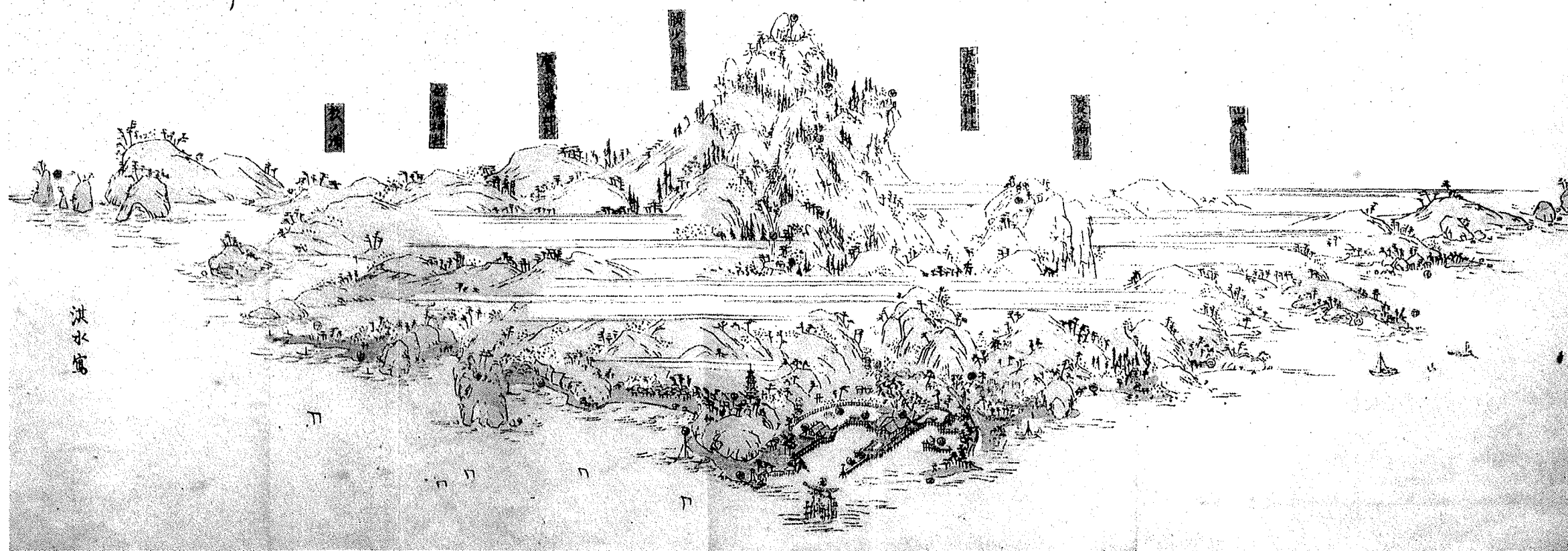
印刷所 同愛新報社活版部
丁目八十六番邸

發賣所 廣嶋以文社 印

廣島縣廣島市字大手町七
丁目八十四番邸
廣島縣廣島市字大手町一
丁目三十八番邸

順慶浦神社
 御朱印神社
 内侍石
 大元神社
 石山乃
 大龜寺
 御草松
 能義堂
 御幸社
 古きき
 大島井
 御登屋
 鏡池
 宮八神社
 三かき生
 千貫閣
 石の浦
 小うら
 西行のし
 長生堂
 清水浴場
 聖寄
 凡か谷
 龍宮
 白糸観
 中堂
 求雨持堂
 御山神社
 頂上
 奥、院
 新地ノ鼻

海上巍然
力一月
山間幽邃
梵王家
春習滿
二三月
處處香雲
皆是花
賴杏坪



明治十一年六月十三日出版 御届濟

同 年七月十日 刻成

明治十五年七月七日修正再版 御届濟

同 年七月 刻成

定價拾五錢

明治十七年七月十二日第二回修正出版 御届濟

同 年八月十日 刻成

廣島縣士族

編輯兼出版人

村田良穗 印

廣島縣安藝國佐伯郡嚴島百四十

五番邸寄留

發兌所

廣島以文社

同縣廣島區

細工町八十九番邸

*57

又近來淺野家より寄附ありし物ハ兜面鎧胴鎧膝鎧籠手臙當大袖等いづれも名作なる中に兜は宗磨の作にて世に比類なき由折紙に見あたり

れ三回めぐらして本殿に還幸なし奉るを例とせり

*58

〈削除〉

*65 ○講中の拜禮式三月に同じ

*59 并行事式

*66 本

*60 さと人の

*67 ○教會巡島 十月十五日

*61 ○月並舞樂温習 同月十五日△二月以下准之 また臨時にも行ふ

*68 故に

*62 ○教會島巡 五月十五日

*69 形種々

*63 此祭式ハ御船三艘を組で屋形を造り神輿を乗せ奉りて神官左右に列す水主ハ素袍袴にて烏帽子を冠り各棹を取るまた引船三艘蜈蚣の如く爐をおし並べて先に立ち大鳥居の前より直に地御前神社〈海向ひ一里余〉の廣前に渡り神事ありて管絃を奏すそれより本島に歸り長濱神社大元神社等の前にも管絃ありて御船を大鳥居より本社火燒崎に漕入れ祭式最嚴重なり次に客神社の御前に至り管絃等前の如しかくて御船を升形△玉の御池の内に入

*70 神園等

*71 産

*72 〈削除〉

*73 彫刻したるもの能く眞を得たりとて世に賞せらる

* 37 にて義士唯七の祖父なり

* 46 一卷関

* 38 依頼し

* 47 龕

* 39 亂聲を奏して先に進む續て願主の船も山を右になして漕出す明

* 48 幅

ほの、けしき身にしみて蓬萊巖の鼻を出れば東の方波路はるけ
き山の端よりにはひ出る朝日影の海原に輝くなどおろかなる言
葉にハ盡しがたしかくて七浦の神社を巡り本社に歸りて

* 49 〈削除〉

* 40 冷

* 50 貳

* 41 〈削除〉

* 51 四

* 42 寶

* 52 斷

* 43 ねがふる

* 53 七

* 44 の頃

* 54 八

* 45 句

* 55 〈削除〉

* 56 十三

* 20 〈削除〉

* 21 ○寶山神社

祭神 清正靈神

* 22 寶

* 23 〈削除〉

* 24 報賽ありし時此堂を造られしものなり○此處臨觀最宜し

* 25 〈削除〉

* 26 ○荒胡子神社 龜居山の麓にあり

祭神 素戔鳴尊

* 27 同所

* 28 甚清し

* 29 大綿津見神 安徳天皇 二位尼

* 30 船子どもおほく

* 31 また此濱に海水浴場の設けあり○本島ハ總て海濱に細砂をしき

て波動の強弱よく度に適ひ殊に島内遊歩の地も亦多く實に適應
の場處なりといへり因に云、鳥居ノ前、大元浦、網ノ浦、等に
ても浴す人あり何れも潮瀬緩急を量りて己が病に適度の地を撰
むものなり

碧海廻山樹色新四時風景獨絶倫遊人此地眞多事

七處胡神七里濱

世外

* 32 舊釋迦の大像を安置せる堂ありし故に

* 33 ○學校 本島内の小童すべて此門に入る

* 34 市中に遊びて旅客に馴る、

* 35 者あれば

* 36 然るに慶應二年大野村戰場となりて一年別鴉の式を怠りしより

爾來雌雄二雙と成れりされど二雙の外ハ更に増殖する事無し

*13 巾 二間二尺 長 十一間三尺

*14 總周 百九十一間四尺

*15 鶴 東洋○張飛 古秀○秀郷 素絢○三十六歌仙 書實隆公

畫光信○神鴉 墨湖○狛鈴 丹倫○印譜 昇齋○孔雀 宋紫石

龍 杏雨○鐘馗 藍江○吳王女 應震○陵王 梅華齋○虎

專定○白鹿 春水書○曹操 海僊○鯉 探幽○山水 抱一○

靜觀 高時書○松 光孚○韓信 觀山○蝦夷人物 武四郎○鷄

應學○神馬 僊助蒔繪○草摺引 俊峯○本社ノ詩 丈山自剋

○是蓬萊 敬幸書○敦盛直實 丹覺○鹿馬 畫工不詳○鷹 同

上○宗高 丹倫○檀風 藍江○孔明 直彦○波上日出 畫工不

詳○羅生門 尚信○松竹梅 岷山○繫馬 左近○三福神 常信

龍 伊川○寶船 畫工不詳○神光照海 實美公書○田植 永

叔○龍 愛信○松間日出 雅信○神馬 江阿彌○三十六歌仙

楊心○清正 元義○鯉 雪塘○狂歌 貞佐○義家 有景○馬

畫工不詳○牛若辨慶 元信○草摺引木偶 作者不詳○仙人圍

碁 岸良○三十六歌仙 書常雅公畫左光芳右光悖○耶馬溪 皆

雲○鷄 松林○漁樵 二承○蝦蟇仙人 兆殿司○神功皇后 驪

山○福海壽山 蒙處書○日東第一勝 子琴錢○山姥 蘆雪○花

紅葉 光孚○花瓶 逸峯○大印譜 桐香○神女 畫工不詳○神

廟記 士式○菊慈童 藍江○道灌 芳園○玄德 楠亭○大哉

協書○外國灣江 常春○虎 東洋○猿鹿 祖仙○太湖石 老

山○神馬 荒雄○三十六歌仙 書龍山公畫工不詳○誹諧ノ發句

蒼虬撰○福祿壽 公長

*16

○柱 高 七間二尺五寸 圍 五間三尺三寸

○副柱 高 四間四尺三寸 圍 三間五寸

○棟 長 十二間一尺七寸 上棟ヨリ軒先迄一間六寸

○額庇 二間

○左右距離 五間五尺八寸

○總高 八間三尺七寸

○額 高 一間二尺三寸 横 一間二尺

*17 すかた

*18 僅に古跡を存せり○什物に古鐘、屏風豐太閤陣中の吸筒、其他

畫幅等あり

*19 いふ

修正 嚴島宮路之枝折全

* 1 當社本殿

* 2 ○參拜順路

* 3 本殿

* 4 外二卅三座

* 5

- 本殿 〈梁間六間三尺六寸 桁行十三間二尺二寸〉
- 大床 〈巾五尺〉
- 幣殿 〈梁 三間一尺五寸 桁 三間一尺八寸〉
- 拜殿 〈梁 六間 桁 七間四尺四寸〉
- 祓殿 〈梁 六間四尺八寸 桁 十三間三尺八寸〉
- 高舞臺 〈豎 三間四尺 横 三間〉
- 平舞臺 〈平面百八十六坪〉
- 樂房 〈左右二字各 梁 二間五寸 桁 五間五寸〉

○火燒前^{ひたきまへ} 〈巾 一間五尺三寸 長 七間一尺三寸〉

* 6 〈巾 二間二尺 長 百四十八間三尺〉

* 7 松の浦

* 8

- 本殿 〈梁 五間二尺三寸 桁 七間五尺五寸〉
- 大床 〈巾 四尺六寸〉
- 幣殿 〈梁 二間三尺五寸 桁 二間四尺七寸〉
- 拜殿 〈梁 四間一尺八寸 桁 十三間二尺〉
- 祓殿 〈梁 五間一尺四寸 桁 五間三尺五寸〉

* 9 〈梁 五間一尺五寸 桁 十一間八寸〉

* 10 揚

* 11 〈巾 一間五尺 長 三間〉

* 12 〈巾 一間四尺八寸 長 十八間〉

文机のかたはらに置いてこれも又風雅の友のいくさにせむ 道直

○岩茸 御山千仞の谷なる巖壁に生ず探る者甚危しといふ

○薯蕷 御山に産するもの治養に功驗ありといふ

○松露 須屋浦に生ずるものをよしとす

○海松貝 當島の近海に産す甘味ありていやしからず

○目張魚 革籠崎の邊にて釣たるもの味ひ殊に美なり

○櫻海苔 御床浦邊より出る雅人の賞すへきものなり

○鹿角菜^{*72} 本社の前又杉ノ浦等に生ず形鹿角に似て色青し所謂ヒ

ジキと異にして風味雅なり

○總太郎漬 糖^ねを水に浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なり

とて賞せり

○雪花漬 豆腐^{から}の壳に魚肉貝肉等を漬て風味はなはた愛すへき

ものなり

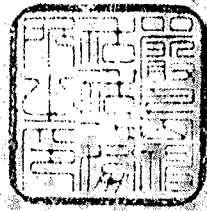
○裏櫻餅 御垣の原にて鬻^ひく上戸のしらざる味ひまた愛すへし

都まで風の便りにかをり來てその名ゆかしきうら櫻かな 三屋子

○木鹿 島人小川良平字米齋といへる老人能く眞を得て彫刻せ

り明治十年内國博覽場へ出して花紋賞牌を拜受す

明治十一年六月十三日御届濟
同 年七月 刻成



著編並出版者

廣島縣士族

村田良穗

住所 第一大區十一小區

大須賀村千廿六番邸

同縣

廣島播磨屋町

製本所

末田勝次郎

行ひ其後御船三回めぐらし大鳥居を出て大元神社の御前に至り祭式長濱神社の如くし竟て御船を三笠濱に返して神官各本社に歸る○此祭式を拜んと諸國より集ひ來れる船舳艦相接て海原を狹しとす此夜各船の帆柱屋形等また戸々の屋上に掲げて獻る神燈幾數万なることを知らずさらぬたに月明らけき夜燈火の影廣き海面を照し管絃の音心耳を澄して誰かハ渴仰の思淺かるへき實に海西の大祭壯觀また類ひなかるへし○此祭式ハ薄暮汐のさし來る頃より始めて子刻はかり汐の退く頃終るを舊來の式とす故になほ陰曆六月十七日相當日を以て行ふなり昔ハ神官供僧左右に列座して神官管絃を奏し供僧伽陀を修したりしか明治四年改めて上文の如くなりたり

地似蓬壺開別寔危橋層閣一灣々鳳調僊管月娥舞龍負神舟天女還廊底潮聲人踏海街頭燈焰市燒山豈知游客繁華夢在此林猴野鹿間 霜山

因に云此祭式に御船の供奉として廣島の町々より御供船と稱し猩々緋に金銀の糸もて種々の繪を縫たる幕を走らし幟吹貫を押立今様の音曲を囃しつゝ、祭禮の前夜廣島の川口を出て本日祭式に關り翌日廣島に歸る遠近の男女これをも見んとて群集なす事またおひたし

○教會講社安全祭 九月十七日

○同 靈神祭

同月同日

○菊花祭

以菊花盛定日○舞樂に振鉦一曲曾利古賀殿へ舞ナシ萬歳樂延喜樂散手貴德陵王納曾利等あり○式ハ桃花祭におなしく音樂中菊花を寶殿に獻す

*67

○天長節祭

十一月三日○舞樂に萬歳樂延喜樂陵王納曾利等あり

○神衣裁縫

十二月廿六日より廿九日に至る

○御煤拂式

同月卅一日

○鎮火祭

同月同日○午後第六時松明の式あり

○産物

當島に産して人のよく賞譽するものを舉ぐ

○色楊枝

當島に産して人のよく賞譽するものを舉ぐ
かたち種々に削りなして五色に染わけたる最美しきものなり

○杓子

大小種々ありいにしへ島人清心といへる者削り初めたるを清心杓子といひて用ゐるに甚だ便りよし

○木匙

近來ハ西洋形に削なしていとたくみなるあり

○木盆

模様種々彫刻せり中にも大鳥居の舊材また御幸松の古木等を以て造れる者あり好事の人愛翫すへし

○蘭

御山の深谷に生す石蘭柔蘭片葉蘭鶯蘭若千鳥蘭孔雀蘭等の數種あり文客盆栽にして愛すへきものなり

片葉蘭といへることを物名によめる

一日ハ未明より戸々きほひ出て神前に至り潮を汲み家をそゝき身を清めて本社に參詣するを例とす是を若潮迎へといふ

明治九年一月一日廣前にはへりて

^{*60} おり立てくむや御前の若潮にはのほのしらむ去年の月影

良穗

○同二ノ祭 同月二日○舞樂に萬歲樂延喜樂あり

○同三ノ祭 同月三日○舞樂に太平樂拍鉦胡德樂陵王納曾利あり本日

日の太平樂ハ治承年中左大將德大寺實定卿本社の廣前にて奏^{かを}たまひしを例として世々神官野坂家にて勤め來れり○因に云當社の舞樂ハ最上古より傳はりていにしへの盛なりしことハ神庫に収まれる樂器を見てもしるへしまた拔頭蘇香還城樂等の秘曲もみな舊神官の家々に傳はりて今に存せり○舞樂奉納せんと願ふ人あれハ臨時にも行ふ事あり

○楊枝獻上祭 同月四日○楊枝ハ當島産物の第一なり故に獻す

○斧始式 同月同日

○地久祭 同月五日○舞樂に振鉦甘州林霞拔頭還城樂あり○本日

ハ未明より行ひて朝日影御山の嶺よりにほひ出て舞人の面を照すを例とせり故に日の出祭ともいふ

^{*61} ○月並説教 同月從十一日至十三日△二月以下准之 また臨時にも行

ふ

○月並祭 同月十七日△二月以下准之

○月並和歌會 同月廿五日△二月以下准之 天神社の拜殿にて行ひ兼題

の短冊を神前に掲ぐ

○教會講中安全祭 三月十七日○講中の輩ハ幣殿にて拜禮を許す

○同 靈神祭 同月同日

○推古天皇祭 四月十八日○舞樂に萬歲樂延喜樂陵王納曾利あり

○桃花祭 以桃花盛定日○舊ハ三月十五日を定日とせり○舞樂に

振鉦一曲曾利古桃李花△舞ナシ 萬歲樂延喜樂散手貴德陵王納曾利あり○此祭式ハ薄暮よりはしまりて音樂中桃花を寶殿に獻す

^{*62} ○管絃祭 舊曆六月十七日相當日○此祭式ハ御船三艘を組て屋形

を造り櫓に鏡を取懸け矛と並へて舳前に押立正面にハ宮司案に向ひ左右に禰宜以下列座し水主ハ素袍袴にて烏帽子を冠り各棹を取るまた引船三艘蜈蚣の如く艦をおし並へて先に立ち大鳥居の前にて本社にむかひ神事ありて即地御前神社△海向ひ一里余の廣前に至り神供祝詞の式ありて管絃を奏すそれより長濱神社の御前に漕付け祭式管絃前の如しかくて御船を大鳥居より本社^{ひなまき}火燒前の前に漕入れ禰宜神饌を供し宮司祭文を告りて管絃を奏す次に客神社の前に至り祭式總て本社^{ひなまき}の如く

○古銅印

二顆

○古錢

三百八十九枚

豐太閣社參の時納めたまひし賽錢なり

○年中定祭日

*
59

官祭

○月並祭

一月一日△二月以下同之 御簾捲垂神饌進撤祝詞奏上神
宜拜禮等の次第ハ祈年祭の條に委くしるす餘ハ准らへ
てしるへし

○日供

祭日の外日々獻す

○元始祭

同月三日

○孝明天皇祭

同月卅日○御垣の原に遙拜所を設く

○祈年祭

月日不定○二月四日式部寮に於て班幣あり地方廳へ到
着の上吉日を卜して祭日を定む其式ハ地方長官以下祭
に關る官員及び神官共に前日より齋戒す當日早旦神官
神殿を裝飾し午前第八時神官地方官一同幄舎に着く次
に御幣物を幄舎の前に入置く次に宮司社殿に昇りて御
簾を捲き畢て側に候す此間奏樂次に禰宜以下神饌を傳
供す此間も奏樂次に屬御幣物を辛櫃より出し假に案上
に置く次に宮司御幣物を神前の案上に奉り座に着て祝
詞を奏す次に地方長官玉串を奉り拜禮畢て幄舎に復す
次に屬以下拜禮次に宮司玉串を奉り拜禮次に禰宜以下

○紀元節

二月十一日○遙拜所同上

○神武天皇祭

四月三日○同上

○例祭

六月十七日○祭式祈年祭に同くして地方次官同屬等參
拜あり

○大祓

同月三十日

○神嘗祭

九月十七日○遙拜所同上

○新嘗祭

十一月廿三日○祭式祈年祭に同し

○大祓

十二月卅一日

○除夜祭

同月同日

私祭

○神衣祭

一月一日○午前第一時神官一同幄舎に着き禰宜神衣を
内陣に奉る○神衣ハ白綾に龜甲の紋を織出したるもの
なり前年機殿に注繩引廻し服工禊してこれを調し社頭
に収む神官これを裁縫て本日此式あり

○新年祭

同月同日○舞樂あり振鉦えんぷ

因に云當島に家居せる者ハ毎朝小桶を持て神前の潮を
汲歸り屋内を清むる事一日もおこたる事なし殊に一月

○墨

壹挺

○弓

九張

○文臺

硯箱共

壹脚

○矢

十五筋

○太刀

五十三口

○甲冑

五副

螺蚬 兵庫鐐 嚴物作 裝束ノ帶 錦包藤卷 衛府 新髭切^{*52}

綱切 稻光 彦左近 等と銘せるものありて作ハ 信國 天國

友成 貞秀 一文字 久國 助次助家兩作 國俊國行兩作 菊

一文字 兼光 等を以て稱譽す

○劍

三口

○古鏡

○刀

四十五口

○曲玉

亂髮 と銘せるものあり作ハ 正廣 則國 西連 左文字 保

昌五郎 地藏信國 助國 等を以て稱譽す

○七寶杯

○短刀

卅三口

○青磁塔

天國 神息 友成 波平 行平 國光 正宗 國行 國俊 志

○蘭奢待香

津三郎兼氏 國光 兼光 村正 定廣 等の作あり

○赤柄檀

○薙刀

五振

○沉ノ櫓

長五尺三寸余

貞宗 宗貞 等の作あり

○沈枕

○鎗

七本

○青磁枕

信國 金道 等の作あり

○黃楊駒

上に擧けたる銘ハ人々のよく稱讚するものを抜出たるに

○銀獅子

て此外にも名作數多あれハなほ悉く熟覽して焼刃匂等の

○木馬

眞味を知るへし

○欵器

辨慶の翫物と傳稱す

春日作と傳稱す

源義家同義光平重盛大内義隆等の着用ありしもの各一
副また小櫻絨一副あり殊に古の名作なりと傳稱す^{*57}

○具足^{*58}

五領

毛利家より四領淺野家より一領寄附のものにて何れも
威毛美なるものなり

二面

十二顆

壹箇

壹基

壹包

壹包

壹本

壹箇

壹箇

壹頭

壹頭

壹頭

壹具

殊勝なるものなりまた第五八九條道房公愛翫の器なり
と傳稱す

○太鼓

五挺

○羯鼓

三挺

○二ノ鼓

壹挺

○三ノ鼓

壹挺

○蠻繪判木

壹枚

○小忌衣

壹領

○法華經

高倉天皇宸筆

八卷

○壽量品

同上

壹卷

○壽命經

同上

壹卷

○經卷

壹函

法華經二十八卷無量義經觀普賢經阿彌陀經心經願文各一卷都て卅三卷平相國清盛公の寄附にして願文ハ公の自筆にて餘ハ一族三十二人各壹卷を分ちて書寫ありしものなり其裝飾の結構盡善盡美實に當時平家の隆盛見るに足れり

後の世をあらはれとへとや武士のたけき心もそめ紙にして

○法華經

八卷

平清盛同賴盛の兩筆なり

○理趣經

弘法大師筆

壹卷

○般若心經

同上

壹卷

○細字法華經

同上

八卷

外函豎三寸横二寸深壹寸七步字形の小さき事おしてしるへし

○華嚴經

筆者不知

五拾五卷

○袈裟

反古の裏に寫して殊勝なるものなり○反古經とも云

壹肩

○鈴杵臺盤

弘法大師隨身品

壹具

○五鈷三鈷獨鈷

同上

各壹握

○赤栴檀佛像

毗首羯摩作

壹函

○古文書

神領 制令 祭祀 營繕 寄進 雜翰 等各部分なしたり

貳百十八卷

○榮花物語

松木内大臣宗條公筆

全部

○奉納和歌

藤原經尹卿筆

壹卷

○和漢朗詠集

冷泉爲成卿筆

壹卷

○本島八景畫詩歌

諸名家筆

三卷

○百人一首

外山光和卿筆

壹冊

○香記

外山光和卿筆

壹冊

○掛物

外山光和卿筆

壹冊

○紫石硯

巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり

壹面

○紫石硯

巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり

壹面

○紫石硯

巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり

壹面

つく○春の頃貝拾ひに便りよけれハ少女どもの打むれ

て遊びあへる處なり

○網の浦

此邊も櫻おほし○大元浦へ越んとする處を或人花の洞

といへりしか實に其名空しからすといふへし

○什物^{*42}

寶庫に納まり拜見せんと望む人ハ社務所にいひ入る^{*43}

へし

○高倉天皇之御扇

壹本

○安徳天皇之御翫具

六品

御衣 石帶 笏 飾劔 箆 檜扇 何れもいとちひさし

○宸翰

貳拾五枚

○親王御染筆

貳枚

○葦手書檜扇

壹本

○假面

九面

拔頭 還城樂 陵王 納曾利 散手 貴德 採桑老 二ノ舞

同腫面^{*44} 以上承安四年朝廷より御寄附のものなり中にも拔頭

の面ハ享和二年天覽に備へし時古物殊勝の品に思召れ

大切に致すべく旨敕翰を賜ふ

○奚囊

壹振

假面同時の御寄附なりと言傳ふ

○鼈

壹挺

同上

○笙

五管

第一小櫻第二春風第三小男鹿第四國家丸第五獅子と稱

す中にも小櫻ハ高倉天皇御愛翫の器なりしを治承四年

御幸の時御奉納ありしものなり

小さくらの笙を見はへりて

亂れたる世々をさくらの名もしるく昔の儘に香ふ笛の音^{*45}

有年

○簫

壹管

○笛

三管

第一ハ駐腦にて造り第二ハ銅第三ハ異なるものにあ

す中にも駐腦の笛ハ豐太閤征韓の時彼國より奉りしを

毛利家に賜ひ同家より本社に寄附ありし者なり

○高麗笛

壹管

○和琴

二張

○箏

壹張

法華と銘あり○律板柱とも添ふ

○琴

壹張

表裏とも斷紋あり○平重衡愛翫の器にて唐の雷家の作

なりと傳稱す

○琵琶

五面

第一谷川第二瀧浪第三磯浪第四落月第五無銘なり中に

も第一谷川ハ玄上を模して作れりし者なりと傳稱し最

○鷹巢浦神社 島巡第二の拜處なり○此浦に鷹の爪貝といへるあり

祭神 底筒男命

○腰少浦神社 島巡第三の拜所なり

祭神 中津少童命

○伊豫松¹⁴¹ むかし伊豫の人此浦にて小松を引かへりしか忽崇りありけるを恐てかへし植たるものなりと言傳ふ

○鯨崎 比目魚に似たる石あり故に名つく

○青海苔浦神社 島巡第四の拜所なり○島巡の時午飯の式あり

祭神 中筒男命

○陶全姜敗死跡 青海苔浦の奥十丁余高安ヶ原といへる地なり全姜ハ

大内義隆の臣なり主家を亡して勢ひ近國におよはんとせしを毛利元就のために滅せらる

○養父崎神社¹⁴² 七浦の外なり

祭神 靈鴉

此處ハ濱もなく洲もなし故に島巡の時船中より拜すかくて神官海中に棗を浮へ樂を奏すれば靈鴉忽ち山上より翔來りて波に浮へる棗を啄へて御山にはこぶ是を鳥啄式といふ○此式を行ふ事願主の望による事なれハ定まれる日なし故に久しく行はざる時あり又一日に五組十組かさねてこれを行ふといへとも靈鴉の行ひかはる事なく万一あやまちて船中に穢あれハ靈鴉棗を運ふこ

となしといふ

輕波一棹賽春祠七浦風光逐次移笛裏神鴉飛欲下

舟人搖櫓目遅々

愼齋

○山白濱神社 島巡第五の拜所なり

祭神 表津少童命

○葦籠崎 當島南の鼻なり是より西を島の表とす○此地に早咲の

櫻一樹ありて雨水の頃より蕾を破る

唐ころもはるまた寒き浦かせにはころひ初る花のした紐 爲子

○須屋浦神社 島巡第六の拜所なり○島巡の時餠餅の饗あり

祭神 表筒男命

○磯の清水 磯際にありて潮退きたる後一小池をなし涌出る水甚清

冽なる故に往來の舟人これを汲て須屋の清水と賞翫す

○御床浦神社 島巡第七の拜所なり○神前に大なる巖ありて龜甲の文

をなせり

祭神 市杵島姫命

○内侍岩 大江の浦にあり治承年中徳大寺實定卿本社に參詣あり

て歸洛の節島人有子内侍あかぬ別を惜み此浦まで送り

來りて悲歎の泪にくれし處なり○かくて後内侍此島を

あくかれ出て津の國住吉の沖にて身を沈め果敢なくな

りたりとそ

○蹈鞠瀉¹⁴³ 平宗盛寄附の鐘を鑄さしめられたる處なるによりて名

○奥ノ院

大師堂彌勒堂等あり

○龍ケ馬場

巖上に馬蹄の跡あるか故に駒ケ林といふといへり或云馬蹄の跡といへるハ弘中隆包毛利元就と戦ひし時陣とりたる幕串の跡なりまた駒ケ林ハ駒返しうまがへしの誤りなりともいへり

○三劍ノ窟

往古劍を収めし處なりといふ

○龍ケ窟

むかし龍の出しといへる巖穴あり深さ量るへからず

○護摩谷

磐石覆ひかゝりておのつから一室をなせり弘法大師護摩修法ありし處なるにより内に大師の像を安置す○これより二王門に出て元の道に歸るまた谷路つたひたひ踏たふ躪も出でる道もあり

○巡島式しめめぐりしき

此式ハ大神鎮座のはしめ大宮處を定んとて佐伯鞍職所の翁等神鴉の先導にしたかひて浦々を巡りたまひし例にならひて七浦の神社に拜し鳥啄とくの式を行ふなり其式ハ願主吉辰を撰みて島廻りの事を社務所に言入れ38神官の承諾を聞き本日未明より各褻祓して船に乗る此時神官の船にハ四手切かけ紳39おし立先に進む續て願主の船に水主とも艫拍子揃へて聲はり上げ船唄うたひつ、山を右になして漕出す明ほの、けしき身にしみて蓬萊巖の鼻を出る頃東の方波路はるけき山の端よりにはひ出る朝日を拜し浦々の神社を巡りて本社に歸り神樂を奏

○聖崎

すを例とす○以下島巡りの順次にしるす
當島北の鼻なり是より東を島の裏とす

○蓬萊巖

形畫かける蓬萊山といふものに似たり

ゆふしはやこ、ほうらいのはなの浪

若翁

○海氣

清明の後殊に長閑なる日蓬萊巖の沖なる海上へ一面の金氣發して中に宮殿樓閣樹木等のかたちあらはれ暫くありてかつかつ消散し所謂蜃氣樓のたくひにしていまた其理を究めたるをきかず土人ハこれをも蓬萊といへり○古説にハ此邊の海底すへて金砂なるか故に其氣の發するものなりといひ近來ハ海草の氣の蒸發するに社頭の景色の反射せるものなりともいふ

○杉ノ浦神社

島巡第一の拜所なり

祭神

底津少童命そつわうのみこと

島めぐりの時此浦に船を寄せて神社に參り神官祝詞竟りて笛を奏し願主はしめ各拜す（以下七浦の拜式いづれも同之）拜をはりて朝餉の式ありはなはた古風を存す

○金岡水

杉ノ浦の奥二丁にあり○此邊平洲に金砂おほく交れり40
さる故にや水寒冽にして且甘味あり

山かけに千代の契もむすはなん清水をなつの命にハして

央

○包ノ浦神社

七浦の外なり島巡の時船より拜す

祭神 鹽土翁

三鬼神を合せまつりて大神の御名ハ稱ふる者もなく隠れたまひたりしを明治四年舊に復して斯く祭る事とハ成たりまた大神鎮座の山なれハ御山と稱へしを佛家の徒山勢の不凡なるを須彌山に比して彌山と改めしかこれをも舊に復せられたり

○神鴉

形細くして凡鴉に異なり始祖ハ大神當島に御鎮座の時したかひ來れる由社傳あり毎年雌雄一雙を産し陰曆九月廿八日同郡海向ひ大野村大頭神社に於て四鳥の別をなし親鳥の行方をしらす里俗ハ紀伊國熊野へ行くといへりかくて雌雄一雙當島にすみて常に一山を離れす○因に云大頭神社のあたりを別鴉の里と云

御山神鴉 八景の一

世と共に勅て神に仕ふるをあさからすとや見そなはす覽 重遠

○求聞持堂

本尊虚空藏菩薩ハ弘法大師の作なり此堂ハ大師求聞持修法満座の靈場にして修法の行者千有餘年の今日に至るまで一座も絶る事なしされハ圍爐に焚く火ハ大師開持より傳はれりといふ○堂内に大師の手蹟其外什物あり

○關伽井

大師修法の加持水にして甚清冽なり

○曼陀羅石

磐面に梵字また眞字を鐫^{あが}たり大師の作なりといふ

○時雨櫻

花しけくして露深し山風にあひ散かゝる露さなからし

○玉取石

くれに似たり
石面に玉を取りたりといへる痕あり

○鐘撞堂

治承元年右大將平宗盛寄附の洪鐘を釣たり

○毗沙門堂

堂中に武林士式の寫彌山佳景と題せる額あり士式ハ孟子の裔なり

○頂上石

當山の絶頂にあり

○龍燈杉

數百歳を経たる老杉なり近年大かた枯行きてたふれたるまゝ、僅に枝葉の青きを存せり○此處ハ龍燈を臨觀するに便よけれハ龍燈の上る夜ハ遠近の男女この杉のもとに群集す故にかく名付たり龍燈とハ舊來正月元日同六日の夜等當島浦々の海面より現ハるゝ火をいふ火色常の燈火に異ならず山上より臨めハ漁火の如しといへとも間近く見れハ尺餘の一團火波を照して海底より浮ひ出る形勢甚すまじといへり

初月沈山夜氣凝老杉風外坐巖稜茫々海面昏如墨

現出神龍幾點燈

桑老

明治六年一月一日夜龍燈のあかりけると聞きて

波の上にけふさゝくるハわたつみの都も年やたつの燈火

千枝

○船岩

形船に似たり

○大日堂

大同元年弘法大師の建立なり○堂内に木造の燈籠あり
甚古代なるものなり

なれとも天文の禍ひに舊記を失ひたれハ委しき事ハし
るよしなし然れとも治承の御幸に當院の住職を阿闍梨
になされまた天正年中に仁助法親王御止住の事見え
りされハ昔時寺格の輕からさりし事思ひやるへし祈禱
堂に豐太閤の守本尊たりし等身不動明王を安置す〇什
物の内聖德太子の像ハ巨勢金岡の畫きたるに後京極攝
政良經公の讚ありて珍らしき者也此外弘法大師の眞筆
等あれとも畧すまた豐太閤當院の書院にて和歌の會を
催したまひたりし時の歌三十六首を一軸にして是又秘
藏せり

五月はかり大聖院にやとりて

山かけや行水くらき川の瀬に岩きりとほし飛はたるかな 貞勝
消もせて庭のかしハの葉かくれに螢いきつぐ雨のゆふ暮 正精

〇多聞坊 眞言宗にて彌山本願と稱せし寺なり

〇西方院 眞言宗なり〇當院の庭ハ雪舟の造りたるものなりといひつたふ

〇一の鳥居 御山登路の麓にあり

〇祈不動堂 本尊不動明王ハ豐太閤の護身佛なりといふ

〇瀧宮 一の鳥居より一丁余

祭神 湍津姫命

〇白糸瀧 瀧宮の山上より落て水勢甚はけしく實に白糸を亂せる

か如くいかなる早にも渴るゝ事なしまた此邊螢おほく
瀧のしら玉に散みたるけしきいとすゝし

瀧宮水螢 八景の一

雲井より落くる瀧の宮のへに星となかれて飛はたるかな 忠敏

〇御幸石 治承四年高倉上皇この石上より白糸瀧觀覽ありしといふ

〇中の堂 一の鳥居より七丁余此處迄登路甚峻艱なるか故に參詣

の人おほく此堂に憩ふ〇名物ちから餅をひさぐ

〇幕岩 數百丈の巖壁さながら幕を張りたるか如し

〇力石 里諺に云福島左衛門太夫正則登山の時此石の邊にて怪

異の事ありしにより直に下山ありけるよし故に太夫戻
の石ともいふなり

〇二の鳥居 一の鳥居より十五丁

〇二王門 古ハ未剋より後此門を限りて登山を許さゝりしか明治

四年改革ありてより此禁なし

〇水晶石 表は常の石に異ならず中央の穴より窺へハ數丈の石中

悉く水晶なりといふ

〇御山神社 一の鳥居より十八丁

祭神 市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命

當社ハ大神當島へ御鎮座のはしめ影向ありし御舊跡な
るか故に三柱の姫神を鎮めまつりしにいつの頃よりか

谷ヶ原麋鹿 八景の一

やつかはらむつれて遊ぶ鹿見れハともに樂む神の御園か 千廣

因に云鹿の名所を谷ヶ原としも定めたるハ然ることなからまた神垣に眠りあるいハ旅客に馴て心長閑に遊へるなど皆憎からぬさまなり抑鹿ハ大神の蓄たくわと稱して往古よりこれを獵る事を禁じ代々領主の保護嚴しく若誤て害する事あれハ即罪に行はる故にその數年々繁殖すつらつら考ふるに鹿ハ神代に太麻邇ふとまにの占業うらわさに用ゐられまた迦久神かぐのかみといへるも鹿のことなりといへる説ありて幽冥にしたしく仕奉る獸なり瑞應圖に云鹿者純善之獸ナリ王孝則白鹿見ハルとも見えて角あれとも常に怒れる色なく其性の狡猾ならざるを神も愛したまふなるへし

○神力寺

眞言宗なり○舊此地に寶泉院といへる寺ありしか廢寺となりける故當寺を瀧の尾より移したるなり

○秋葉神社

南町にあり

祭神 火産靈神

○紅葉谷

溪水清くして巖石奇なりかけ渡す橋のさま最趣深く兩岸に櫻の大木ありて花の頃ハ薫れる白雲樓の軒にたなひくあるひハ時鳥を聞き暑を避るにたよりよく紅葉ハ元より谷の名におひて見るかきり染つくし又雪の日ハ

玉子酒の樂み自在にて雅となく俗となく四時に客のたゆる事なし

紅葉谷に落花を見て

水かよふ櫻かもとの岩間より潜りかねたる花のうたかた

おくしれぬ花のなかる、かけひかな

川中の棧敷にす、みける日

川浪のおとをまくらのうた、ねに秋を渡せる夢のうき橋

秋日遊楓谷

丹楓蔭水々奔流臨水家々起小樓想得絃歌人散後

數聲鹿鳴滿山秋

谷の紅葉染つくしたりとき、て

日をへなハ鹿の蹄に罹るへしとく行て見ん谷のもみち葉

巖藻亭にて

おとさむき夕山おろし吹すきてまどに落くる小男鹿の聲

○四之宮

紅葉谷にあり○此邊秋夜虫聲いとなし

祭神 不詳

鳴く虫も夜ころの月に面なれて影すむ方に聲しきるらむ

○瀧町

筋違橋を渡りて御山に登る道なり○以下御山神社へ參詣の順次にしるす

○大聖院

眞言宗なり當院ハ代々本社ほんしの別當職にて座主と稱したりしか明治四年改革の際社役をはなる創立は大同元年

○新町

いにしへハ最賑はへる遊廊にて全盛の大夫もあまた在
しかいつの頃よりか菅搔の音淋しく打掛の錦うらさび
て踏ならす高足駄の音ハさしかけ傘の柄と共に長く絶
果だり實にきのふの淵ハけふの瀬と替る流の身の定め
なきに此處もまた遊女の故郷となりたり

○梅林

梅ハ近年植たるものなれとも地味相應なしたるにや
年々に繁茂し花の頃ハ山風遠く薫りて衆人の袖に餘る
されハ文客かならずたつぬへき處なり

さきぬとてまつ鶯に告やらむつかひさねなる梅のあさ風

清

かし鳥のかをりにむせふ聲すなり梅の山路の春の夕くれ

榎蔭

眼にあたる木ハみなうめの月夜かな

筵史

○徳壽菴

存光寺の隱室なり堂内に金石の地藏菩薩を安置す

○瀧の尾

山上にさ、やかなる瀧あり此處ハ釋迦の³²大像を安置せ
る堂ある故に舊ハ大佛の原といへりしを近年改て今の
名になりたり○此邊も櫻おほき故に櫻か茶屋なといへ
る樓ありまた雪の眺望も甚よしとす

梅柳いろもにほひもあかなくにこハまたさくら花の大君

元延

雪の降ける日丸木樓にあそひて

白雪ハ神垣ならぬあたりまでゆふかけてこそ降積りけれ

隆正

はねた木のゆきや雪ちるゆきのうへ

巨桃

○北之神社

舊ハ北之薬師といへりしか改革の際神社に改れり

祭神 猿田彦大神

○寶壽院

眞言宗なり本尊阿彌陀如來ハ往古當島網ノ浦の海中よ
り顯れて靈驗多しといへりまた堂内に豐太閤の納たま
ひし薬師如來を安置す

○鳥居松

岡の上に松二樹並ひ立るさまの鳥居に似たるに依て名
つく此邊も櫻おほく眺望よき處なれハ霞たなひく春の
頃ハ遊客宴を開きていと賑はしきところなり
ときは木に眼をやすめけり花さかり

鳳郎

○本町

北ノ町中ノ町幸町等の名ありて商家軒を連ねたり中に
も名物の色楊枝杓子木盆等をひさく店數多あり

○幸神社

幸町にあり○此邊を金鳥居ともいへり足利氏銅の鳥居
を建んとして其功を竣ざりし處なりといひ傳ふ

祭神 猿田彦大神

○塔の岡

本町より本社に參る要路にして五層塔ある龜居山に
つ、けるか故に此名あり

* 33

○光明院

淨土宗なり天文の頃住職ハ八上人ハ不凡の大徳なりし
と傳稱す

○谷ヶ原

茫々たる平原楓谷の山上につ、けり麋鹿常に群をなし
て淺芽色つく秋のころ妻とふ聲のあはれなるハ風流士
のはらわたにしむなるへし

なり

三笠濱暮雪 八景の一

誰もみな家路わすれてきてそ見る三笠の濱の雪の夕くれ
月のかげ花の光もおよはしとみかさの濱にふれるしら雪
美静

少年龜太郎

世にたえし粧ひやゆきのいつくしま

梅室

○有ノ浦

諸國の船當島に來るものハ大槩此浦に湊ふされハ參客
の送迎諸荷物の運輸等常に賑はしき處なり

有浦客船 八景の一

漕とむる船もあまたに有の浦のうら安けなる波の上かな
ねきことのありの浦輪の友舟や花紅葉にもつとふ成らむ
季知 春齡

○蛭子神社

有の浦にあり
祭神 事代主命

○尼ノ洲

壽永四年壇の浦にて入水ありし二位尼の尸此處に漂ひ
つきたりし所なりといひ傳ふ

○水天宮

濱の町にあり舊ハ神泉寺境内にありしか明治四年改革
の際此處に移す

祭神 安徳天皇^{*29}

○存光寺

禪宗なり

祭神 天照皇大神

○今伊勢神社 伊勢町の山上にあり

○宮ノ尾

毛利元就陶全姜と合戦の時陣屋を設けられし處なり故
に要害の鼻ともいふ

○小浦

漁夫船子どもの住居する處なりいにしへハわびたる家
のみなりしか今ハ樓など造りたるさへありて籠の烟も
いと賑はへり

しほたれて色なき海人の袖をしも長閑にかへす春の浦風

忠

○蛭子神社

祭神 事代主命

○西行返

西行法師此處に來て島の女に道を問たりしにとみに應
へもせざりしかハ空蟬のもぬけのからにこと問へハ山
路をさへもをしへざりけりと詠たりしに女ほゝゑみて
もぬけのからかとこそよむへけれ既にからにと定めた
まひたれハ答ふるによしなしといへりけれハ西行詞な
くて此所より空しく歸りしと云傳ふ

○長濱

一名八重濱ともいふ此邊も櫻おほく眺望いと面白きと
ころなり

村雨のはれしなきさに露ちりてさゝ浪かをる花のゆふ風

蒲園

*31

○長濱神社

長はまにあり
祭神 興津彦神 興津姫神

○二王門跡

長濱より本町に越ゆる道なり此邊も櫻多し
祭神 所ノ翁

○瀧本坊 同上

○清盛旅館跡 久保町にあり

○留主口恵比須神社 中西町にあり

祭神 佐伯鞍職

○金刀比羅神社 同上

祭神 大物主命

○御手洗川 本社の後の流をいふ水源ハ紅葉谷の奥より出る

○筋違橋 御手洗川にわたせり

*²² ○神庫 筋違橋の東にあり○寶物ハ卷末にあぐ

○花園 本社西廻廊の後をいふ櫻おほし

風塵易負是烟霞咫尺江山萬里賒獨與嚴洲緣不惡

五年兩度去觀花

ちれハまた咲つく花のいつく島櫻の果ハさくらなりけり

咲しより花を離れぬ胡蝶さへ夜ハねぬるを我やなになり

○御幸松 後白河法皇御幸の時此處に松の木の御所と稱へし行宮

のありしといひつたふ

○御垣ヶ原 本社の後なり舊ハ本地堂ありけるによりて觀音の原と

いへりしを明治四年改革の際本地堂を取除きて今の名に改りたり此邊も櫻おほし○此頃石の大鳥居を寄附せ

んと願出たるに許可ありたり額の文字ハ三條實美公の

筆なりといふ

○三翁神社 同所にあり○九月廿三日舞樂を奏す

祭神 佐伯鞍職 所の翁 岩木翁

相殿 大己貴命 猿田彦大神 平相國清盛

○千疊閣 龜居山に建り豐太閤九州へ發向の時本社に參詣ありて

大神の冥助を祈り翌年凱陣の折柄また船をよせて賽あ

りし時此岡に楠の大木ありけるを伐らせて大經堂に造

らせたまひたりしものなり○古より梁上に猿數頭栖を

なして市中に求食しか近年漸く數すくなくなりて今ハ

僅に二三頭のこれり

○豐國神社 千疊閣の内にあり

祭神 豐太閤

*²⁵ 明治十年西南の役に討死せし兵士の招魂祭を同年十月此山に

て行はれ尚かの人々の名を右に彫て建らるゝと聞きて

万代にくちぬ名しるき處えて龜居のやまにのこす石ふみ 政躬

○五層塔 應永十四年七月建立といへりされと願主詳ならず

*²⁶ ○文庫 龜居山の麓にあり本社の書籍を藏す

○湯立殿 同所にあり

○三笠濱

本社

の邊すへて三笠の濱なれともわきて廻廊の北口よ

り龜居山のおもとの海邊をいふ○此處左ハ本社の殿宇

建連り右ハ遠く海向ひの山々を望みて雪の景色最好趣

明治八年七月大鳥居の更に建けるときよみはへる

暑き日も神の御前のわたつみにつはさ涼しく鳥居立なり

魯堂

涼しさやとりゐもしほに浮くはかり

一鳳

これて足るあきのけしきや大とり居

蒼虬

○松原

右ハ玉の御池左ハ御手洗川の流にそひて長くさし出たり
松の木間に石燈籠あまた立ならひて是又社頭の光景を添

ふ

○大願寺

眞言宗なり明治四年改革の前ハ本社修理造營の事を掌と
れり庭内に小松内府の植たまひしと云傳ふ老松ありしか

今ハ枯て古幹¹⁸つかに轉倒せり○什物も數種あるか中に

豐太閣陣中の吸筒といへるものあり形太鼓の如くにして

をかしきものなり

○住吉神社

舊ハ大願寺の境内なりしか改革の際神地をわかつ

祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命

○石風呂

石を疊み土を塗て室を造り松を燒き潮をそきて海藻を
しき病者を入らしむ此風呂弘法大師の所造にして功驗甚

多しといひ諸方より來れる客寒中のほかハたゆることな

し

○大元浦

平原海に臨みて數株の櫻枝を接し花盛の頃ハ蒼々たる草
の上に紅の氈敷て遊宴の興かきりなくはるかに大野の山

を望みて夕陽を惜まぬ者なし

大元櫻花 八景の一

大元の花のさかりに成にけり神のをとめも袖やふるらむ

忠秋

おなしくハ櫻の限りしめはへて誘ふ嵐をよそにふせかむ

繁民

くろき羽を花にわり込むからすかな

梅通

○大元神社

大元浦にあり○一月廿日百手の式を行ふ

祭神 國常立尊 大山祇命 保食神 ○相殿 佐伯鞍職

○橘山

此邊時鳥を聞くに便よき處なり○因に云當島にてハ時鳥
いとおほくおのかさつきの頃となれハ山にても鳴き浦に

ても名のり誰かハ待あかしてつれなしと恨る人のあるへ

き

なれもまたむかししのふか時鳥たちはな山の夕くれの聲

石子

いへいへに聞してゆくやほと、きす

鏡操

○經の尾

平清盛小石に法華經を書て納られし所なり

○空穂谷

秋夜草むらにすたく虫の音いとあはれなり

浅ちふや月に玉しく露ふけてむしの音そよく夜半の秋風

賴玄

むし鳴くやしつかにひ、く磯のなみ

快々

○神廐

本社の神馬を飼ふ處なり

○多寶岡

多寶塔ある故にかく名付く此邊も花見によき處なり

とりをさへ逐ふはなに此あらしかな

似水

*21

○愛染院

眞言宗にて大聖院の末派なり

○玉御池 大鳥居より内潮の到れる涯をいふ○大神鎮座の昔此處

に玉をうつみたりしによりてかく稱ふと云傳へり

○齋垣

△總周 百五丈八尺三寸△玉の御池の岸上に建り

○繪馬

社頭の梁間にかゝけて大小すへて幾百枚なることをし
らすされハ玉石を撰ます人々よく稱呼するものをわつ
かに擧ぐなほ好事の人熟覽して筆意の淺深を味ふへし
○左に記載する順次ハ筆蹟の甲乙によらず東廻廊より
西廻廊に至る是ハ見ん人の便に隨ひてなり

菊慈童ノ圖 藍江筆○龍 杏雨○孔雀 宋柴石 ○印譜 昇齋

○三十六歌仙△三十六面 歌實隆公畫光信○狛鋒 丹倫齋○秀郷

素絢○關羽 蘆雪○鯉 探幽○鐘馗 藍江○白鹿 春水書○

吳羽綾羽 應震○張飛 古秀○龍虎 連山○東京築地 抱一○

韓信 觀山○神馬 細野僊助蒔繪○蝦蟇仙人 兆殿主○時宗義

秀 俊峯○敦盛直實△二面 丹覺○鷹 畫工不詳○廐馬 同上○

宗高 丹倫○壇風 藍江○羅生門 尚信○楓下鹿 春卜○松竹

梅 岷山○秋田 惇則○野馬 探信○三福神 常信○神馬 左

近○龍 伊川○田植 永叔○龍 愛信○神馬 江阿彌○三十六

歌仙 楊心○文王 文晁○鯉 雪塘○墨ノ狂歌 貞柳○本社ノ

詩 丈山自刻○牛若辨慶△二面 元信○馬 探幽○綱斬鬼女 青

柳軒○時宗義秀ノ木偶 作者不詳○仙人圍碁 岸良○誹諧文

三千風○三十六歌仙△三十六面 歌宗鑑畫元信○同△三十六面

歌常雅公畫△左光芳右光傳 ○耶馬溪 皆雲○瓶花 逸峯○神廟

記 武林唯七自剋○山姥 蘆雪○福海壽山 蒙處書○神功皇后

驪山○太平樂 丹倫○玄德 楠亭○散手 有景○外國灣江

常春○漁夫 藍江○虎 玉娥○猿鹿 祖仙○三十六歌仙△三十

六面 歌龍山公畫工不詳○曹操 海僊○内侍 畫工不詳

○題名 西廻廊の梁にあり○はせ千松 尊圓親王御幼少の時かき
たまひしものなりといひ傳ふ

○大鳥居

火燒前を距る事五十二丈八尺本社廣前の平沙に建り潮満

時ハ參詣の船帆を揚げながら鳥居をくゝりて入來るもの

あり○古より改造數度なりしか今建るものハ明治七年十

二月斧始ありて同八年七月棟上の式ありしものなり

○柱 △高 四丈四尺五寸 圍 三丈三尺七寸

○副柱 △高 二丈八尺二寸 圍 一丈八尺五寸

○棟 △長 七丈三尺七寸 上棟ヨリ軒先迄六尺六寸

○額庇 一丈二尺

○左右距離 三丈五尺八寸

○總高 四丈七尺五寸

○額 △豎 八尺三寸 横 八尺 ○有栖川二品熾仁親王御染筆○

昔の額ハ表小野道風裏空海の筆なりと云傳ふれと存在せる
ものなし元龜元年改造の時大内義隆奏請ありし後奈良天皇

宸筆の古額ハ今神庫に藏す

浪の上もみなともし火の花咲て春をとこよのわたの大宮

種守

夏神祇といへることを

す、しさのいつくハあれと嚴島神のまにまに浦風そふく
はらへするきねか姿もいつくしま夕日を洗ふ波の涼しさ

清綱
清矩

七月十日はかり嚴島の社頭に侍ひて

浦松の風もおとせぬ夕なきにしほみちくらし月そ浮へる

尊福

社頭賞月

百八廻廊圍海宇大潮滯月夜過午此時安得起龍王

同見凌波素娥舞

適處

社頭に侍りける夜千鳥をきゝて

燈火もまはらに更て大宮のわた殿ちかく千とりなくなり

幹之

○客神社

天忍穗耳尊

祭神

五座

天津彦根命
活津彦根命
熊野樟日

命

○寶殿

○大床

○幣殿

○拜殿

○祓殿

○鏡ヶ池

客神社の傍玉の御池の内にあり汐退きて後平沙に丸く
窪みたる處ありて一小池をなせり秋夜月影この池にす

める最あはれに清らかなり

鏡池秋月 八景の一

嚴しまいつくハあれとくもりなきか、みか池の秋夜の月

正風

○朝座屋

梁 三丈一尺 桁 六丈七尺五寸

○朝座の清水

朝座屋の傍なる御池の内より常に湧出て甚寒冽なり
潮退きて後汲むことを得るなり又藥の水ともいふ

○神供所

○社務所

○上水橋

同上
巾 一丈七寸 長 一丈七尺三寸 かたはらに平判官康頼

硫黄ヶ島より流したる卒都婆の寄り付たりしといへる

石ありまた康頼歸洛の後寄附の石燈籠一基建りかたち

甚古雅なるものなり

○大國神社

祭神 大國主命 相殿 保食神

○天神社

祭神 菅原大神 又云天社天神

○長橋

○反橋

○能舞臺

○行宮跡

能舞臺のあたりをいふ高倉上皇御幸の時此所に御所を
設けられたりといひつたふ

御鎮座ありてへ御山神社其舊跡なりといふ。推古天皇の御代佐伯鞍職に示現ありけるにより大宮造立ありしものなりといふ。かゝれハ當島舊ハ恩賀島といへりしを。大神鎮座ましましけるにより神の御名を島の名におほせて市杵島とも伊都伎島とも稱へまた嚴島とも稱ふなるへし又宮島といへるも古くものに見えたれとも今ハ公の御文にすへて嚴島と稱へられたり斯て創建の後度々朝廷より修理を加へさせられ祭式も重く行はせられける由いひ傳ふれとも天文十五年當社神主源廣就佐伯郡櫻尾の城主たりし時大内義隆に亡され舊記多く兵火にかゝりて失ひたれハ往古朝廷より御寄附等の證據となるへき文社藏ある事なし然れとも延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都岐島神社〈名神大〉とあり三代實錄に御贈位の事二度まで見ゆれは當時御祭式等のおろそかならざりし事おしてしるへしかくて平相國清盛安藝守たりし時より渴仰の思ふかくさらに神領を増加し社殿經營功を盡し攝末社に至るまで残る處なく修理ありけれハ世に比類稀なる壯觀とそなれりける殊に承安四年後白河法皇御幸あらせられまた治承四年高倉上皇御幸の節にハ金銀の幣捧けたまひて御崇敬淺からざりし御事なり其後鎌倉の將軍家續て足利氏また本國の鎮守大内毛利福島淺野氏よりも時々祈願を籠られ神領寄附米許多ありて絶ず社殿に修理を加へ祭式怠る事なく行はれけり明治元年朝政一新の際改めて勅願所に定めさせられ年々御撫物を治めたまひ同四年神佛混淆引分となりて別當供僧を廢止せられ尋で國幣中社に定めさせたまひ祭式等嚴重に改りけるハ誠にありかたき例にこそハ有けれ

○本社正殿

祭神

三座

市杵島姫命

田心姫命

湊津姫命

相殿

三座

國常立尊

天照皇大神

素戔鳴尊

○寶殿

梁 三丈九尺 桁 七丈九尺八寸

○大床

巾 五尺 周 廿八丈六尺

○幣殿

梁 一丈七尺 桁 一丈八尺

○拜殿

梁 四丈 桁 七丈九尺五寸

○祓殿

梁 四丈六尺八寸 桁 六丈四尺一寸

○高舞臺

梁 二丈二尺三寸 横 一丈八尺九寸

○平舞臺

梁 貳百拾三坪

○樂房

梁 一丈四尺 桁 三丈

○火焼前

巾 一丈五寸 長 四丈三尺七寸

○門客神社

二字火焼前の左右にあり

祭神

櫛石窓命 豐石窓命

○廻廊

巾 一丈三尺五寸 長 九十丈五尺五寸

本社に左右に長く
屈曲して一間毎に鉄燈籠を釣たり
汐満ときハ數多の燈
火波に移りて光景たとへんにもなし

杜頭明燈 八景の一

影うつる月の光も消たれけり波のほてらす宮のともし火

芳樹

へし。總て現今の實景を著ていさ、かも謗言する事なし

一神社佛刹名所古跡等錯列せるハ。本社より始て攝末社等順拜の便りに因てしるしたるものとしるへし

以上

具撰

立かへり

みやこの人に

かたらむも

言葉ハつきし

いつきしま山

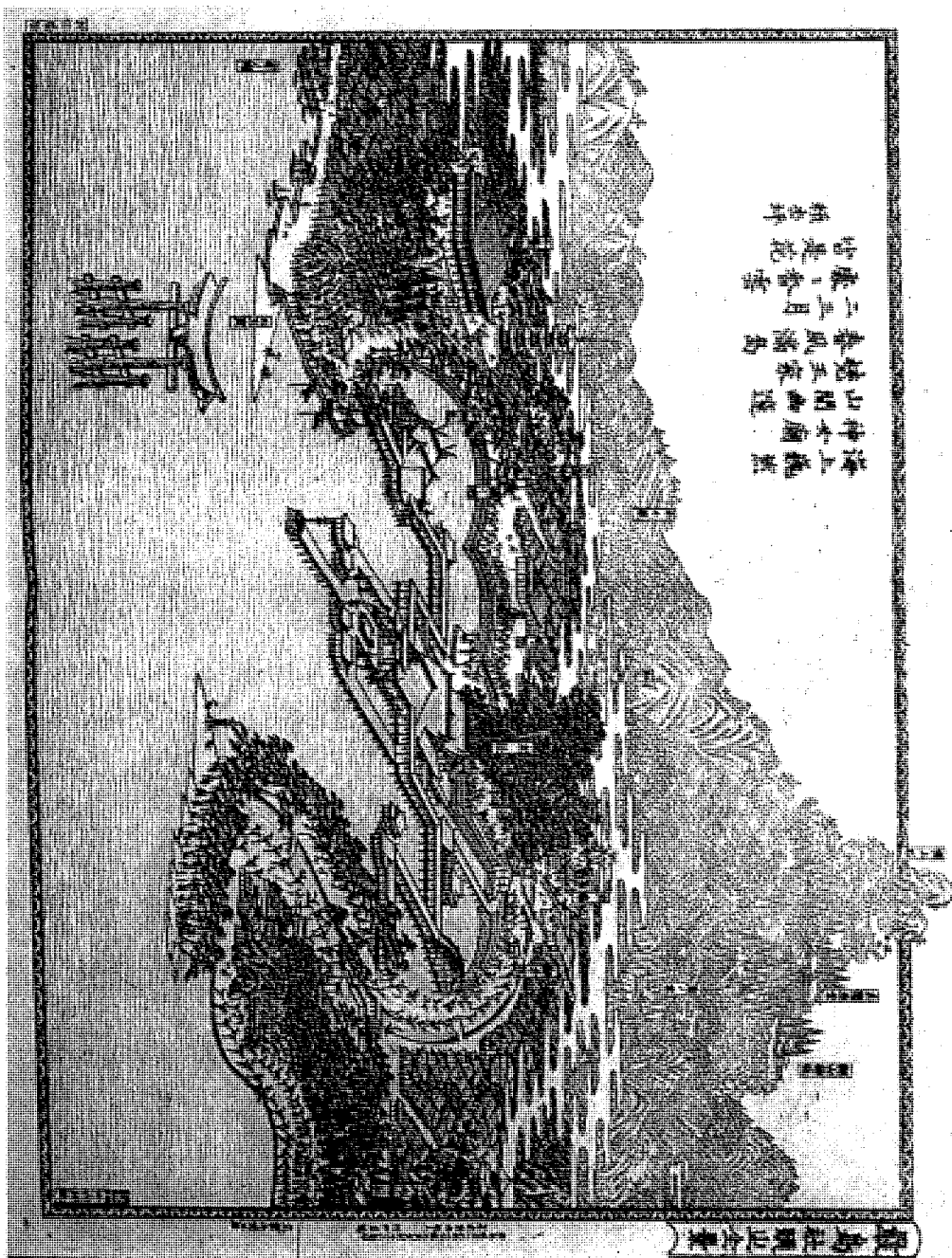
嚴島宮路の枝折

廣島縣安藝國

村田良穗編

嚴島ハ安藝國佐伯郡の海中に在て周廻七里。北の方廣島を去ること五里餘。西の方ハ同郡大野村最近くして一里に充ず。南ハはるかに周防伊豫の山々を見渡し。東ハ能美江田等の諸島に對し。山嶺巍々として松杉色深く人戸千軒本社のかたはらに市をなせり。殊に當島ハ櫻樹數株ありて艷陽の花の頃ハ。白雲長く連なりて山の腰に蹺蹺す本社ハ戌亥の方に向ひて三笠濱の下津岩根に宮柱太敷立て。潮満時ハ大宮の床

下まで浪をたゝへて。遊へる魚も手に捕るはかりなり。抑本社寶殿に鎮りまします三柱の姫大神ハ掛卷もかしこき素戔鳴尊の御子におはしましけるか。天照大御神の神勅のまゝに。葦原の中津國に天降りまして天孫の爲に祭れたまふ我か皇國の守護神たりへ以上神代紀の意を取。斯て當社に御鎮座ましましたる事ハ人皇三十四代推古天皇の御代端正元年大歲癸丑一書に端正五年とあり。然れとも大歲癸丑とあるに依れハ元年なるへし○端正ハ年号にあらず天皇即位の年をいふといひつたふ安藝國佐伯郡の住人佐伯鞍職と所の翁（名不詳）二人同郡恩賀島に魚を釣てありしに紅の帆を揚て西の方より來れる船あり近づきて船中を窺へハ舳前に嚴鋒に赤幣立たる嚴瓶を置て三柱の姫宮おはします。鞍職にむかひて宜まはく吾ハ古より此島を敷て幽事を治め百王を鎮護す汝朝廷に奏て此島に造宮すへしと示現あり。即鞍職都に上り神託の次第奏聞を遂けるに。折節都にてもまた神變ありけるによりて。奏す隨に杜殿造營すへく勅命あり。鞍職畏りて當島に歸り。先づ大宮造るへき地を定んと新に船を造て舳前に五百津眞坂樹五百津野篠の八十玉串に珍の幣帛とりかけて。當島の浦々を巡るに靈鴉山上より飛來て舳前に進む乃ちこれを導の神として海濱を漕回行くに竟に三笠濱に止るかくて佐伯所の二翁諸人をひきゐて三笠濱の大石小石を打ならし遠山近山の大峽小峽に立る樹を齋斧以て伐取り。高天原に千木高く新宮造建て其歳の十一月辛酉朔壬申常世の神籬と祝ひ定て鎮奉る（以上當社鎮座記の意を取。また古傳に人皇十一代垂仁天皇の御代大神此島に



嚴島宮路之枝折全

序

尊きあたりに参り。面白き處に到てハ。親しき友をしのひ。歸たらんにハ。とありし。かくありしなど。かたらん事を。誰しの人も必まつ思ふ事なり。されと山を越え。海をわたりて日數へぬれハ。忘ぬる事とも少からずして。急に思ふんことかたき事になんありける。我か嚴島は廻七里はかりの島なれと。宮居の高大なるはいふもさらにて。此處も彼處もみなゆゑよしある所々にしあれハ。ひとたひふたひ参りたりとて。などかハ委うすへき。然る故に元禄十年小島常也嚴島道芝記七卷を撰むこれそ當島の來由。祭式の次第。名所の故事等を纂しもの權輿にハありける。其後天保七年岡田清筆とりて。嚴島圖會十卷を編成す。此は繪もまたたくみにものしたれハ。この島に渡らぬ人すら。これを見ハ。大宮の壯觀祭式の嚴重。寶物の形狀名所の緣由なども。委うしらるへきものにしあれと。従者などをもつれず。ひとり杖をひきて参れる人々の。さる容易からぬものを負持たらん事。旅籠にあまりていと重かるへきことなり。されは島内にむねとある條々を摘み。また圖會のなりたる後。神佛混淆引分の事あり。しかして國弊中社になりたまひたれハ。祭式の改りたる地名のかはりたるなどをあらはし。

彼の圖會に洩たる事ともをも拾ひあはせて小冊となすへく。すゑむる人のあなるに。おほけなきわざなから。かくものする事とハ成けり。かれハ故事などの委からぬを咎むる事なかれ。これはたゞ此神社に参りたる人々の。三五日かほとに本社よりはしめて攝末社。さて八名たる所々をも廻らむ道のしるへともなり。且ハ家に歸て。とありしかくありしなど。人にかたらむこゝろおほへの料にとてなむ

明治十一年五月廿日はかり神園の立花

かをりくる朝座屋の窓下に筆をとりて

琴秀舎主人しるす

凡例

一此編ハ究て簡約を要す。されと現今所在の攝末社ハ小祠といへとも一字も洩す事なし。然るに天保七年所編の嚴島圖會に見えて此編に載せざる神社往々あり。其ハ明治五年改革の際最寄の神社へ合併になりたるものとしるへし

一寺院も現今所在のものハ悉く擧ぐ。是又彼圖會にありて此編になきもの多し皆廢寺に成たるなり又地藏堂等の深き來由なきハ省けり一名所古跡等も悉く洩す事なし。されとも殊なる趣もなく。指せる由緒もあらざるハ總て省けり。また故事ハ畧言して其大槩をしらしむ。委くハ彼圖會に引合せて見へし

一古と今と景況の替りたる。地名の改りたる等ハ其處々に附ていふ

資料館所蔵の案内記等一覧（明治期）

番号	資 料	寸法（縦×横、cm）	編 著 者	刊 行 年 月	出 版 ・ 発 行 所 等	印 刷 人 等	備 考
1	厳島宮路之枝折 全	三・二×二五・三	村田 良穂	明治十一年七月	村田 良穂	末田勝次郎	本文二七丁、定価二十銭
2	修正 厳島宮路之枝折 全	三・八×二五・三	村田 良穂	明治十七年八月	村田 良穂	広島以文社	第二回修正、本文二三丁、定価十五銭
3	厳嶋みやげ 全	三・九×二四・七	嶋村 武助	明治二十六年四月	嶋村武助・ 広島以文社	同愛新報 社活版部	本文二二丁、定価十五銭
4	新撰 厳島独案内 全	三・八×二五・〇	平野 岩雄	明治二十八年八月	平野種太郎 （蓬山堂）	平野種太郎	本文四六丁、定価二十銭
5	増補 厳島みやげ 全	三・五×二四・四	嶋村 武助	明治二十八年十一月	嶋村 武助	精巧堂 繁岡活版所	本文二五丁、定価十六銭
6	厳島名所案内記 全	一八・三×二・五	山本 寅吉	明治二十九年八月	山本 寅吉	田井久之助	本文八一頁、定価十五銭
7	厳島名所しるべ 全	三・五×二五・〇	所信文	明治三十年六月	江上 順吉	田井久之助	本文一〇二頁
8	厳島神社宝物一覧	一八・六×二・六	井口謙造・林榮麿	明治三十六年三月	林 榮麿	田井久之助	本文七三頁
9	厳島案内 GUIDE TO TSUKUSHIMA	一八・五×二・六	高坂 徳市	明治三十七年十月	高坂 徳市	高坂印刷部	本文九六頁
10	厳島案内記	一八・三×二・二	岡本 織人	明治四十二年三月	厳島実業倶楽部	明輝社	英訳付、本文五四頁、 定価三十銭
11	厳島案内記	一八・八×二・九	児玉 周平	明治四十二年八月	春錦堂	瀬田律三	本文九二頁

関係者の作品とみられるものが多い。

なお、『巖嶋みやげ』は、「立花のかをりくるあたりの老人(村田良穂)のかたるを聞てしるす」(序文)とあるように、挿図を除いて本文は『修正巖島宮路之枝折』と同一であり、『増補巖島みやげ』は、『巖嶋みやげ』に項目を加えて、更にその配列(参拝順路)を変更したもの。また『巖島案内記』(児玉著)も『巖島案内記』(高坂著)と写真を除きほぼ同文となっている。

これらは、記述内容に類似点が多く、また「近年、案内記寫真帖の類相續いて出づと雖考證精確ならず、記事動もすれば怪異誇大に馳せ」(重田定一『巖島誌』明治43年)とされるように、歴史的事実や名称、史料の引用などに誤りもみとめられるが、江戸時代の資料を含めた相互の比較によって、明治期の概況や江戸時代から明治期にかけての巖島の変遷などを探る上で、貴重な手がかりを与えてくれるものと考えられる。

凡 例

- 一、本号では、一覧表のうち1・2・3・4・5・9・11をとりあげ、
 - 1・4・9は全文、2・11は1・9との異同箇所及び奥付、3は挿図・題辞・奥付のみ、5は「増補」された項目及び奥付を収録した。なお、9・11の写真、11の「略図」は省略した。
- 一、2・11の異同箇所については、1・9で該当する箇所・範囲を*

印および傍線で示し、その部分を掲げた。また削られている場合は〈削除〉とした。

一、資料の収録にあたっては、原本の形に沿うようにつとめたが、印刷上の制約や通読の便宜を考え、次のような点に配慮した。

- 1 本文は9ポイント明朝体を基本とし、小見出し等はゴシック体で示した。また注記は8ポイント明朝体とし、割注についても一行書きとしてへんでくくった。
- 2 段落・改行は、適宜ととのえた。
- 3 題辞・挿図は、原本の位置に準じて配した。
- 4 印判は、㊦・㊧と略した。
- 5 表記については原文のとおりとし、旧字体や異体字などもそのまま用いたが、改めた場合がある。
- 6 誤字・脱字などで意味のとりにくいものについては、訂正し、またはへまゝと注記した。
- 7 ふりがなは、原文のとおりとしたが、9・11については省いた。

資料紹介

明治期の厳島案内記

宮島歴史民俗資料館

高橋修三

厳島は江戸時代の中・後期に、歴史・文化や信仰・風俗、社殿の景観・宝物など、厳島を網羅的に記述した『厳島道芝記』（七巻）や『芸州厳島図会』（十巻）をはじめ、詩歌・俳諧の作品集である『厳島八景』（三巻）、厳島神社に奉納された絵馬をまとめた『厳島絵馬鑑』（五巻）などが出版されている（『宮島町史 資料編・地誌紀行Ⅰ』、『宮島の歴史と民俗』No 11、12など）。そのため厳島の全体像や特色が広く世に知られるようになり、なかでも『厳島図会』は、詳細な記事とともに多数の「真景図」が挿入されており、その後もながく厳島を訪れる人々の指針となり、さらに「実地を履する人のために眼を悦ば」せ「事跡を索る人の為に益ある」（序文）読物ともなっている。

明治期に入ると、こうした背景のもとに『厳島図会』を主な拠り所として、枝折・土産・独案内などの書名をもつ「案内記」が相次いで出版されている。一覧表はそれらのうち当館で所蔵している関連資料であり、木版本・活版本、絵図入り・写真入りの別はあるが、いずれも小冊で江戸時代の上記諸本に比べて小型化しているところに特徴がある。

これは、「厳島図会（略）」は従者などをもつれず。ひとり杖をひきて参れる人々の。さる容易からぬものを負持たらん事。旅籠にあまりていと重かるへき（略）たゞ此神社に参りたる人々の。三五日かほとに本社よりはしめて撰末社。さては名た、たる所をも廻らむ道しるへともなり」（『厳島宮路之枝折』序文）とあるように、旅行者が携帯して厳島を巡覧できる書物を刊行しようとしたためであり、『厳島図会』などに倣って本社・撰末社・名所・祭事・宝物等、網羅的に（『厳島神社宝物一覧』は除く）記述されているものの、その内容は全体に簡略化されている。

また、「図会のならたる後、神仏混淆引分の事あり（略）祭式の改まりたる、地名のかはりたるなどをあらはし、彼の図会に洩たる事ともを拾ひあわせて」（『枝折』序文）、あるいは「島内に於ける名勝旧跡の現状を紹介せんがため編纂せるもの」（『厳島案内記 GUIDE TO ITSUKUSHIMA』例言）など、明治維新以後の厳島の実況に記述の重点をおいていることも特色となっており、年中行事や廻廊に掲げられた絵馬などが比較的詳細に紹介されている。

編著者については、ほとんどが厳島在住者（その約半数が厳島神社神官）であるが、編纂の具体的な経過も含めて、詳細については今の所不明な点が多い。そのうち『厳島宮路之枝折』の著者村田良穂（一八二七―一八八四）は、国学者で藩校皇学教授・厳島神社祢宜などを歴任しており（『広島県史 近代Ⅰ』）、書中に収められた詩歌にはその

宮島の歴史と民俗 No. 14

平成10年 3 月15日 印刷
平成10年 3 月25日 発行

編集 宮島町立宮島歴史民俗資料館

発行 宮島町立宮島歴史民俗資料館
〒739-0533 広島県佐伯郡宮島町57

TEL 0829-44-2019 FAX 0829-44-0631

印刷 株式会社 ニシキプリント

